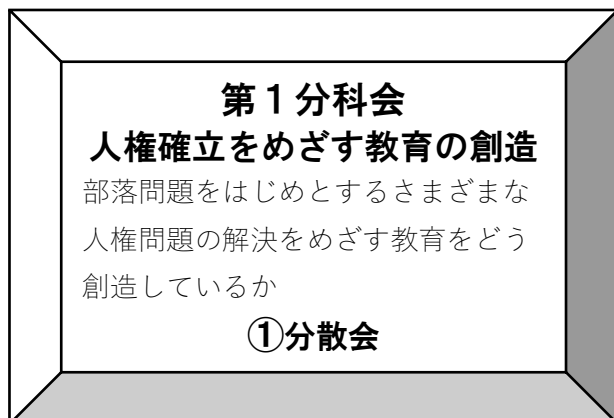




I はじめに

分散会基調に先立ち、司会者団、報告者より自己紹介を行う。

地元スローガン「むなつき坂をこえて、すべての人を包摂する社会の構築を奈良の地から」についての説明。それに引き続き、第1分科会の討議テーマ①～⑥の説明をする。

日程説明の後報告・討議に入った。

II 報告及び質疑討論の概要

一報告1ー①

育児担当制のあゆみ (奈良県人教)

一主な質疑と意見一

奈良 育児担当制に向けては、私たちの発想を変えなければならない。育児担当制に向けて学びの機会や参考になる書籍・資料などがあれば教えてほしい。

香川 小学校教諭をしていてこのような取り組みは初めて聞いた。子どもを担当して詳しく見ていくということと、一斉指導との関係はどうなっているのか。

徳島 Rさんのことを書かれていたが、保護者は育児担当制についてどのような思いをもっていたのか、できる範囲で教えてほしい。

報告者 育児担当制というのは、排泄、食事、睡眠など、子どもたちの生活にとって一番生活の基盤となることを、同じ担当者が関わって、子どもの成長を見取っていくこと。子どもにとっても、この部分はデリケートな部分。同じ保育者が関わることで、子どもが安心して成長していける。また、担当制であっても0～2才児クラスは、保育者が複数で保育しているので、みんなで子どもを見守ることはできる。担当者を中心に子どもの世界を広げている。また、一斉に動く時は、子どもが10人いても、10人が一斉に動くのではなく、担当制の5人ごとに動いている。少しずつ時間を

ずらせて行動している。

また、次の学年への引き継ぎなども、担当者が変わっても大丈夫のように、子どもたちが活動していた環境（人的・物的）はそのまま引き継ぎ、子どもが安心して生活できるようにしている。

（情緒の安定をめざしている）

奈良報告者の園より

今までの育児は大人が主導で行われてきた。それを見直し、子どもを中心にした育児が求められているのではないか。そのことは、子どもの人権を大切にする意味からも必要ではないか。子どもの背景を知る。知った上で担当者が子どもを中有心に据えた保育をする。保育者との信頼関係を築くことで、人を信頼できる人を育てることができると考えている。情緒の安定は、信頼、人権保育の基礎となる。

一報告2ー②

「めいぜんさんのやさいとこどもたち」

(徳島県人教)

一主な質疑と意見一

愛媛 周りからの支えがあり、小さな成長の様子がよくわかった。質問として、①地域の人とのつながりを具体的に教えてほしい。②小学校との連携はどうなっているのか。今までの少人数から集団の人数が増えていることへの対応など。

香川 この保育所は、戦後の部落解放運動から立ち上がってきている。部落問題に関する人権課題や地域の様子、地域の願いなどを教えてほしい。

滋賀 とてもきれいなレポートだ。私たちは、この全人同研の発表を通して、保育者・教職員がどういう風に変ってきたのか、自分は何をしてきて、何に気づいたのかを発表してほしいと思っている。このレポートもよくまとまっているが、発表者の気づきや変容を教えてほしい。

報告者 毎年地域のフィールドワークを実施し、地域の方々の思いや願いを聞かせていただいている。地域の基幹産業に「鼻緒作り」がある。子どもたちと一緒に私たちも鼻緒作りに携わっている人たちのお話を聞くことにより、地域の人たちの思いにふれることができる。小学校との連携は、人権劇の練習などを通じて子どもたちの様子をお互いに伝え合っている。子どもたちも自分の思いを発信できる場になっているか、また友達の思いを受けとめられるようになっているかを確認

認している。

まずは、一人一人を認めていく。人と関わって生きていく。人とのつながりを大切にしている。

滋賀 部落差別・障がい者差別など様々な差別問題には偏見が深く存在している。時代が変わっても、何も変わっていないことを我々は確認した。このままだと、同和問題自体が風化してしまうことを危惧している。

愛媛 明善保育所さんは部落解放運動と深い関わりのある保育所であると感じている。Dさんの家庭背景を通して、差別の実態や差別の現実をどう見ているのか。また、保護者への啓発はどうしているのか。

報告者 Dについては、家庭訪問を繰り返して保育所の方針を伝えてきた。お母さんも不安を感じやすい人で、問題は避けられるのであれば避けたいと考えていた。Dもそれと同じで、まず、不安を取り除く取り組みの必要性を感じた。様々な取り組みを通して、年長さんになり積極的に取り組むようになってきた。Dの保護者に対しても、子育てを一緒にやっていこうと声かけをしていた。

一報告3－⑤

「ちがい」を受けとめあえる社会に向けて (埼玉県人教)

一主な質疑と意見一

滋賀 今から20数年前、教え子から「障がい当事者の仲間を引き裂いているのは教師だ。」と指摘されたことがある。そうではないと反論しながらも、いろいろ考えさせられた。そして、考えついたことは、「自分はどうか考えているのか」である。「特別支援教育について、あなたはどうか考えているのか。」自分の考えがブレたらだめ。また、日本は国連より、特別支援教育をやめるように勧告されている。つまり、特別支援教育という分離教育が差別教育にあたるということをどう捉えているのか。

報告者 私も3年前、ある教師から「お前は差別教育に片足を突っ込んでいるんだぞ。」と言われたことがある。その人も特別支援学校に勤務している人だった。それからインクルーシブ教育について考えたが、どうしたらいいのかわからなかったことがある。ただ苦手なことを克服するということは、子どもの能力を伸ばすことだと考えている。いろいろな考え方があると思うが、子どもにとっていいと思うことをしっかりやっていくこ

とだと思っている。

大阪 支援が必要な子って一体誰なんだろう。私は学校に来るすべての子どもが、支援が必要な子だと思っている。支援は、大人の教師がすることもあるし、子ども同士で支え合い、いろんなアイデアを出し合って繋がっていくことだと思っている。子どもが十人いれば十通りの考えがあり、子どもと一緒に知恵を出し合って子どもの居場所を作っていくのが教育の姿だと思う。それが、今まで同和教育が綴ってきた財産だと思う。そんな財産を崩してしまうのはとても悔しい。

大阪 「なかよし学級」ってどんなところ？と聞かれてあなたはどうか答えるのか。みんな悩んでいる。「ふつうの子」が内で、「ちがう子」が外、という意識がある。「ちがう」ということが、僕らとはちょっと違う子という差別の壁を作っていないか。その壁を作ったのは誰なのか。学校であり、そういう制度を作ってきた法律だと思う。私は「そういう制度だから仕方ないね。」と喋りまわす教師にはならないようにしている。「うー、うー言っているのは、喜んでいるだよ。」と言える教師になりたい。

1日目の総括 1本目の奈良県からの報告は、三宅幼稚園が取り組んでいる育児担当制についてであった。従来の一斉指導を見直し、0～2才の乳児に対し、担当の保育者を中心に、子どもに関わっていくという報告だった。0～2才の乳児にとって食事、排泄、睡眠、衣服の着脱は、とてもデリケートで大切なことだ。一人一人の背景を知り、丁寧に関わっていくことで子どもとの信頼関係を築いていく取り組みであった。2本目の徳島県からは、戦後の部落解放運動に取り組んできた地域の人々の強い願いから設置された保育所での活動の様子が報告された。今もなお根強く残る部落問題を解決するため、地域の人々、小中、保育所の職員が人権劇に取り組み、啓発活動を行っている。差別の現実から深く学び、自らを変容していくことの大切さを教えてくれた。1本目2本目に共通していることは、「人と関わることが好きで、人を大切にできる力」の育成だったと思う。人を信頼する力を身につけた子どもたちは、将来、差別と出会った時も、仲間と力を合わせ、解決できると思う。3本目の埼玉県からは、「ちがい」を受け止め合える社会に向けて、教育に携わる人としてどうあるべきかという報告があった。「なかよし学級」で学ぶ2人の子どもにしっかりと寄り添い、自立を見守っていく取り組みには心が温かくなった。と同時に、フロアーから提案された特別支援学級(学校)で学ぶ子どもに対し、誰が壁

を作っているのか、その壁を打ち破るのは誰なのかという提案もあり、支援の在り方についても考えさせられた。一人一人の「ちがひ」を受け止め、共に成長していける社会の実現が急がれる。「ちがひ」は全く別々なもの、かけ離れたものではなく、互いに共感できるものだと思う。そのためには、私たちが差別の現実をどう見取り、何をしていかなければならないか、改めて考えさせられた。

－報告4－④

この子を受け止めたい (滋賀県人教)

－主な質疑と意見－

滋賀(報告者同僚) Aは特別支援学級に在籍している。Aは、人の気持ちに寄り添って話をしてくれる。いつも教師は、Aに対し、「こんな子どもに育ってほしい。」と話すと、涙を流しながら聞いてくれる。きっと自分もそうなりたいと思っているが、なかなか思うようにならない自分に、もはやしているのではないか。Aにとって、じっくり話を聞いてくれる人がいることが、心の土台となっている。私たちも、Aにとって寄り添える大人でありたいと考えている。

滋賀 この子にはこれが必要だから、こんなことを話したいという教師の思いはあるのか。

報告者 1年目ということで、ベテランの先生の前で自分の考えを述べるのはすごく勇気がいった。でも、私の意見を尊重してくれる先生方が多かった。ただ、学校で決まった方針がうまくいかない、自分の考えとは違う。でも学校で決まった方策を実施しなければいけない……。いろいろ葛藤があった。フロアの中にも学校の方針と自分の考えが違うという経験をしたことのある方も多いと思う。その一方で、保護者と子どもの様子について毎日話をしている中で、管理職より特定の保護者と必要以上の話はしないようにと、指摘された。私はすごく葛藤した。私はAのお母さんとの話は、とても大切な時間だと思っていたし、お母さんにとっても必要なことだと思っていた。自分の考えと違った時、どういう判断をすればいいのか、フロアの人に聞きたい。また、教室を飛び出した子どもを追いかける時、どうするのか。担任 OR 他の教師？についても教えてほしい。

香川 コロナ禍で、なかなか人と会うことができにくい状況がある。でも私は、電話でもいいから、とにかく話を聞ききる(中途半端にしない)ことが大切だと思う。私もかつて、4～6時間くらい保護者と話をしたことがある。そこから保護

者との関係をスタートするという経験がある。保護者の話を聞ききらないと、次のステップがない。親のしんどさをしっかり受けとめることが大切だと思う。担任の信念を伝えることが大切。また、一人の担任だけではきついため、周りの子どもや教師たちの力を活用することが大切。担任の見取りと周りの人(教職員)の見取りの“ズレ”をすりあわせることも大切。

大阪 しんどさを抱えている子どもは、どこの学校にもいる。今私は、担任をしていない立場で学校を支えている。担任として“今、聞きたい”“もう少し様子を見てから”という場面がある。「チームで一人を育てていく」を合い言葉に取り組んでいる。

滋賀 教師も人なので、今の自分の気持ちを子どもたちに伝えている。(追いかけるか、どうかの)判断もケースによる。私は、子どもたちや周りの教師たちとしゃべることで、子どもたちの思いを感じ取っている。

奈良 自分は小さな学校で、単学級で、自分一人でしなければならなかった。その時は、自分の力の無さを実感した。当時の私は、「先生とはこうあるべきだ。」と思っていた。でも、それがしんどかった。他の先生方も、個性はいっぱいある。それぞれの立場もある。今はそれぞれの立場、(個性ある)先生方からの意見を聞きながら行動できるようになってきた。

香川 問題行動をとる子どもには、何か原因がある。Aさんの行動の背景には、何があるのか。また、落ち着いていった要因は何だったのか。

報告者 Aのさみしさは、どこからきているのかという質問について。Aは3人兄弟で、母親一人。妹が1歳であるため、母親は妹に手がかかってしまう。だからさみしさを感じていると思う。私もAと共通する点があるのでわかる。一人一人との関わりを大切にしてきたが、Aが落ち着いてきた要因としては、“言葉が心を作る。心が言葉を作る。”という考えのもと、ふわふわ言葉を実践してきたことだ。子どもたちが温かい言葉を使う中で、交流が広がっていった。Aの他にも、気になる子どもがいた。いろいろな人と関わることで心を安定させ、信頼できる人を作ることができると思っている。子どもも、担任だけでなく、いろいろな人と関わる中で、担任には言えないことも打ち明けられる人間関係を築くことができ、人を信頼できる関係を広げることができる。

一報告5－③

みんなが安心できる居場所づくり

(大阪市人教)

一主な質疑と意見一

香川 保護者との関係性を築くために、どうしていたのか教えてほしい。

滋賀 チームワークと個の子どもの見取りの兼ね合いをどう捉えているのか。子どものことがわかったつもりでも、わかっていなかったという教訓のようなものがあるのか。

報告者 チームとして大まかな目標はあるが、一人一人子どもの様子は違うので、細かな部分はない。チームワークといえるのは、「子どもの様子について学校 みんなが知っている」という情報共有は大事にしている。1つの事象についても、みんなが声を掛け合って子どもに向き合って取り組んでいる。1つのことを決めてみんなで動くというよりは、みんながしんどさを共有している。このことがチームワークとなっている。

保護者との関係性を築くためには、「お母さんと一緒に頑張らせてね。」と声を掛けていった。そんな中で、お母さんの本音の部分を見せてもらった。お母さんのしんどさとケン（仮名）のしんどさはおなじなのかなという思いもあった。

滋賀 母親の発言（赤ちゃんポストに入れる）をどう捉えているのか。またどう対応していくのか教えてほしい。もう1つは、環境が変わること（中学校へ進学する）で、ケン君にとってどんな力が必要なのか教えてほしい。

報告者 ケンの家庭状況については、区役所との連絡を続けている。ケンも母親の発言は許せないと怒っていた。また近くにおばあちゃんが住んでいて、ケンの心の支えになっているのは大きい。学校・家庭・区役所との連携は密にしている。

ケンの将来については、しっかり寄り添っていかなければいけないと思っている。彼が将来成長していく過程において、保護者の協力を得るのは難しい。彼は文字が十分に書けないが、ゲームやパソコンが好きなのでプログラミングの勉強をしている。就労を視野に入れ、今から少しずつ取り組んでいる。またソーシャルスキルトレーニングにも取り組んでいる。

大阪 ソーシャルスキルトレーニングは、具体的にどのように取り組んでいるのか。

報告者 ケンは、感情が高ぶったときに手が出てしまう。まず、感情をコントロールすることに重点を置いて取り組んでいる。また、衝動的に行動してしまうこともあるので、集団生活の中で大切な順番についても教えている。

大阪 心理療育施設で勤務していた。社会の中で一番厳しい立場に立たされていた子ども・保護者は、自分を守るために攻撃してしまう。そんな子どもたちに対しては、「生まれた時からの育ち直し」が必要となる。（奪われた感情を育てる。）また、子どもの育ちを支えるネットワークの構築も必要となる。子どもにとって戻る所（心の居場所）を作ることが一番必要となる。それは自分の家でなくてもいい。どこかの場所があればいい。

一総括討議一

香川 ソーシャルスキルトレーニングについて、「怒りのバロメーター」について話す。怒りのコントロールをどうしていくか。どうすればクールダウンしていけるのか、子どもと相談していく。私もまた実践していきたい。

滋賀 昨日の「なかよし学級」って何なのかという子どもからの問いに、(教師が)うろたえるという点について掘り下げてもらいたいのだが、この大会は、どういう視点で子どもを見ているかに気づくことが大切であり、自分が何なのかを明らかにするために参加している。特別支援学級(学校)との交流って何なのか。何のために交流しているのか。同じ社会で生きていくために交流しているのではないか。教師の見方を問い直す必要があるのではないか。

埼玉 特別支援学級を担当することによって矛盾点に気づかされた。(感想・意見)

大阪 報告内容とは違うが、先ほどの支援学級に分けるという話で、前任校では特別支援学級というのは存在しなかった。みんなが同じクラスという考え方だった。何年かたって当時の子どもに聞いてみると、一緒にいるのが当たり前という感じだった。中学校に入ってから特別支援学級で学ぶようになり、分けられるという思いを強くもったらしい。誰だって得意なこともあるし、苦手なこともある。どうやったらみんな一緒に学べるのか話し合ったことがある。

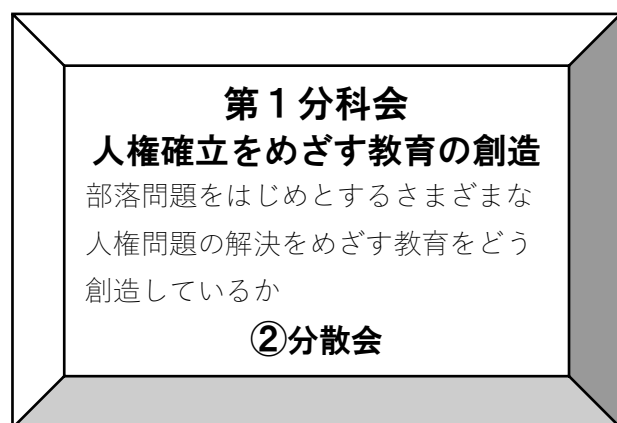
徳島 今回の発表をするに当たり、今までの取り組みを振り返ることができた。私自身、対象地区がある園に勤めるに当たり、とても身構えていた。その中で、「差別の現実から深く学ぶ」とはどんなことなのか。地域の人たちと一緒に人権劇をした

り、フィールドワークなどをする中で、地域の人たちと繋がっていくことの大切さを教えられた。これからもどんどん関わって自分自身の見方や考え方を変容していきたい。

2 日間の総括

5本のレポートの概要説明をする。

教職員が子どもにとって最大の教育環境であるといわれている。気になる子の問題行動は、その子に問題があるのではなく、その子をそうさせている教職員・学校・社会や背景にこそ問題があると捉えなければならない。何がその子をそうさせているのかという視点でその子を見つめ、願いや暮らしを見つめることで差別の現実から気づいていかなければならない。



I はじめに

本分散会における基調は、第1分科会「討議課題」をもとに提案された。また、重ねて報告協力者自身のことが語られた。「私の住む地域では、ハンセン病問題について市全体で取り組みを進めています。それは、私たちのふるさと出身でハンセン病療養所に入所されている方との出会いがきっかけです。その方たちを差別により苦しめていたのは、まぎれもなく私たちでした。私は差別していた自分、傍観者であった自分に気づきました。そして、子どもたちとともにこの問題に取り組む中で、子どもたちは思いを綴り、それぞれのくらしとつなぎながら自分について語りました。そんな子どもたちの姿からも、私は多くのことを学びました。この出会いと気づきが、私の本当の意味での同和教育、人権教育のスタートであったと感じています」最後に、討議の柱が確認され、報告・討論に入った。

II 報告及び質疑討論の概要

一報告1ー⑥

自主性を育てる保育環境

～子ども一人一人の姿から～ (奈良県人教)

一主な質疑と意見一

滋賀 現場において「発達が遅れている」といった表現をしていることがある。本来はその子のペースでいいはず。しかし、園・所・学校のシステム上、区切りをつけなければならない状況にある。そのことで、自分はできない、自分のことを好きになれないといった思いを持たせてしまっているのではないかと、何とかならないかと思っているが、そのことに関して報告者が感じておられることがあれば。

報告者 年齢で見るのではなく、その子その子の発達に応じた保育ができるように工夫しながらかかわっている。

京都 環境と実態を大切にした取り組みが進められているなど感じた。とりわけ「片づけ」という部分で工夫して取り組まれていること、また、実践する中で、保育者の願い通りにはいかなかったなどと思うことと、そこからの学びがあれば。

報告者 写真等を利用して、片づける場所を可視化している。最初の段階では保育者が子どもと一緒にやることや、子どもたちへのていねいな声かけを大事にしている。環境を整え直した時、子どもたちは意欲的に活動するが、一方で遊びが複雑になったり、戸惑いを見せたりすることもある。その時は保育者が一緒に遊んだり、遊びのしかけを増やしたりしながら楽しく活動できるようにしている。

和歌山 1年生の担任をすることが多かったが、入学後の子どもたちには「先生の言うことを聞いてから始めるようにしなさい」と言ってきた。報告を聞いて、改めてそれではいけないと思った。保幼小連携の部分で、保育所の側から小学校に対してお願いしたいこと、求めたいことがあれば。

大阪 0歳から2歳まで保育所に通わせる意味についてどのように考えているか。

報告者 小学校とは連携しながら取り組んでいる。小学校にはその子の背景も含めて一人ひとりの子どもをていねいに見てほしいと考えている。保育所に通わせなくてもいいのではという考え

もあるようだが、乳幼児期こそ自主性を育てるうえで重要だと思っている。保育所は集団の中で0歳から周りのひとやものにかかわっていきこうとする力を育む場所だと考えている。そのためにも、保育所がその子にとって居心地の良い場所になるようにしたい。

－報告2－⑩

十護と過ごした日々で気づかせてもらったこと
(石川県同教)

－主な質疑と意見－

石川 報告からは、簡単に入学できたように感じた方もいたのでは。石川県では呼吸器をつけた子どもが地域の学校に入学したのは初めてだった。つながりの会（親の会）を立ち上げ、長い年月をかけ教育委員会との話し合いを重ねてきた結果、実現した。

大阪 一人の子どもが入学することで、学校の体制や施設・設備等が変わっていく。それは、結果としてすべての子どもが過ごしやすい環境へとつながっていく。

滋賀 十護さんと周りの子どもたちの関係性について、その具体を。

報告者 移動する際には、歩行器や医療機器等が必要になるが、気づいた周りの子どもたちが自ら声かけをしながら過ごすことができている。休み時間等にも多くの子どもたちとかかわる姿がある。

奈良 周りの子どもたちの「やさしさ」の部分には課題はないのかなと思った。解放保育で育ってきた子どもたちは、対等な関係性をつくってきいた。「障害」のある子どもが生活科のどろんこ遊びを嫌がってやらなかった。そこに同じクラスの一人の子がずっと離れずに一緒にいたため、「先生と一緒にいるからどろんこ遊びをやっておいで」と声をかけると、その子は「だって一緒にいるのが楽しいんや」と。「障害」のある子はされる側、「健常」者はする側、してあげる側、そのように捉えていた自分が問われた瞬間だった。良かれと思ってやっていることが子どもたちのかかわりを、関係性を薄めてしまっていることがあるのではと思う。自分の中の差別性や子どもの姿から学

ばされたこと等があれば。

報告者 十護は、地域の保育所・幼稚園に通っていないため、小さいころからの十護を知っている子どもがいないという状況であったが、地域の学校に入学することで十護のことを知ってもらえたという段階までできている。しかし、子どもたちは、遠慮のないかかわりをする中で育ち合うものだと思っているが、そこに行きつくまでにはまだ時間が必要かもしれない。

報告者 多くの、さまざまな子どもたちとのかかわりの中で、これまで見せなかった表情や姿を見ることができた。その子らしさを発揮するためにも、周りの子どもたちとのかかわりや関係性が重要であることを感じた。

－報告3－⑦

「お友だち、楽しい！！」～たくみが心を
開くようになった730日間の軌跡～
(大阪市人教)

－主な質疑と意見－

香川 1～5の概念から急激に算数の力がついていったことに関して、具体的にどのような取り組み、支援があったのか。

報告者 まずは、たくみさんのことを詳しく知る必要があると考えた。たくみさんは恐竜が好きなので、恐竜に関するものを使って学習を進めた。学習を進める中で、国語の学習をしている時よりも算数の学習をしている方が生き生きとしていることに気づいた。そこで、特に算数の学習について同僚に相談したり、計算の概念を言語化したりしながら取り組むことによって、その力が高まっていった。さらに、みんなと一緒に学習することによって学ぶ楽しさを味わわせたいと考えるようになった。

京都 地域によって制度が異なると思うが、支援の担当というのはどんな立ち位置なのか。また、特別支援コーディネーターとして、たくみさんとの出会いを通して学んだこと、取り組んだことを他の職員にどのように伝えているか。

報告者 支援の担当は低・中・高学年部に1人ずつ。時間割を作成する中でそれぞれが交流し合えるようにしている。毎月の職員会議の中で児童理

解の時間を設け、特別支援の取り組みをはじめ、さまざまな子どものことについての情報を共有している。また、会議に参加していない職員に対しては、必要な情報を共有できるようにするためのファイルやノートを活用する等、全職員で取り組める体制をつくっている。

報告者 学級担任と支援の担当が同じベクトルで取り組みを進めていくことが大切だと思っている。

－総括討論－

福岡 保育環境から学び、小学校でも子どもがゆったりとできる環境（スペース）づくりに取り組んだ。1年生担任からは「教室でできなくなったり、友だちとけんかしていらいらしたりした子どもが、自分でそこに行ってクールダウンし、戻ってくるようになりました」という話があった。学校教育で行われている一斉に行う学習や活動に対しては、子どもたちの学びの質という部分からも問い直す必要があるのではないかと思う。

奈良 人工呼吸器をつけた子どもの担任に。命の危険がある状態ということから、最初はためらった。教育を受けさせたいという保護者の思いや「教育」というところに向き合えていないままでのスタートだった。しかし、子どもたちは違っていた。誰かが抱えていることをみんなで考え合うことで、ともに育っていった。教育を通してともに育っていった。誰もが等しく教育を受けるべきなのに、最初の自分自身の心のもち様はどうだったのか。とても大事なことを教えられた一年だった。

石川 どんなに重い障害があっても、子どもには自分から何かを生み出す大きな力（生きる力）がある。親ができることとしては、その子の周りに人間どうしの温かいつながりをつくることではないかと思う。そのためにも親としてさまざまな立場の人たちとつながっていききたい。

－報告4－⑧

子どもたちの自立をめざして「なりたい自分」を合言葉につながる学校づくり

～繋ぐ・届ける・切り拓く～ （京都市人教）

－主な質疑と意見－

京都 京都市教育委員会をはじめ、京都市行政が子どもたちに対する学校の取り組みをバックアップする体制があるか。

報告者 同和問題に関わる指導に関しては、1年生から発達段階に応じた同和問題につながる学習を積み上げたうえで、6年生の歴史学習の中で具体的に上げていくことになる。同和問題に関わる学習に対する行政からの指導助言等をももらうことはできにくくなっている状況にある。6年生の同和問題に関わる学習については、室町時代のかかわものの話から江戸時代の身分制度、解体新書、渋染一揆、解放令、大正時代の全国水平社、現代における差別問題を歴史学習と関わって取り扱っている。子どもたちはその歴史的史実を知ることを通して、これから生きる自分たちにとって何を大切なしなければならないのかという視点で学習を進めている。

京都 一番大事なのは、自己肯定感、自尊感情を高めること。「自分は自分のままでいいんだ」「自分を知って、自分はどうやって社会に適応していけばいいのか」「困ったときはどのように相談すればいいのか」という適応力、相談力をしっかりと育てる。これが本人にとっての自立。そして、支える「なかま」。自立と共生ということを学校全体でどのように構築していくのかということを考えながら取り組んでいる。

大阪 「自分らしさを出すといじられる。だから出せない」今の子どもたちがおかれている不安感を象徴している気がした。同じが安心。違うことが不安。そう思わせているのは何か。1つは社会の課題。これが残っている限り共生社会の実現というのは難しいのかなと思う。やはり変えるべきは社会。今後その社会を担っていく子どもたちにどんな力をつけていけばいいのかというのが私たちに課せられた課題だと言える。子どもたちの関係性をつくっていくうえで大事にされていることは。

報告者 自分の困りを言語化して、友だちと一緒に解決していく取り組み（授業）を重ねていくことを大事にしている。そのことによって、困りを感じている子どもたちに対するまなざしも変わ

ってくるのではないかと考えている。

－報告5－⑨

「みんなの前でひとくち食べられた！」

(＜公社＞三重県人教)

－主な質疑と意見－

兵庫 学校としてできることと、難しいことがあると思うが、子どもに寄りそう中で公教育として難しかったなと思うことがあれば。

報告者 管理職をはじめ、学校全体でAさんに寄りそい、支えていこうという体制がとれていたの、難しかったという部分はなかったと思う。

京都 知らないことでどうかかわっていいのかわからなかったり、きついあたり方になったりといったことが起こってしまうことがあるため、困り感のある子どものことを学級の子どもたちに話すようにしている。ただ、気をつけていることは、本人が傷つかないように、また、周りの子どもとの関係が悪くならないように家庭との連絡を密にし、本人の思いを聞きくこと。困り感のある子どものことを学級の子どもたちに伝えるうえで、報告者が気をつけていること、また、伝えた後に大事にしていること、一人ひとりを大事にする学校としての取り組みがあれば。

報告者 「周りのかかわり方を変える、見方を変えることが、困っている友だちの楽な過ごし方につながるんだよ」と子どもたちに投げかけるようにしている。話を聞いて、自分のかかわり方がよくなかったなと思った子は、それぞれの方法でつながりを取り戻そうとしている。私自身も生い立ちの中で疑問に思いながら過ごしてきたことがあった。知らなかったことで人を傷つけたり、自分の家族を差別したりするような過ごし方をしてしまったこともあり、知らせるということにこだわって子どもたちとかかわるようにしている。学校全体では、困りごとを抱えている子のことや周りの子とつないでいきたいなと思う子のことを伝え合ったり、共有したりすることを大切にしている。その子にとってどんなかかわりや声かけが必要なのかということについて学校全体で考え合える体制ができている。

Ⅲ 総括討論およびまとめ

京都 担任として一人ひとりの子どもをどれだけいていねいに見ていくことができているかなと考えさせられる機会になった。その子にとって、今自分にできることは何か、どんな力をつけていくことが将来につながるのかといったことを真剣に担任として向き合っていくことが大切だと思った。三重県の報告にもあったように、子ども、おとも知らないことやわからないことに対しては、さまざまな価値観から考えをもったり、発言したりすることが多くある。人権問題も含めて、必要なことに関しては、事実を伝えていくことが必要だと感じた。

大阪 私自身が知らないことによって被差別部落を避けているという自分自身の差別性があったことを、少し前に気づくことができた。これまで部落問題との出会いがなく、なんとなくのイメージで、生活がしんどいであるとか勝手な偏見をもっていたことで忌避意識があったのだが、前任校で地域の方と出会う中で、そのぬくもりを感じて、自分の無知を恥じるという経験ができた。そのあたりから、知らないことから差別が生まれるということについて身をもって感じるができるようになり、それまで無関心だった社会の課題や人権問題について、自分もその差別を支えていた一人だということに気づくことで、自分の課題となっていった。このような経験は、子どもたちにもぜひ積んでほしいな、そういった出会いをつくっていききたいなと思う。

大分 0歳児は自分の中の興味や関心で一人遊びをする時期と言われているが、実際に子どもの様子をよく観察してみると、近くにいる人を注視して、同じことをやろうとする姿がある。その姿から0歳児であっても自分から人にかかわろうとする力を持っていて、そこをつないでいくことが保育では大切なことなのではないかと考えるようになった。地域をはじめ、さまざまな人たちの力を園の中に吸収することで、たくさんの気づきや学びが生まれ、園の力にもつながると思う。0歳からの子どもの姿を知ってほしいと思う。地域としてそのようなつながりのある社会であってほしいと願っている。

奈良 乳幼児教育と学校教育の接続の具体的な方法というものを、今一度みんなで学ぶ必要があるのではないかと考えている。子どもは、椅子と机よりも床で過ごすことにすごく居心地のよさを感じることができるし、そこに遊ぶものがあれば学びと快感が生まれる。保育所や学校は天井が高すぎるから、こもれる空間をつくと安定する。感覚の保育・教育ではなく、理論を学ぶことを通して実践を進めていく必要がある。教員に対するアンケートでは、子どもの権利条約を知っていると答えた割合が3割以下であったという結果が出ている。子どもの権利条約の中には、休み、遊ぶ権利があることとか、意見を表明する権利があるが、今日の保育・教育のどこなのかだとか、具体的な落とし込みというものがこれからの保育・教育の課題ではないかと思う。育ちをつなぐという部分では、0歳からの教育ということについてOECDの保育白書に書かれている。その中には「教育とは生きることを伝え合う営みであって、それは0歳から始まっている」という文章まである。5本の報告で共通していた、認知されること、受けとめてもらえること、自分が自分でいられることを実践の中にしっかりと位置づけていくことが大切だと思う。

石川 ひまわり教室は、「障害」のある子（幼児から18歳）を引き受けている施設。来た人は断らないという考えで取り組んでいる。施設には看護師がいなかったため、十護さんが来たときは、職員が研修を受けて医療行為ができるようにした。学校現場でも同じようなことができるようになればいいなと考えている。そのための動きを今後進めていくとともに、多くの親と出会い、つながりながら地域の学校につなぐ営みを続けていきたいと思っている。

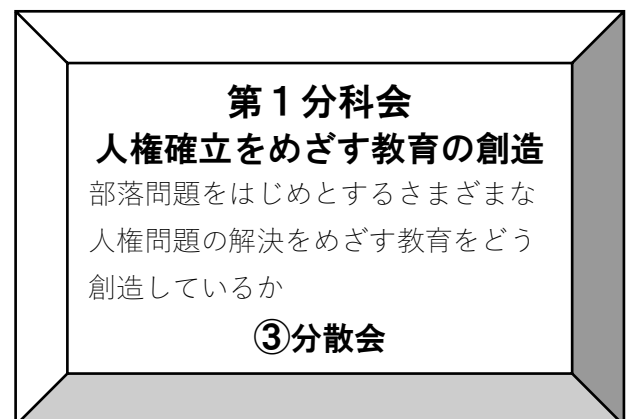
まとめ

・「子ども一人ひとりちがう」という実感を子どもたちとともにどのように共有していくのか・・・。「なかま」をつくっていくうえの土台として「一人ひとりちがうんだ」ということをスタートにする必要がある。そして、そこを土台としたさまざまな取り組みが、私たち実践者には求められている。

・自分のことについて知ってもらいたい、聞いてもらいたい、伝えたい。この「なかま」の前なら、この人なら話せる。そんな関係性をもった学校・園・所をつくっていくことが必要。子どもの権利に基づいた「ひと」「時間」「空間」といった環境を整えていくとともに、0歳からの保育・教育の必要性和0歳から人権をもった一人の人間として、尊敬・尊重することを大事にしながら、人権保育・教育の日常化、「人権の学び」の創造に取り組んでかなければならない。また、そのことが子どもの自己肯定感、自尊感情を高めることや主体的な学びへとつながるのではないかな。

・私たちが日常で使っている言葉。そのうらに自分の差別性や認識のあり様が潜んでいることがある。一つの言葉にこだわりながら、使っている言葉についてもていねいに見つめ直すことが必要。そのために私たちは、主体的に学びの場を求めていくこと、学びを止めずに学び続けていくことが重要である。

・改めて家庭訪問の重要性が確認できた。子どもの姿の背景をさぐる一つの方法としての家庭訪問を重ね、子ども、保護者との関係性をつくっていくことによって、事実や思いを知ることができる。そこから具体的な取り組みが始まり、子どもの学び（変容）や実践者の学び（変容）につながっていくのではないかな。



1 はじめに

分科会基調は、協力者から報告資料集の中から簡潔に提案された。同和教育を基軸とする人権教育を目指す教育内容の創造について、子どもたちの育ちの基礎を形成する上で、乳幼児期からの同和教育を基軸とした人権教育の重要性を確認した。部落差別の解消に向けて、自らはどう生きる

のかを問い、差別を許さない社会の創造に向けて、生き方を培っていく部落問題学習を実践し、全ての学校での取り組みの必要性を訴えるとともに、あらゆる差別や偏見、不合理なものに疑問を持ち、それを変革する生き方を見いだしてきました。急速に転換する現代社会で、子どもたちは生命の危機を訴えています。その要因こそが、あらゆる面からの差別という現実です。だからこそ私達は1人1人の子どもの生活実態や背景を丁寧に把握し、課題を明らかにした上で教育実践を積み重ねる必要があります。

本分科会においては、私達は子どもたちを巡る差別の現実から深く学びながら、全ての子どもたちが部落問題をはじめとする様々な人権問題を科学的に正しく認識し、その解決に向けた意欲と実践力を高める教育実践や地域の実情に関わらず、子どもを取り巻く差別の現実を明らかにし、人権問題を自分の課題と結びつける教育内容の創造にどう取り組んでいるか。全ての子どもたちが共に生き、共に育つための教育実践、人権確立を目指した反差別の集団作り、仲間作りの課題と結合させていくための実践について深めていくことを確認し、報告・討論に入った。

Ⅱ 報告及び質疑討論の概要

－報告1－⑭

つながることの喜び

～あいこさんと母親から気づかされたこと～

(香川県同教)

－主な質疑と意見－

協力者 報告者の方が、最初、保護者の方と距離感があった、または距離を保ったというようなことがありましたが、その時のお気持ちを聞かせてください。

報告者 1年の時に担任をしていた。様々な幼稚園や保育園から入学して初めて出会うので、まずは申し送り事項を伺った時に、管理職の方や保育所の先生方から対象の児童とそのお母さんが、地区出身であるということ、育児の悩みがどうやらあるらしいということはお聞きしました。その上で、まずは、実際にお話をし、子どもの姿を見たりしてから、悩みが心の奥にあるのかもしれないと思い、その時に感じた悩みを正面から向き合っ

て一緒に考えていくことを大切にしたいと思い、まずは、信頼関係を築こうと私なりにしてきました。お母さんは、話し方がぶっきらぼうな面があり、なかなか伝わりにくいと思うこともあったんですが、本当に困ったときに、そのお母さんと子どもの話には、人を大切にする気持ちが本当に豊かだなんて思うことがあって、そこから信頼関係が深くなりました。それは、お母さんが、中学校のときに恩師の方にずっと教えていただいた「人を大事にする」「人を絶対差別するような人間に育ったらいかん」ということが、お母さんの心に残っていて、娘をそのように育てたいということが分かりました。そこを私は、とても学ばせてもらいました。そこから本当に信頼関係ができたと感じています。

報告者 3、4年の担任をしています、「この子か」というのが最初の思いでした。やっぱりお母さんからの電話に対応した時に、今後お母さんと自分がうまくやっていけるかなってというのがとっても不安でした。でも、担任をして2年目を迎えますが、もう本当に出会えてよかったなと僕自身思っています。クラスの子は、全部自分の責任だと思っていました。当初、お母さんが前の担任に連絡をしたり、学年主任の先生に連絡をしたりっていうのがあって、自分自身とってもつらかった。やっぱりまだまだ知られていないから、ダメだと追い込んでいくときもありました。でもお母さんが、いろんな人と自分を繋げてくれたおかげで、それぞれの立場で言える言葉があることに気付きました。それに気づけたときに、困っていることは、やっぱり職場のみんなに伝えていいということが、僕自身思うことができて180度変わることができたなと思いました。

大阪 去年担任をしていた保護者のことを思い出しながら聞いていました。やっぱり自分も教員を始めたときとか、きつい言葉が来るとなんかどうしたらいいのかとか、どうせ若いからとか、子どもを育てたことないでしょって言われる言葉に返す言葉がなくて悩んだときを思い出しました。やっぱりうまくいわずに終わってしまった保護者の方との出会いはすごく自分の中で残っていて、去年担任した保護者の方は、やっぱり今

まで出会ってきた保護者の方との出会いがあったのできっこう怒っているように聞こえるけど、ずっと必死に子育てされているっていうのはやっぱり家に行かないとわからなくて。また、あの地域に青少年センターとか子育て支援センターがあるので、そこに行かしてもらおうといっぱい昔からの情報とか本当に教えてもらった。保護者の方と繋がるだけじゃなくて、子ども自身が安心していける場や来たときに受け入れてくれる集団があるのが、すごく素敵だなと思っていました。子どもさん自身は、どんなふうにクラスの子と繋がっていったのか教えてもらえたらありがたいなと思います。

協力者 家庭訪問行くなとまでは言われませんが、玄関先で場所を確認するで終わる家庭訪問でした。ここ1年の新規採用の教員は、家庭訪問が何であるかをよく知らないまま、家庭訪問という言葉を使っているというのが問題です。

報告者 1年のときは、うまくいかず、私なんか間違ったことしているのかと常に思うような感じでした。そんな時に、繋がりができた地域のセンターの職員の方や学校の管理職の先生方にも助けられました。今も家庭訪問いけないような家庭もいっぱいあります。しかし繋がるということで安心感を得ることが出来ます。

香川 報告者が話したように、そのときは、まだその子自身が幼かったせいか、親の方もなかなか子供のことができないということを持ち物も揃わず、もう全てを報告者が用意するといった感じでした。しかし、徐々に子ども自身ができることが増え、お母さんの事を助けることもできるようになってきた。

そういうことでお母さんの方も少し変わってきました。先生方も家庭訪問を繰り返し、段々と落ち着いて話ができるようになってきたことを褒めることで、段々と学校に対するこの協力体制ができました。

協力者 話を伺っていますといかにチームワークがよいか分かるところです、最後に、もう一人の報告者の先生から、学校の人権教育や研修についてお話をしてください。

香川 学校の人権教育の学習の場として教員が

学ぶ場を企画させていただいています。郷土の歴史を継承する方を講師として迎え、それぞれを自分ごと化する研修です。人権・同和教育についての考えやどう思っているかを確認しました。今回の報告者2人の頑張りが、学校自体を変えていきました。子どもを通してセンターの方と繋がり、子供を深く見るきっかけになってきています。職員の方の言葉ですが、本当に地域や保護者が繋がって、子どもたちを多面的に見るということが本校ではできつつあります。

そして、今後も深く繋がっていきたいと思います。

協力者 関係性に困っていることも、教師が困っているというだけではなく、子どもが困っているという部分を見つけ出し、教師一人ではなくて、学校全体で捉えていきながら関係性を作っていくということを私自身も取り組みたいと思いました。一つの事例を基に、学校そのものが変わるという波及効果が必ずあるということを確認することができました。

－報告2－⑭

思いをつないで (福岡県同教)

－主な質疑と意見－

香川 報告を聞いて、私自身も授業の中で学び合いをします。学び合いをすることで、その中で自己実現とか自分の思いを伝えること、取り組んでいきます。その際、子どもたちの心理的安全性を確保することって大切だと思いますが、周りの子どもたちにはどのような支援をされ、対象の子どもが、安心して言えるような雰囲気づくり、言いたくなるような仕掛けとかを具体的に聞きたい。

報告者 どの教科でもグループの中で交流する活動を入れて、必ず全員が発言をするようにということで指導しています。無理して言えなくてもいいので、グループでその子の困っていることを考えていこうということで取り組んでいます。対象の子どもが不安にならないように、発言をうまく引き出してくれたりするような子を近くに置いたりとかそれからその繋がりを広げるために、グループのメンバーを細目に変え、交流できるようにして繋がりを広げていきたいと思っています。

す。

協力者 会場の皆さんも不登校傾向のある児童を担任されたご経験のある方がおられると思います。ご自分の実践や発表から気づかれたことをお願いします。

奈良 自分自身、なかなか成果が出てこないで悩んだことを思い出しました。2点質問で、差別的な言葉を簡単に使うような子どもたちもいて、そのときにどんなふうな取り組みをされているか。また、学級の子どもたちに話した時の反応はどうだったのか。

報告者 全校での取り組みの部分ですが、フロアに人権・同和教育担当が来ていますので、変わってご説明します。

福岡 言葉についてのアンケートを行い、子どもたちの実態を把握する。そこから、その目標が達成できるように、低学年から取り組んでいる。中学年では、違いを個性として捉え、個性を大切にすること。高学年では、障害について知り、みんなが過ごしやすい社会について変える。障害がある人を差別する言葉であることを知り、意味を知ると子どもたちは感じて、使わないという行動に繋がるように学習をしている。また、障害がある当事者の方に来てもらうという出会いを通して、顔が浮かび、身近なこととして考えられるように学習を積み重ねています。次に、家庭訪問した意図は、特に授業で使うというよりも、私自身がその子の子背景をきちんと知った上で授業をしたいと思って行かせてもらった。子ども達に身近に感じることを感じさせ、私達が意図していなくても、深く考えずに使った言葉がたくさんの人を傷つける可能性があることを感じさせたかった。これは、障害に限ったことではなくて、その他の個別の人権課題についても同じことが言えると思います。これまでの私がしてきた授業を振り返ると無自覚に授業をしたことでたくさんの子どもたちを傷つけていたかもしれないと思うことがあり、背景を知ることや背景をつかむことがとても大事なと今感じているところです。

協力者 先生が自分の思いだけで動いたことを自問自答しながら、反省しておられるような報告がありましたが、先生以外の学校体制が、どう変

わっていったのかお聞きしたい。

報告者 たくさんの先生方に支えていただいている。管理職の先生や人権・同和教育担当に相談しながら進めている。また、関係機関と連携しながら支えていっている。

協力者 チームとして子どもと家庭と関わるってことを大事にされていることが確認できました。

香川 学校全体で報告書の最後の方にあった4つの小学校の子どもが、一つの中学校に行くということで、小学校から中学校に繋ぐところをどのようにされているのか。小学校で不登校だったけど高学年になって行けるようになったが中学校で不登校になることがある。どのように伝えているかお聞きしたい。

協力者 子どもと保護者が安心できる小学校から中学校への繋ぎという部分、小中連携の部分について、どういうことを大切にして繋いでおられるのか。

報告者 小中学校の連携をすごく大切にしている。不安定な子が多くて、先ほども出てきたように小学校では行けていたのに中学校で行けなくなる。またはその反対があったりなど。今までは、進学前とその後の引継ぎをしていました。しかし、今回統合するので、その点は不透明です。

福岡 来年度に4校が一緒になって正式に7校が2校になる形で中学校が統合されます。学年200人位で統合される。小学校と中学校の連携については、具体的に子供たちが一緒に活動する場を確保しながら、子どもたち自身が様々な交流を通して顔見知りになっていく取り組みや中学校であれば新中学校では2年生3年生になるので修学旅行や宿泊訓練と一緒に活動するということを考えている。それからもう一つは、0歳から18歳まで、一括して連続して子育てをしていくことを目指し、行政や学校教育も含めスクールソーシャルワーカーとかスクールカウンセラーとか入れようとしている。子どもたちをしっかりと知っている小学校との連携を密にしながら見守ることを大切にして統合を進めている状況です。

奈良 お父さんのことや妹さんが重度の障害があるということでしたが、地域の学校に通ってい

ることを、周りの子どもたちは知っているのか。
協力者 まず、中国籍の父と先生の関り、次に、妹の通う学校についての周りの方が知ってるかどうか、最後に、この家庭について教えてください。

報告者 お父さんは、中国の方に帰らなければならなくなって私は全く会っていない。妹さんは、地域の特別支援学校に通っている。周りの子は知っています。家庭は、行かせてもらった時、妹さんがいた時には、お母さんがかかりきりでその子の世話をしている状態です。子どもたちが大人しく過ごせるように1人1台タブレットパソコンでずっと動画を見ているような状況でした。宿題が全くできない理由は、そういう状況があったからだと分かりました。

奈良 家庭の状況を聞くと、ヤングケアラーになりつつあるのではと心配になるような家庭状況だったと思いますが、どのように考えておられますか。

報告者 私も家庭状況見に行ったときにすごく心配でしたが、お母さんと話をしたり、本人と話をしたりする中では、そんな心配はないかと思いました。実は、この大会に来る直前にお父さんが帰国されまして、お母さんが、子どもたちを丁寧にみることができるようになり、すごく表情が変わりました。学校の教室に座っている状況が続けばいいなと思っているところです。

－報告3－⑮

ひとごとじゃない

～なかまの「思い」によりそって

(大阪府人連)

－主な質疑と意見－

愛媛 6年生の総合人権学習で聞き取りなどをしたことを、その学年の保護者にはどのように伝えたのか、また、どんな反応だったのか。

報告者 保護者に実は事前には伝えていない。ただ、人権総合学習をするにあたって、職員やその時の学年の実態とかを踏まえて、どういう力をつけさせたいかという思いを明らかにした。また、歴史の教材に則って正しい知識を伝えることは、後から伝えるっていうことはある。ただ、事前に

は、細かく打ち合わせとかはなく、参観日の懇談で予定を伝える程度。

協力者 他の関係諸機関との連携とか社会教育との連携とかでご意見はないですか。

大阪 中学校になって、人権学習でやっぱり被差別部落やっっていうことを伝えなあかんっていうのがあって、その時には保護者には、この方向での人権学習を今までやってきた長い積み重ねでやっていきますっていうことで伝えることがありますけれども、この6年のときにそういう話はしてないと思います。

奈良 小学校の方で、何で部落差別ってあるのか。何で差別されるのかについて、どういうふうに学習されているのか。

報告者 何で差別があるのかは、正直、難しいと感じているところだが、6年生での歴史学習を基に、多分どこの小学校でも実践されていると思う。しかし、学校としては考えているのは、いろんな差別事象がある中で、歴史学習の中で背景が出てくる。それに対して、子どもたちに「これって変」「おかしい」という差別に対しての理不尽さであったり、不合理さであったりとかを重点に実践している。差別に対しての強い思いを持たせることを意識しています。

愛媛 素朴な疑問ですが、先生が授業をするにあたって、クラスの中に被差別地域の子がいることを自覚して授業をしていたのか。もう一つは、改めて子どもたちに被差別地域を知らせる必要があるのだろうか。私の中で自問自答しているのですが、お考えをお聞かせください。

報告者 今回は、事前に伝える必要があった。そういう地域があるっていう話が聞き取りでは出てくる。感想や振り返りとかで、初めて知ったと書く子もいる。何も知らない状態あって、何か変だなと思ってネットで調べることになる。正しいことも書いてあるが、マイナスイメージのことも書いてあったりする。何も知らない状態では、そのまま気づかないうちに差別をしてしまうかもしれないと考える。特に職業についてはつながってしまうことを考えると、先に発信して正しいことを伝える知らせることが必要だと思う。

香川 保護者に事前周知や事後周知という件で

すが、その子がどう感じるか、保護者がどう感じるかを大切にすることが重要だと感じるが。

報告者 みんなでやる楽しさはやっぱり伝えたい、みんなで協力することの素晴らしさってやっぱり教えていきたい。低学年の頃からずっと心がけています。地域学習1年生から6年生まで、系統立てて取り組みをしている。ありがたいことは、地域の方がいつも協力をいっぱいしてくれます。困っていること、悩んでいることなど、助けていただいた。小中学校と地域が一体で取り組めることは誇りです。

どの学年の先生たちも、ただ系統があるからっていうだけで、ただこなすのではなく、どの学年でも子どもたちの今の実態に対して、どういう力をつけてあげたいか、どういう目的を持ってやりたいのか意識して地域の人と繋がっていきなことだと思う。重要なのは、この取り組みが終わって終わりではなく、その後が大事で、どこの学校でもいつも意識していて、先生も敏感に拾っていくことが重要だと考える。低学年の頃からどの先生も積み重ねていくことが大きいと思う。

協力者 部落問題学習について松尾さんからどこの学校でもやらなくてはいけないということ、会場に投げられたのではないかなと思いました。学級に被差別出身の子ども、親は本当にいいのか、やりづらさも含めて何のために部落問題学習をするのかというところを、今一度その問い直したいと思った報告でした。

今日の3本の報告、どれも家庭や地域との連携、それから家庭訪問の大切さっていうことを確認することができた取り組みでした。部落問題学習を全ての学校でという話がありましたが、明日の2本の報告に繋がっていくと思います。

－報告4－⑪

「先入観・偏見による排除」に焦点を当てた部落問題学習～「島ひきおに」の実践を通して～

(奈良県人教)

－主な質疑と意見－

協力者 先入観・偏見による排除に焦点を当てた部落問題学習ということで、島ひきおにという教材を扱った取り組みを丁寧に報告していただき

ました。ご質問やご意見をお願いします。

福岡 積み重ねの実践方法を通して、学びがあったと思うが、その点と保護者には、どのように伝えられたのか。

報告者 保護者に対して通信等で知らせることはしていない。校内でこういう実践をしたっていうことで交流はしている。「島ひきおに」を部落問題学習の重点に置いて人権の学習を進めていって、実践をした後に取り組みをまとめて全職員と交流する機会を設けています。他の職員と教員と一緒に成果や課題を出し合い、それらを積み重ねて残していくことで、人が入れ替わったりした時も、これをベースに授業ができるのではないかと取り組んでいます。

香川 部落問題学習となると、保護者は、6年生だけがしていたらいいという考えが根強い面がある。私自身6年をもっている時に部落問題学習教材を使うが、低学年もした方がいいと考える。この授業を終えて、マイナスで読み取ったとか、プラスに転じたよとか、具体的な子どもの姿がどうだったのかを教えていただきたい。また、先生自身が子どもの声を聞き出せるように、何か具体的に子どもたちに返した事例や仕掛け、支援があれば教えていただきたい。

報告者 昨年度、2年生から上がってくる段階で、お互いのマイナスイメージが強かったけれど、プラスイメージもついてきた。でも、ちょっと殻を破れないっていうところがあったので、どうにかして関わらせたいということで、今回は仲間作りで、グループ分けを子どもたちがするのですが、周囲に感情をぶつけてしまう児童を私と同じ班にする。何かあっても先生が対処してくれるかもという思いがあったようだが、一つに繋がってこういうものを1年間通して実践しました。その中では、今まで明らかにちょっと避けようとしていたところを、ちょっと粘り強く待ってみたり、言葉を変えて理解してもらおうとする子どもたちの姿も見受けられました。現在4年生ですが、今の姿について担任の先生がいますので繋ぎます。

奈良 発言だったり、周りとの関わりだったりの

面で難しさを抱えているところもあります。道徳科の授業を中心に、遊びの中を通して相手のことを理解する機会をたくさん持つように進めてきています。今は、その子に対しても意見する児童もすごく増えてきて、僕自身が言うと言いますが、友達から言われたときにどう受け入れて、本人が変わっていけるかっていうところを目指してしています。2学期半ばを過ぎてどんどん変わってきていることを感じています。まだ4年生で終わりではないので、これからも積み重ねていかないといけないと感じています。

香川 大変画期的で提案性のある授業実践だと感じました。6年生で歴史学習を勉強するから、それに合わせてあの教科書の記述があるから、そこに合わせて6年生でやるようなイメージが強いが、他の学年でも系統立てて実践されていることが素晴らしい。報告集ではなく、別資料で討議したいことを記述されていますが、まず部落問題学習ですが、被差別部落を有する学校だけのものでないと話が出ました。本校の実態でいうと、地区の方もマイノリティの状態です。ということは、マジョリティーのほとんどの子たちが日常的に地区の子どもと接しているということになります。だからこそ全ての子供が反差別の立場に立てるようにしていくことが必要かなと思っています。そういう子たちが知らないうちに差別者の立場に立ってしまわないようにすること、それから正しい知識理解のもとに正しい判断をしていくことができるようにしっかり教えていくことが大事だと考えます。だからこそ地区外の人こそが、しっかりと学習をして正しい知識をつけていく、そして広げていくことが大切だと思います。系統表については、6年生の学習というイメージが強い感じがするが、高学年をよくもつ先生だと、部落問題学習を実際に自分が授業したことがあるし、よく分かっておられます。しかし、低学年が中心の先生だと、なかなか自分ご自身が授業をする機会が少ないので、そこに関してはやっぱり温度差が出てくる面があります。それは課題として挙げられています。そこへの取り組みについてお聞きしたい。

報告者 部落問題学習についての温度差は、絶対

あると思います。今回発表させていただく中でいろんな人の話を聞く中で、人権に対する思いというのは、それぞれの人生歩んできた中で形成されるものかなと思っていました。つまり出会ってなかったら、それに対して問題意識を持ってないし、そこはあるという前提で取り組んでいます。ただ、その波を小さくするために、今回、学校では、実践交流会をして取り組んできました。子どもの反応で、到達できなかったのもので、今度は、下学年で意識して実践しようという話を積み重ねていくことでより良くなっていくと思っている。よく自分の課題としてもっているのが、例えば被差別部落出身の人がするから、この授業ができるというのは、僕は嫌だなと思っています。まずは思いを共有して、交流していくことで、全職員が共通認識で取り組むことが重要だと思っている。

福岡 学校の中に部落問題学習、人権教育問題学習を位置づけていくときに、系統的なものは重要かと思います。来年度から中学校が統合されるので、それぞれの学校で、小学校でしている部落問題学習をすり合わせるという作業を始めたところなんです。そうでないと中学校に行ったときに、ある小学校ではしているが、ある小学校はしていないということになると困るので、今、構築している。教材も大事ですが、それぞれの学年でどこまで力をつけるか、その発達段階にあって、どこまでを学ばせるかを大事にして作業を進めている。

報告者 ハード面というか、構築していく段階で、教材をどうやって選ぶかが難しい。奈良県の方で全ての学校で部落問題学習をして欲しいというリーフレットを作成していただいたが、昨年度、私の方が道徳科の担当なので各学年で系統だったところをそれぞれ入れてくださいと話をして、まずは根拠になる資料を奈良県から出さったので、これを用いてまずは年間計画を立てて実践してみても繰り返し更新していく形をとっています。

協力者 昨日の大阪の報告でもあったと思いますが、部落問題学習を実践しているのは、ここだけなんていうような話題もあったと思います。それぞれの所属なり地域で部落問題学習を広げていく、取り組んでいて、自分のところではこんな

ことをしているというようなお話があったら教えていただきたい。

香川 本校では、小中学校の授業を公開して、どのような学習をやっているのかを知る取り組みを行っている。また、4つの中学校に分かれて進学するので、その4つの中学校でどのような学習をしているのか、そこに入ってくる小学校がどのような学習をしているのかをお互いに公開し、授業をお互いに見合うような取り組みを行っている。部落問題学習を取り組む学校を市教育委員会の方が、公開できるところは公開してくださり、全学校に案内をかけてくれている。公開なので自由に見ることができるという案内文書が出るので、見に行くというような形です。公開している学校は、地区のある学校もあれば、ない学校あり、それぞれ、取り組みの濃さ薄さという違いはあるのですが、見に行くことで、これだったら自分の学校だったらできるという新たな気づきだったり、新たな取り組みに繋がったりしていくことを行っている。

香川 私は、どこの学校もこの部落問題学習はしているものと思っていた。しかし、4中学校選択制になって、新たな広がりを見せたときに温度差があることに改めて気付かされた。それぞれの7つの小学校の子は、どこで机を並べるかわからない。ムラの子だけが一生懸命力をつけても、それを理解してくれる周りの子たち、支える子たちがいなければいけない。学びの温度差を縮めるためには、先生方の意識を変える必要がある。先生方は、差別の現実から深く学ぶということで、市内の先生方が夏休みとかに現地研修に来る。その時、地域があるからとかないからではなく、こんな理不尽な差別がこの社会にある限りやっぱり教育の力が大きいことを訴え続けている。香川の場合は、少なからず地道にやってきたことがあるので、ある程度の成果は少しずつですが出てきているように思っている。もちろん部落差別がゼロにはなっていませんが、少しずつですが、着実に教育の力は前に進んでいるなっていることをすごく身近で感じている。私は、先生方に感謝をしている。先生方のお力添えがなければ地域の子も育たないし、私達隣保館職員も先生と一緒に共に連携

してやっていくっていうことを日々取り組んでいる。みんなでやっていこうって地域と繋がることの大切さっていうことで、本当に先生方の力はとても大きいです。特に全ての子どもの教育を受ける権利がある義務教育、もちろん発達段階に応じてなんですけど、やっぱり心が育たないといけないので、就学前から系統立てて進めていってもらいたいと思う。

協力者 昨日の大阪の報告の中にあった、あの味噌作りのように地域の教材っていうのも大切だと思います。けれども今回報告のように、どの学校でも取り組む部落問題学習の在り方について提案をしていただいた。子どもたちを丁寧に職員全体で見えていく、子どもたちが安心してすぐく学校生活送れるための先生たちの取り組みが確認できた報告であった。

－報告5－⑬

「金持ちより人持ち・・・『縁』する人に感謝して」
(高知県人教)

－主な質疑と意見－

協力者 1年間の学級づくりというところから様々な実践を発表していただきました。15の春という言葉が出てきましたが、それとも兼ね合いながら先生方にこの報告から考えられたことや質疑をして深めていきたいと思います。

奈良 自分の学級の中でも、重なる課題を持つてる子がたくさんいると思いながら聞かせていただいた。Cさんは、大きく成長しているようだが、どんなきっかけがあったのか。

報告者 私自身、すごく人付き合いが苦手で、嫌いな人が自分の中ですごく多くて、結局自分が孤立した経験があったので、まずそのことを話した。自分がこの集団の中で楽になるためには、自分のいいところ見つけた方が楽になったことを伝えた。普段の生活の中で、お互いが友達のことを褒める場面が増え、それを真似する子どもたちが増えてきた。7月のアンケートの中で初めて喧嘩した相手にそれぞれが書いていた時には、子どもの心っていうのは見えないと私自身が反省したことの一つです。

香川 私は授業を見る時、最初に、先生と子ども

たちが、どういう関係で授業に臨んでいるかを最初の5分間で見る。子ども達がどこをみているか、授業される先生からどこを見ているかと見ています。そこを研究授業の前でも、人権・同和教育の授業の時でも内容よりまずそこを見るようにしている。そこで、学級、子どもたちと先生のやり取り、子どもの眼差し先生の眼差しを見て、学級はすごく温かいということを感じたら、授業内容よりもその時点で人権・同和教育の授業は成立していると思っている。中学校の中で細やかに子どもたちを繋いでいるというのが、これからの人生の中で良い影響を与えていくだろうなと思った。多感な中学生が話し合いをできるようにするために、また、一分間スピーチで感謝のメッセージを送れるようにするために地道な何か話し合いをするときの仕掛けとか工夫について教えていただきたい。

協力者 ついつい私達は1日1日を積み重ねていっているということを忘れがちになります。先ほどの系統性に基づいた授業の構築でも出ましたが、先生がこの1年間の学級づくりの部分語っていただきたい。

報告者 少し話がずれるかもしれませんが前任校は非常に発達障害の多い学校でユニバーサルデザイン指定を受けている学校でした。様々な子ども達がいる中で、どうするかと考えた時に、1分間という時間が大切になる。1時間授業をするためには、一つの課題に対して自分の意見を持って友達と話し合う。それを全体に言う。それをまたみんなで話し合うことを実践してきた。話し合いの中のテーマについて、まずは自分の考えを言う。五、六人の班でまずは全員が自分の意見を言う。そのことについて班の意見はどうするか決める。それをホワイトボードに書いて発表する。人の意見を聞くときは必ずみんな黙って聞く。そして、それについてどう思うのか、自分たちの意見を言うことを普段の授業の中で取り組んでいます。ホワイトボードは大活躍です。なかなか耳で聞き取れない子どもたちも、ホワイトボードに書くと、今、何が言われているのかがよく分かるので、みんなが共有できる。それを様々な場面で活用しています。初めのうちは定着するのは時間か

かりましたが、今は、自分たちで動けるようになった。

協力者 やり取りから最後感謝に結び付いたっていうところには何か感じられたところは。

報告者 何をしてもみんな拍手をするからではと思う。誰かが発言しても必ずうなづく、拍手をするっていうことが子どもたちの中にも定着していったことが、一体感が芽生えていくので、何かそれが一つ友達への感謝になったのではと思う。

香川 教室になかなか入れない、サポートが必要なお子さんがいるということだったが、どのように校内でサポートが必要な子どもたちの情報交換をしているのか。また、小学校と中学校ではどのように連携しているのか

報告者 この件に関しては、管理職が来られているのでお渡しします。

高知 校長です。不登校率が大きな課題となっている学校です。市の方と連携しながら、関係機関や別室対応という形で対応している。その教室には、5教科の先生が必ず居るようにし教科の学習をしていくというような関わりをしている。情報共有については、働き方改革等々で朝の打ち合わせの職朝がない学校が多いですけども、ホワイトボードを活用しています。校内支援会等でコーディネーターの方が、時間と場所を取って話をして情報交換をしているということとこれが一番だと思う。

高知 教頭です。縦担任で教科をもっています。つまり、縦の関係をしっかり繋ぐっていうことを実践しています。職朝以外にも一週間に1回、時間をとって学年会っていうのを定期的に持っている。

それを持って支援会を行うというように繋いでいる。今どの子どもがどういう状況にあるかを、どういう支援をしているかを共有できるようにしている。

奈良 生徒1人ひとりの良いところを見つけて褒めようと決めたというところで、非常に思春期の子どもであれば褒めるっていうのは、僕らにとって難しい部分もあると感じる。実際どのように褒めていいのか、褒める上での意識しているポイ

ントを教えていただきたい。

報告者 なかなか難しいところですが、例えば、第三者で友達が言ったことを、この人がこんなことと言って褒めていたとか、私だけじゃないっていうことの情報も一緒に伝える。後、保護者にいいところをお家でも褒めてくださいねっていうと失敗するので、「先生から聞いたから、お母さんは嬉しかった」というふうに付け加えて欲しいと、私自身の子育ての失敗談からお願いしています。情報共有のことでは、担当の先生に、その日の授業のことを聞いて、褒めたっていうことを伝えることもしました。たくさん先生が関わってくださっているの、その先生方のことを伝えるっていうことが、やっぱりクラスの中では良いことに繋がったなと考えている。

愛媛 学級経営の取り組みが、部落差別の解消を目指すという観点から言えば、どのように繋がっているのか、先生あるいは学校のお考えを聞かせていただいた。

報告者 部落問題学習をする機会が限られるというのを自分も感じているところです。その部落差別の根幹にある差別する側に問題があるということから、誰も差別しないっていうことを自分の目標にしたいと考え、どの人も大事にできる人になるように私自身も心がけて授業している。それが部落差別の解消になるかは分かりませんが、誰かを置き去りにしない、みんなを大事にする、共に成長するっていう集団になればと思っている。そのためには、保護者の方であったり、地域の方であったり、多くの方が関わっていただいてこそできるものなので、なおさら日頃から感謝ができる子に、そこに気がつくような子どもにしたいと思っている。

協力者 例えば、このクラスの方の先生が受け持った1年間の授業の中で、具体的な部落問題学習の時間はあったのか。

報告者 結婚差別と就職差別については学習を行った。2年生の時は、ケガレいうことについて歴史学習もしますが、3年生は人権の学習の中で就職差別と結婚差別についての学習している。

協力者 先生の1年間の学級経営を通して子どもの成長というところ、15の春というところに

向かっての取り組みを聞かせていただき、一人ひとりを大切にすること、子どもたちに学校という居場所をつくっているというところの素晴らしさを確認できました。

Ⅲ 総括討論

視点1 様々な不安や困り、悩みがある子どもたちにどう居場所をつくるか。

視点2 これからの部落問題学習の在り方、他人事にしない、させない指導の在り方

- ・ 職員の中で温度差は、知識として知らないとかいう話がまず前提としてあるのではないか。市に転入された先生方は、フィールドワークをしたり、わらじ作りの産業について学習したりする研修がある。しかし、ムラのことは知っているが、授業をするとすると全然違う。6年生の担任は研修を毎年受けるが、6年担任にならないと詳しく分からないという現状が浮き彫りになった。課題を解消のために市教育委員会から先生に来てもらい、全職員でその研修を受けるとような計画などから、この課題を解決していくことも大事だと感じている。
- ・ フィールドワークは、本校では4年生で行っている。社会科で地域の発展に尽くした人々という単元があるので、私達の学校の方では地域の発展に尽くしたムラというのは、歴史的な背景で様々な理由があって移転をさせられたという場所だが、子どもたちが部落を学んでいく中で、まずは地域に愛着を持つべきではないか、その先人たちが苦しい背景があった中でも、それに負けないように立ち向かった人たちがいたことをまず知るべきじゃないか、自分たちの地域に愛着を持てることが、部落問題を学習する中でも大事だと考え、取り組んでいる。差別を知る、差別に立ち向かうということも大事だけれども、地区があるからこそ、そういう場所に対しての愛着を持たせるっていうことも、私達も役目だと思って取り組んでいる。
- ・ 部落差別という不安を抱えて生活している状況は、未だにある。どこの学校でもその可能性があるということから、実際その立場に立ち帰って学習をする必要性があるのではないか。ただし、具体的な地域教材を作っていくことはな

かなか難しい。子どもたちが卒業して大人になっていく過程でも、どこで差別にあうか分からない。また、出会ったときにきちんと対応できるように力をつけさせたい。学校として、学ぶ機会を保障していくことは大事だと考える。

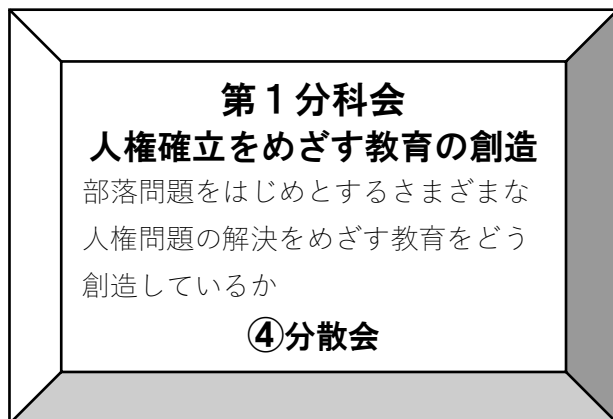
- ・ 最初に先生になったとき、部落問題学習について、みんなが言わなければいいという考えだった。今はだいぶ考え変わっていますが、それが言える環境かどうかというのも大きい。同和問題を基盤として諸課題に取りかかるべき。
- ・ 教えること。教師としてだけでなく人間として部落問題に関することを掘り下げて、常に心の内に留めておくことが大事だと。それを自分だけで抱えるのではなく、その立場からまず逃げなくて、周りの信頼できる人に聞けることは子ども自身もそういう環境に立てるようにすることが教師としてできることかなって思いました。いつでも聞ける、「先生おかしいかな」って言えるような共感できる環境をつくるのが教師としてできること。
- ・ キーワードは、「繋がり」いうこと。保護者との繋がり、子どもとの繋がり、後、地域との繋がり、そこをどう繋げていく考えは、今後課題でもあるし、大事にするべき。
- ・ 昨日終わってから皆さんの話とかも聞きながら考えたが、不安もなく幸せに過ごせるのがやっぱり一番。そうするために、部落差別は、科学的根拠も何もない、絶対いらない差別であると認識させる。学校全体がチームとなって、仲良くやっていくことを心がけることでいろんな情報やいろんな知識で学ばないといけない。各学年で子どもたちの実態とかもしっかり見る、情報共有で情報を高め合う。それで子どもたちに返してあげるサイクルをしっかりとやっていければ、何かもっともって学校の雰囲気がよくなり、良いチームで部落問題学習に取り組むことができる。
- ・ 保護者の立場から非常にありがたいと思っている。気づいてないからとかではなく、丁寧に学校で取り組んでいくことを大事にしてほしい。熱心に取り組む中で、LGBT のことと部落問題学習の共通点が結びついたら教師も気づ

けるかもしれない。丁寧に積み重ねていく中で、点が線になって、いろんな線が繋がる中で網のようになっていろんなことに引っかかる方がきつとできていく。

- ・ 部落差別にすごくこだわって、この教職に就いてきた。自分は同僚の先生から、こだわる意味がわからないということをダイレクトに言われたと記憶しています。でも、自分がやっていかなければと思って若いときは突っ走ってきたと思う。地区改良がなされて地区っていうのが本当にわからなく見えにくくなってきているのが現状です。昔であれば細い道、消防車も通れない、救急車も入れない、そんな道が自分の小さいときもありましたが、今は大きな道が設立された。自分自身の小学校の頃自分の地域の子もたちと遊んではいけないと、同じ同級生の保護者の方に言われました。中学生の時、夜遅く電話があって、何も語らず、言われたのはたった2文字「部落」ということでした。自分自身それを聞いたときに、もう手が震えて電話もおぼつかないまま、自分の親に受話器を渡したのを覚えている。自分の中ではどうすることもできない。そこで生まれ育って、そこで生きてきた自分。母親もずっと尊敬をしてきました。でも、最後に自分の人生の中で立ちはだかるのが部落出身ということでした。そう考えていたときに、やっぱり差別の根源の中で、科学的根拠がなければ、違いのないところに違いを生み出した部落差別っていうことは、まだまだ現実にあると考える。どんな事実が本当にあったのか、どんな事実が昨日まで行われてきたのかということを話すことで、子どもたちにおかしいなということに気づいてほしいという思いがずっとあった。そのおかしいことを「おかしい」ことに気付くってということが差別の解消に繋がる。将来会おう子どもの友達で将来会おう職場の人たちがいろんなところで苦しさを抱えているときに、その何を調べられるときおかしいなっていうことが言える子どもたちを作っていきたいと思う。
- ・ 社会教育と連携して、これからも取り組んでいきたいと思っている。やっぱ方向性を変える

のは子どもたちが学んで変わった姿だと思うので、そこはどんどん保護者に向けても発信していきたいなと思いました。

- ・ 学習の中で最後に、自分が安心して話ができる友達を見つける、協力者であったり、関係者であったりというところを見つけていこうと言う話で、自分に人権教育を教えてくれた大好きな先輩は、かきくけこの人権教育じゃなくて、あいうえおの人権教育と言ってくれた。



I はじめに

分科会基調は、討議課題をもとに提案された。その中で、地元協力者から「むなつき坂をこえて」は、私たちの指標となるものであること、子どもたちの様々な課題を私たちが自らの生き方の課題として考えて、取り組んでいくことに触れた上で、次の話があった。「人権教育を進めるにあたって、時に「やさしさ」「思いやり」「差別に対する怒り」という感情が中心になる場合があります。もちろん感情を表現することも大切ですが、感情だけで解決できないものもあります。そこで大切にしたいのが、先述の先達から大切にしている「むなつき坂をこえて」「今日も机にあの子がいない」という「差別の現実に深く学ぶ」ことです。それらを通して子どもたちや保護者の厳しい状況や社会情勢を読み解き、解決への方向性を見出していくことが大切です。」

最後に、討議の柱が確認され、報告・討議に入った。

II 報告及び質疑討論の概要

一報告 1-⑪

「先生、ぼくの髪の毛あげよっか？」

(熊本県人教)

一主な質疑と意見一

滋賀 生活綴り方に出会ったきっかけは何だっ

たのか。登場する報告者の娘さんに、報告者の両親のことをどう伝えたのか。

報告者 生活綴り方という言葉自体は、今日初めて知った。綴りには大津町で出会った。自分の思いを紙に書かせていく時に最初は悩んだが、自分の中にある悩みや自分も差別者の立場になることがあることを差し出すことで、子どもたちも間違ってもいいんだと感じながら、自らを語り出し、紙に書き始めた。自分の娘には、「お父さんのお父さんはすごいんだよ」と伝えている。ありのままに話している。

協力者 同じように変容した児童がいたら、報告してほしい。

報告者 ある児童の暴言などで、周りの子どもたちが怖がってしまうことがあった。その児童は綴りの中で、暴言などを反省していると共に、「もう一人の自分がいるような感覚があって悪いことをしているとわからなくなる」と書いた。また、1年生の時、けんかをした後謝ったのに許してもらえなかったことがあり、誤るのが怖くなったと綴り、発言した。学級の仲間はその子の悩みを理解していくことができた。

協力者 1年生の時からかかっていた周りの子どもたちはどのように変容していったのか。

報告者 綴り続けていく中で、この学級の仲間は誰もからかうことがなくなったと大志さんは言っていた。人権学習を生かしながら、普段から違う部分も認め合うことができていく。4年生以前に大志さんが自分の思いを伝えることができていれば、周りの子たちも理解することができていたと思う。

熊本 報告者自身の変わり目を教えてほしい。

報告者 大津町の小学校にいる時、職員研修で自分を語る時間があった。何も話すことはないと思っていたが、実は自分が心を閉ざしていたことに自分も気づいていなかった。先生方に人生で初めて聞いてもらい、先生方に受け止めてもらった。その時に、親の仕事について、自分に差別心があることに気付いた。自分を差し出すことの大切さを感じた。

愛媛 自分の思いを語ったことがこの授業のポイントだったのではないか。報告者の資料を自分

も授業で使ってよいか。

報告者 以前、人権学習で部落差別の教材のモデルになった方に、この教材で授業をしてよいか聞いたところ、「使ってよいが先生は先生の話をしてほしい」と言われたことが衝撃だった。教材を作ってよかったと思うのは、自分が作ったのでどんな質問が来ても答えられる。この教材を使ってもよいが、先生は先生の話をしてほしい。

熊本 報告者はとてもあたたかいクラスづくりをされてきた。会場には、報告者の関係者が多く集まっている。これは解放運動をしていく我々と学校教育が一つになって歩んでいることを意味している。

一報告 2－⑱

「誇りを持って生きていくために」

(愛媛県人教)

一主な質疑と意見一

愛媛 報告の中にある 2022 年 1 月はコロナウイルス感染者に関わる情報に対してデリケートな時期であった。休んでいる理由を聞いてはいけな対応をしている時期に、オンライン授業でなぜ児童が感染したことを告げ、早く登校したいとクラスの児童の前で言ったのか。志の高い上司が、話してもいいよと言っていたのか。

熊本 クラスで拍手が起こったという部分が気になった。その場面について教えてほしい。

報告者 いずれコロナウイルス感染者が増え、学級内に感染者が出るという認識はあった。子どもたちを守るためにシトラスリボン運動を広げていった。タブレットは各家庭に 1 台ずつ届け、オンラインで授業をした。希望したらクラスの児童に顔が見えることを伝え、どうするか 1 家庭ずつ確認をしたところ、子どもたちも保護者も映してほしいとなった。女子児童が朝の健康観察の時に感染していることを言った。コロナウイルスにかかりましたと言うことははばかれる時だったので、どう答えたらよいか相談をしていた。女子児童がわざわざみんなに言う必要なかった。自分は心臓が止まるくらいの気持ちだった。しかし子どもたちは元気であることに拍手を送った。ハンセン病問題学習や、シトラスリボン学習に取り組んでいたことが学びになっていたと思う。

滋賀 語りたくても語れない人がある。誇りを持ちたくても持てない人がある。語れない人が実際にたくさんいることを、先生はどう捉えているのか。

報告者 語らないことを選ぶのも権利だと思う。全てにおいて差別をなくす側に立てるかどうかは大人でも無理。しかし、学んだことに関しては、少なくとも差別をなくす側に立つ機会を増やしていくと子どもたちには話している。知らないことがたくさんあるから、学び続けると話している。

愛媛 シトラスリボンプロジェクトはいいきっかけになる。差別をなくすことを一つからでもいいからやっていく。

協力者 NPO 法人プロジェクト 2008 とは何か。

愛媛 1997 年にできた。人権啓発劇の制作を通して、自らの差別心と向き合って、部落差別をはじめとするあらゆる人権問題を解決していく。3つの約束がある。実際に起こった差別事件でシナリオを作っていく。その劇を通して差別心と向き合った姿を共に見ていただく。劇の中で部落差別をなくす方法を提案する。

一報告 3－⑲

「ひとり」から、みんなの中へ

～自分の気持ちを出すことの難しさ～

(大阪市人教)

愛媛 社会性やコミュニケーション能力に課題とあったが、小学校からの引継ぎはなかったのか。小学生のころから整理整頓ができなかったとすると、障がいのようなものはあったのか。克服する手立てはあったのか。

報告者 小学校との引継ぎの中で、次郎の特性について情報提供を受けている。中学校で関わる中で、整理整頓についてはどれだけやっても改善は難しいと感じていた。将来、大人になってコミュニケーションが取れること、身の回りのことができることの 2 点を目標にした。保護者の協力を得ながら、1 日待ってみて提出物が出なかったら声をかけた。机やカバンの中を一緒に確認することを 3 年間かけてやってきた。

愛媛 コミュニケーションスキルを高めることを専門にしている先生に相談などはしたのか。

報告者 次郎に直接働きかけるというより、周りの生徒が次郎に向かっていくように働きかけた。

学校・学年が楽しいと思えるような方向で考えた。関われる友だちが増えたらいいと感じた。

協力者 周りが関わっていく方法や声掛けの工夫として何をしたか。

報告者 男子2名に次郎に声をかけに行くように働きかけ、輪が広がった。そのあと5人組になった。

報告者 コミュニケーションについて、入学時、先生とコミュニケーションが取れなかった。しかし、子どもたちと少し話ができるようになり、その後先生たちとも次第に話ができるようになった。

奈良 声をかけに行かせた2名の男子について、「幼い男子2人」と書いてある。幼いという言葉を使う意図はあったのか。必要があったのか。

報告者 意図は特にない。本当にかわいくて、小柄だったから載せた。勉強して気を付けていきたい。

協力者 体育大会の時、小学校3校が参加している部分など、小中連携で大切にしていることは何か。

報告者 多国籍の仲間が住んでいるなど、違いを認め合うことが大事である。みんな顔見知りになろうという取り組みがあった。人権文化祭の体育大会で、小中学校一緒にリレーに参加したり、太鼓の発表を行ったりして、小学校同士のつながり、中学校とのつながりづくりを行っている。

協力者 認め合う雰囲気ができているということか。

報告者 入学の段階から、お互いに顔を見たことがある関係になっている。

奈良 次郎さんが自分の思いと違う行動をしてしまう時に、周りの生徒たちにどのように伝えているのか。フォローしていることは何か。

報告者 自己紹介の時は自分の思いと違うことを言ってしまったが、それ以降は友だちとトラブルになったり思いと違うことをしたりすることはなかった。自己紹介の時は、次郎の立場に立って、「すごく今緊張しているから、みんなの方から声をかけていこうね」と伝えた。

滋賀 探していた受験票はあったのか。今次郎さんはどう過ごしているのか。

報告者 学校でカバンの中を一緒に探したのがなかった。帰宅後に家にありましたと電話があった。今はとても高校が楽しいと言っていると聞いた。**奈良** 何度も2人の男子を次郎さんに近づけようと思ったきっかけは何か。

報告者 2人を選んだ理由は、びびっとくるものがあった。2人は小学校の学級の中でもムードメーカーになっていたので、この2人がいいだろうと感じた。次郎も2人のことを苦手な様子がなかった。

一報告4ー⑯

「先生に一番叱られたんは、おれや。」
(奈良県人教)

熊本 Aさんやクラスに対して、これだけ心を通じ合えるような時間は、どんな場面でどんな時に時間を費やされてきたのか。叱られるという言葉に温かさを感じた。

報告者 Aさんのことは、けんかがあった時や、Aさんが周りから目立っている時にクラスで時間を取って話し合ってきた。Aさんが暴れている時に、Aさんから話を聞いて、どうしてこうなったのかみんなで考える時間をもった。Aの状態からクラスで考えて、自分たちはやりすぎたと考えたことがよくあった。また、叱り続けてきたわけではなく、Aさんの思いを聞く時に、こうしたらうまくいくのではないかと一緒に考えた。

愛媛 学級編成などで注意したことは何か。病院の先生に診断をしていただくことはあったのか。

報告者 学級編成で考慮したところはあると思う。今年、学校のケース会議で特別支援的な方向も進めていく話はあった。しかし、私とAさんとの関係の中で起こっていることもあるのではないかと指摘された。Aさんの実態を知っていたら、支援ができたことがある。ケースから見て、どういった支援がよいか考えている。

滋賀 生活綴り方に出会われたきっかけは何か。Aさんが話し方以外の部分で生活を綴ったものがあれば知りたい。心の壁という書き方に疑問がある。報告者の思いを聞かせてほしい。

報告者 生活綴り方には、学校の研修で出会った。実際に生活綴り方を始めてまだ2年くらい。Aさんが生活綴り方をベースとして、家族を振り返る

などして自分を見つめていくなどまで至らなかった。高めていかないといけないところ。Aさんが他の文章で綴ったものを紹介することはできない。心の壁について、どう表現するか悩んだ。Aさんと子どもたちの間に何か崩せるような壁のようなものがあると思った。周りの児童が築いたりAさんが築いたりして、今までの生活の中で築いたもの捉えた。自分なりに攻略していくものと考えている。

奈良 報告者は、子どもたち同士がつながるために、先生と子どもたちがつながることをずっと続けてきたのだろう。

滋賀 「私の中でひっかかりがあった」というところに注目したい。そこにひっかかりをもち、気持ちを持っていった背景を知りたい。

報告者 レポート書くに関して自分自身と向き合った。小3くらいからいじめにあった。3年から6年まで独りぼっちで生活した。いじめは人間形成に影響を与えと思う。人を信じられなくなった。中学での修学旅行をきっかけにもう一度人を信じて、相手に伝えていこうと思った。もう一度、人間としての尊厳、差別から解放されるべきだと考えた。差別の芽があったときに、子どもたちにどうなんかなと考えていけるような教師でいたい。私が心で思ったことを伝えられるように生活している。

奈良 怒ると叱るは違うものとして伝えているのか。

報告者 叱るようにしている。怒ると感情的になってしまう。もう少し子どもに考えてほしい時に、叱ることを意識している。今この子はこんなことを言ったけどどう思うか、それは違うことなのではないかと語気を荒げることなく話すようにしている。自分たちで気づき、次からどうしていきたいか導いていきたい。

滋賀 Aさんが綴れないことについて共感して聞いていた。Aさんがくぐってきた状況の厳しさを表していると思う。そう考えると、やはり心の壁と片づけてよいことなのか。ベースに暮らしや生い立ちの共有を確かに持っていくことが、子どもたちをつないでいく大事なことではないか。

報告者 心の壁で片付けてはいけない。次に生か

していききたい。クラスでの共有、くらしを私のベースにすることで、Aさんが変わっていく様子や、自分もそこから学んでいくことをしていきたい。

一報告5ー⑳

「先生、私、みんなのまえて歌っちゃった。」
(滋賀県人教)

熊本 報告者から見て、なぜAさんは突然切り替わり、周りの子どもたちとつながっていったとお考えか。

大阪 周囲の仲間たちはどう関わり、どういった子どもたちだったのか。

三重 きっと先生の見えないところでの取組があったから、Aさんの変容が見られたのだと思う。周りの子どもたちに対して、日々学級経営の中でこんなことを大事にしているという部分を教えてほしい。

報告者 1年生の4月の時、Aさんは2時間歩き続けていた。その様子を見ながら、どのタイミングで教室に入るかパターン読んでいる中で、次ほどの先生が教室に来るかわからないなど、不安だと教室に入れないことに気付いた。そこで、先生の名前を書いた時間割表を渡したが、あまり効果がなかった。次第に廊下で教室を眺めている時間が増えてきた。急に時間割が変わると教室に入れない。ノートをとるのかワークシートに書くのかかわからないと入ることができない。そういった様子から、先のことがわかると教室に入ることができるようになってきた。また、Aさんが「きっとこうでしょ」と言うのを「そんなんよ」と言いながら連れていったら、入ることができたこともあった。Aさんに共感し、不安を共有した。私はその子にはなれない。半分不安をもらうように声掛けをした。そして、友だちが誘うと入れるようになった。教室の座席は変えなかった。席替えをすると教室に入れない。行動パターンがだんだん見えてきた。周囲の子どもたちは、自然という感じ。大縄跳びでは、引っかかった子を責めない仲間の姿があった。計算が苦手な子がかけ算の間違いをしたときに「そうやな」と周りの子たちは言って、受け入れた。否定しない。受け入れてから、教えていた。計算ができるようになったら拍手をしていた。そういう人たちばかり。Aさんもここに

て大丈夫と思ったのだと思う。移動教室で誰もいないときに、Aさんが教室の黒板をきれいにしたり、机をきれいに並べたりしていたことがあった。教室に仲間がきたところで、「これ、誰がやったと思う？」と私から言った。タイミングをねらって「Aさんがやったんだよ」と言った。そうすると自然とありがとうと子どもたちは言う。そういったことを繰り返していった、つながりが深まっていったと思う。Aさんのできることをまわりがちゃんと認めていたのだと思う。

愛媛 アルバート・エリスのABC理論がある。相手を変えない。自分を変えない。考え方を変える。報告者の話の中にこれが何度も出てきた。こういった先生がいられたら、しんどい思いをする子がどんどん減ると思う。

愛媛 報告者のような考え方を持っている先生の存在は大きい。

報告者 考え方を変えるについて、自分は自然とやってきた。当たり前だと思ってきた。言われてそうかと思った。考え方を変えるについては、子どもにもはっとさせられている。ヒントは毎日の生活の中にたくさんある。子どもの近くにいたい。自分は子どもの上には立てない。同じ目線で、同じものを見て一緒に考えたい。

愛媛 Aさんの保護者とは連絡を取っているのか。

報告者 今はいつでも連絡を取ることができる。電話も敬語を使わずにしゃべってくれる。Aさんが私のことを「今は一番信用している」と家庭で言ってくれるから、母親も私を好いてくれているように感じる。

愛媛 Aさんの活躍をずっと仲間に伝えるなど、細やかな関わりがAさんを支えていたのだと思う。ややもすると苦手な子が多い子どもに対して、周りから厳しい目を向けられることもあると思う。そこに偏見があり、私たちがどうかかわっていくかがとても大事。報告者の自然体な姿が、子どもたちの安心につながっている。

愛媛 報告者の百人一首の時の対応が素晴らしい。寄り添っている。Aさんが安心できた材料の一つだったと思う。今後出会う子どもたちにとっても、報告者の人柄は子どもたちの支えになって

いくと感じる。

報告者 子どもたちは「あの子は何で係活動をしていないの」から入る。そういう時に、「あの子はここでこんな風に活動をしていたよ」と見せて返してきていたことが、後々生きてくる。百人一首の対応の時、Aさんがしゃべるまで何もしないで、そばにいさせてくれた学年の支えは大きかった。自分の人生の中で、分岐点になったり宝になったりしたことがいっぱいあった。それを今、Aさんに返しているだけ。周りのおかげで今の自分があると思う。

Ⅲ 総括討議

愛媛 大人である、教師である自分たちが悩みを言える関係作りが大切ではないか。

滋賀 いろいろな生活背景を持っていて、荒れの状況にあるから、その子どもからは感性が奪われてしまっているとみてきた自分がいる。しかし、そうではない。その子どもの感性は奪われたのではなく、封じ込められているのだと気づいた。そこに、それぞれが持っている生活背景や生い立ちが影響していると思う。改めて、生活綴り方をベースにした実践に触れることによって、くらしを開かせる、くらしを見つめることが重要だとこの2日間で感じた。

熊本 語りたくても語れない子どもがいることについて、もう一度考えている。昨日、ありのままでいられることの強さについて報告をさせていただいた。ありのままでいることは強いと思っているが、語れないことは弱さではない。ありのままでいてほしいことを伝えたいと思ってきたが、レポートを報告するたびに「先生は乗り越えたから語れるんだよね」と言われた。苦しんで渦中にいるときは語れない。語れないことは、社会や大人が子どもに抱えさせてしまっているものがあるのではないか。人と比べてしまう大人の何気ない発言の中で苦しみを抱え込んでいってしまうのではないか。そういうものを言える社会にしないといけないと思う。

滋賀 滋賀県人教からの報告について、百人一首に入れられないAさんのそばにいて、2時間一緒に過ごした話があった。待つ。待てる。そういう時間を一緒に過ごすことが大事だと改めて感じた。報

告者が今まで過ごしてこられたいろいろな方からの言葉がけの中で、いろいろな言葉を受け止めてきた報告者が今ここにいるのだと思う。

奈良 子どもたちは、なぜ生きにくい状態にさせられているのか。それは、普通という指標や〇〇でなければならないという考え方から、しんどくなっていると感じる。ありのままで、多様性、その子らしさという言葉がたくさんできているのに、なぜ子どもたちは生きにくくなっているのか。そう考えた時に、子どもたちの前に立つ大人が、まだありのままを自分たちの中に落とし込めていけていないのではないのか。

奈良 自分の言いにくい部分などを、まわりが受け入れていくような土台があってこそできる。本人自身の変容も大事だが、まわりを育てていくことも教師の大事な仕事。教師に心の余裕がなくなると、子どもたちに寄り添ったり、ゆっくり待ったりすることが難しくなる。周りの子どもたちとのかかわりを見直していきたい。

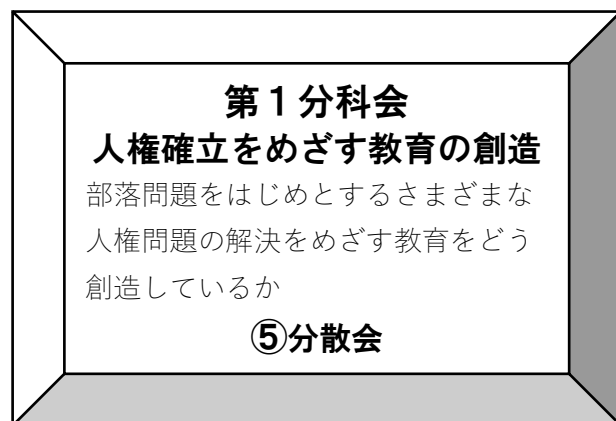
愛媛 自分事として考えていく中で、自分に何ができるのかを考える。いろいろなことを計画して、出会わせていく働きかけが、人権感覚を育てていくことにつながる。

鳥取 子どもたちに主体的に取り組ませるために、自分に余裕を持ったり自分自身を見つめ直したりすることが、相手を思うことにつながると思った。

— 2 日間のまとめ —

協力者 全同教は 1953 年に生まれた。その前年に、広島で差別事件が起こった。このことがきっかけになり、文部省も含めて全国的な同和教育のうねりとなっていった。その事件とは差別授業であった。その差別事件を通して、教育の中で差別をなくしていく運動がとても大事だとなっていった。その差別授業では、きちんとした教材研究を行わずに、間違っただけの情報を子どもたちに教えたこと、教師の語りによって一斉に級友の視線とささやきが被差別部落出身の生徒に集中したことが問題となった。これは、全く集団作りがなされていないことを物語っている。さらに、しんどい思いをしている子が、しんどいと言えるクラスを作っていない実態や、子どもの家にどれだけその

先生が関わっていたか、親と話ができただか、子どもの背景や成育歴がわかっていたか、そういった活動も全くされていなかった。さらに、子どもとの信頼関係が保てていない。そういうことが大きな問題点として挙がった。今、被差別部落の人たちの生活や誰なのかが見えにくくなっている。その状況の中で、本当に部落に対しての学習ができているのか。授業で自分は間違っただけを言っていないのか。もし仮に被差別部落出身の子どもがいたときに、その子を支えられるような学級になっているのか。再度確認をしたいと思う。一人一人それぞれの立場があり、自覚していると思う。その認識をどこまでもっていき、そこから先は自分がどんな行動をするか、どんな風にしてこの 2 日間の学びを皆さんに広めていくかにかかっている。そこが行動としての認識になってくと思う。



I はじめに

分科会基調は、討議課題をもとに提案された。初めに、地元協力者から次のように呼び掛けられた。「感染症の流行が 3 年目を迎える中、これまで以上に格差が広がり、子どもたちの『いのち』『こころ』『からだ』が悲鳴を上げている状況がある。そこには、差別の現実が深く根付いている。だからこそ、私たちは一人ひとりの子どもの生活実態・背景を丁寧に把握し、生活の課題を明らかにしていかなければならない。そのためには、今進めている取組が、子どもたちの自尊感情を高め、なかまをつなぐ取組になっているかという点検が必要である。子どもが『権利をもつ主体者』であるということを大切に、部落差別をはじめ、あらゆる差別を許さない主体者としての生き方を育み、反差別の教育内容を深化・発展させていこう。」

この後、討議の柱が確認され、報告・討論に入った。

Ⅱ 報告及び質疑討論の概要

—報告 1—^{②②}—

「すべての子どもたちが自分らしく、安心して過ごせる学校をめざして」

(福岡県同教)

—主な質疑と意見—

香川 制服の選択制が、学校の中でどのように進んでいったのか詳細を。また、「赴任した当時に感じた雰囲気は薄れている」という部分について詳細を。

報告者 2年後、市全体で制服がブレザータイプに変わることが決まっていた。ただ、現行の制服を着ている在校生の中でしんどさを感じている子に対応したいという思いがあった。検討委員会で論議し、保護者の負担にも配慮し、卒業生が寄付してくれた制服を貸し出す方法を取った。ただ、大人による話合いに時間がかかり、子どもが同席して意見を言う機会を作れなかった。PTAには、その都度相談や報告をしていた。

赴任当初は、「集会所に行けばみんながいる」という雰囲気があった。コロナ禍に加え、世代交代等もあって、その頃の雰囲気と変わってきたと感じる。かつて自分がそうしてもらったように、これからは、自分が前に立って、後に続く人たちのため学びを進めたい。

奈良 制服の選択制をきっかけに、生徒会や行事等の見直しがどう広がっていったか。

報告者 男女別の文言をなくした。生徒会の委員なども、「男子1名女子1名」などの規定をなくした。また、運動会などにおいても、男女別の種目をなくすなど、一つずつその都度話し合って変えていった。

滋賀 トランスジェンダーの子と関わった。体操服で登校したいということであったが、その思いが親に伝わるまでにすごく時間がかかった。その子のことを思って、昨年度、リモートではあったがLGBTQの当事者に話をしてもらおう機会もあった。講演後、講師のいる部屋に別の子がやって来てカミングアウトをした。また、別の子も来て話を聞いてもらっていた。いろいろ悩んでいる子がいることに驚いた。自分の性のあり方について

悩んでいる子は、どこにもいるのだと思う。それが言えるかどうか。報告者の「自分が知らないうちに人を傷付けていたかもしれない」と自らを振り返る姿勢が子どもたちの心に響き、「この人なら自分の思いを受け止めてくれる」と思ったから、報告者に対して多くの相談があったのだと思う。

—報告 2—^{②⑤}—

「すべての子どもにあたかな学校をめざして」
(京都府人教)

—主な質疑と意見—

奈良 特設教室は、何名の児童が利用しているか。何名の教職員が対応できるのか。特設教室の使い方の現状を知りたい。また、Bさんについて、その後、家庭の状況は変わったのか。どのようなアプローチをしたのか。

報告者 3つの特設教室がある。現在、学習室を4名、図書ルームを1名の児童が利用しており、それとは別にカウンセラーが対応できる部屋がある。フリーな立場で動ける児童支援担当教員と空き時間の教員、支援担任等が関わっている。本校の教職員は17名で、余裕はない。それでも、困っている子に対し、何とか学びの場を保障したくて取り組んでいる。朝、どんな状況で何人別室が必要なのかを確認し、始業前に1日のスケジュールを決める。その時その時で、空いている教員が対応に入る。子どものニーズに合わせて対応している。

Bさんについては、学校だけで何とかしようとは考えていない。様々な関係諸機関と連携し、時には児童相談所の力も借りながら家庭支援を行っている。保護者との連絡も欠かさず行ってきた。現在は、母親が本人にとって良き支援者へと変化している。

奈良 特設教室を利用している子がいる学級の子どもたちにはどう関わり、子どもたちがどう変化しているか。

報告者 全校的に、「あつてはならないちがひ」についてはしっかり支援・指導を行い、「あつてもよいちがひ」については、個に応じて認め合い支援し合う方向で進めている。児童会活動も、その考えに則って行い、誰もが参加できる行事を考えるなど工夫している。AさんやBさんの学級におい

ては、AさんやBさんを中心に据え、それぞれが自分の思いを出しながら安心して認められるようになるにはどうすればよいかと、学級全体で考え続けてきた。分からないことを「分かん」と言える学級づくりが大切だと思って取り組んでいる。

協力者 全児童数は何名か。

報告者 120名。

福岡 子どもたちの思いを引き出すために、コミュニケーションの中で工夫していることはあるか。

報告者 本校の場合は、特設教室を利用しているどの子も言葉での表現はよくできる。逆に、思いをしゃべりたくてたまらないようなところがある。だから、まずは傾聴することを大切にしている。

協力者 「多様性」に対する具体的な取組があれば交流を。

滋賀 個別の課題に寄り添う取組ということであるが、個別の課題があるとき、「その子の課題」と捉えてしまって、その子に乗り越えさせようとしてしまう。でも、人権というのは当事者の問題ではなく、周りの問題、社会の問題である。報告を聞いて、これまでの自分たちは、個々の課題に気付いていても、学校という枠にはめてしまい、その子が置き去りになってしまいがちだったと反省した。今回の報告では、ABCすべての事例で、「当事者ではなく学校を変えていく」という姿勢が見えた。

福岡 本校は中学校だが別室がある。安心して学校で過ごせるように、教員とは別に助手が2名いて、子どもや家庭と関わりながら最後は教室へとつないでいく取組をしている。ただ、そこで過ごす子たちが高校に進学したとき、そこで同じような支援が受けられるかという、現実としてやはり難しい。その子の将来を見たとき、社会全体が受け皿となれるような仕組みづくりが大切かと思う。

福岡 Bさんが中学校進学後に、もし小学校と同じく個別に寄り添ってくれる環境が保障されていなかったらどうなるだろうかと考えたとき、やはり学校段階間の連携は大切である。実際、どの

ように連携しているのか。

報告者 自分たちも、学校段階間の連携については課題と捉えている。本校は、保幼・小・中の一貫教育を見通しているので、5年生の頃から中学校と一緒にケース会議を行っている。今後も、なるべく早い段階で連携することを大切にしたい。

—報告3—②—

自分だけじゃないってわかった

～くらしを語りはじめた子どもたち～

(大阪府人連)

—主な質疑と意見—

福岡 「自分に重ねて考える」というとき、「自分には重ねて考えるようなことがない」という子は、学級の中でどんなふうに関係を結んでいるのか。

福岡 子どもが語る一つ一つは、語りたいときに語るものであるが、語らなくてもいいものでもある。何のために「語る」「語らせる」ことを大切にしているのか。また、学級の一員として、教師自身は何を語ったのか。

報告者 一番知ってほしいことが、一番言いにくいことである。言いたくない子には無理をさせていない。他の子の言っている様子を見て、「自分も言いたい」となって、自然につながっていく。何のために語らせるのかという点については、「言わないと分からない」ということがある。語って、受け止めて、相手のことを知ろうとするからその人のことが分かる。知らなかったら、差別が生まれる。しんどくなることがあっても、支えてくれる人がいる、仲間がいると気付いて信じてことができて前向きになれる。地域の人も子どもたちを支えてくれる。最初から大きな集団で語るのではなく、誰に聞いてもらいたいのかということを確認かめて、まず2人で、3人で、という小さな集団で語ることから経験を重ねている。

教師としては、一番初めに自分が語った。自分の生い立ちや思いを語った。その後も、機会があるごとに子どもたちと同じように自分も語っている。今週は、タウンワークスで自分の子どもの頃のことを語った。

福岡 語ることで傷付くのではないかと心配することがある。教師集団として気を付けてきたことはあるか。語ることで傷付かないように、どん

なことを意識してきたのか。

報告者 家庭に関わるようなことは、家の人にまず相談する。友達関係のことを語るのなら、まずその相手と伝えあってからみんなに語るというふうに、事前に段階を踏む。自分の学級だけがしているのではなく、1年生の時から学級内で「語る会」などをして積み重ねてきているし、教師間で取組の交流もしている。その積み重ねがあるから、子どもたちが語れる。

滋賀 「なぜ語るのか」という問いとつながるが、「語ることの良さ」「語ったことで良かったこと」について、子どもたちが成長してからのことも含めて教えてほしい。

報告者 Cの兄も本校の卒業生である。5年生の時、自分のルーツを語ったことがきっかけで、タウンワークスで後輩に語ってくれた。タウンワークスでは、卒業生からもたくさん話を聞かせてもらう。「言わないと分からない」と小学校で学んだからこそ、その先も「伝えよう」と思える。辛いことがあってもつながってきた仲間がいるから、差別に出会った時も相談できる。そういう卒業生の姿を見て、語ることに大事だなと改めて思う。

福岡 「誰の気持ちに依拠したらいいのか」とあるが「依拠」という言葉の意味を教えてほしい。また、差別をなくすために自分を語るということであるが、部落差別の現実や実態が、この子たちにどんな形で表れているのか。具体的な取組とのつながりを教えてほしい。

報告者 「依拠」とは、寄り添う、その子の立場に立つということかと思う。Aは、子ども会に行っていない。家族は差別をなくすために活動をしているが、地域外に家を建てて、地域外の保育園に通った。母は、それらのことに関しては「触れないで」という感じの壁を作る。そのあたりに部落問題の影響を感じる。

—報告4—②—

自分も仲間も大切にできる子どもの育成
(徳島県人教)

—主な質疑と意見—

大阪 「目の前の人権課題」とは、具体的にどのようなことか。また、Dさんについて、普段の生活では何もしないのに、ネット内では人の嫌がる

ことをするのかと気になった。道徳的学習と人権学習は違うと思っている。人権学習は、自分の真っ黒な心を全部さらけ出して、自分を語り合っていくものだと思っている。「やさしくん」になれない子もいると思う。自分事に差し替えるということは「自分にもしんどいことがあるで」って言えるということだと思う。その点について、学校としての取組はどうか。

報告者 様々な地域から移り住んできた人が多いと感じている。その点で、部落にルーツがあるけれど言えないままの子もいるかもしれない。また、地域にある高齢者や障がい者の施設との交流も行っている。自分が地域で生きているということ、その地域にいろいろな人権課題があるということを感じさせるため、いろんな人との関わりを大切にしている。

奈良 オンラインゲームの中でDさんを仲間に入れなかったとあるが、もともとオンラインゲーム内で3人の友達に嫌な思いをさせているのはDさんである。嫌な思いをさせられたくないからゲームに入れなかったことを、単純にいじめと言っているのだろうか。自分なら、Dさんともっと話をする。なぜそうなったのか、Dさんの思いを聞く。その上で、その思いを他の3人と話し合うことが大切なのではないか。Dさんの問題について、解決への流れはどうだったのか。

報告者 Dさんは、学校では友達に傲慢な態度を取ることもあり、3人はDさんと距離を置いていた。ルールを守らなかったのは確かにDさんではあるが、「3人对1人」という構図をどう捉えるのか…これがいじめに発展するかもしれないと考えて対応した。4人で話し合って、今後このようなことにならないためのルールづくりをした。ルールを守らないことは人間関係を崩すことにつながると確認し、Dさんは「してはいけないことはしない」、他の3人は「のけ者にしない」ことを約束した。それぞれが自分の立場でどう行動すべきだったかをしっかり考えさせた。これからも、何かあったときはよく考えて大人にも相談してほしいと伝えた。ネット内のゲームだと、勝ち負けにこだわり、顔も合わせないため過激な言葉が出ることもある。その恐ろしさをしっかりと理解

させた。

Dさんの両親は、Dさんの前に双子を亡くしていることもあり、Dさんへの期待が大きい。Dさん自身がその親の期待に対し、苦しんでいるところがある。子どもの表面的な事象だけではなく、その背後にあるしんどさに気付いて寄り添うことが大切だと分かった。

大阪 ありのままを認め合える取組として、「いいところカード」の他に何か取り組んでいることはあるか。また、「あいさつ運動」や「いじめゼロ」に向けた取組が形だけにならないよう、大切にしていることは何か。

徳島 自分はこの学校の職員であるが、過去に赴任した時、学校が荒れていた。「やさしくん」というキャラクターが生まれたとき、荒れた子どもたちの中に心のよりどころとなるものを作りたいという教職員の思いがあった。認められる部分が少ない子もいたが、それでも少しずつでも認めていく取組を続けた。小さな行動に気付いて「今の行動は、『やさしくん』じゃなあ」と声を掛けることで、少しの良さでもフィードバックする取組を続けてきた。自己肯定感とは、欠点も含めて自分を受け入れる力であると思っている。子どもたちの自己肯定感を高めるために取り組んできたが、この学校の卒業生がやがて親となり、「やさしくん」が家庭の会話にも登場するなど、少しの良さを認めていくということが地域の中にも息づいていると感じている。

—1日目のまとめ—

各報告及び質疑討論の要旨について振り返った後、次のようにまとめられた。

本日の報告は、どれも非常に身近な内容で、誰にでも関係のあることであつた。日常生活の中で、無意識に差別したり偏見をもったりしてしまうことがあるが、相手に対して悪いところを批判したり排除したりするのではなく、長所も短所も含めて全てを個として受け入れ、認め合うことが大切である。そうすることで、自尊感情や自信を育てることにつながる。「多様性の尊重」という点において、これらの報告には共通するところがあったと感じる。

—報告5—②—

「おれ、アホやから書けへん」
～言えなかったことをつづり、
伝え合う子どもたち～
(奈良県人教)

—主な質疑と意見—

三重 「思い出し直し」とは、どういうやり取りをしているのか、詳細を。

報告者 自分自身は生活つづり方に取り組んでまだ1～2年で、分かっていないこともあるが、学校としてはずっと取り組んできている。赴任した時、子どもに「思い出し直ししよか」と言ったらいろんな話をしてくれ、子どもとのやり取りの中で話が膨らんでいった。一つの日記を通していろいろな話をすることで、教師自身も子ども本人も見えていないことが見えてくる。毎日「一行日記」として、心に残っていることや自分の気持ちを書いてくる。また、金曜日には日記を書いてくる。それを「ネタ帳」のように保管して、その中から特にみんなで共有したいものを教師が意図的に深め、広げている。

和歌山 学校として一人ひとりを大切にするために、Aさんをどのように支えているのか。

奈良 この学校の職員である。特別支援教育に関して、特別支援学級への入級が適当かどうかの境界にいる子が増えて、各校いろいろな対応をしていると思う。本校では「担任だけに任せない。みんなでしんどい子を見ていこう」というふうにしている。Aさんは、昨年度自分が特別支援学級で担任をした。朝来ていないとまず電話をして、空いている人がお迎えに行くという体制だった。奈良 人担をしている。7年前、本校に赴任した時から、生活つづり方は学校の研究テーマだった。これからもずっと続けていこうとしている。つづり方を放送で読み聞かせることで、全校で共有する取組を行っている。聞いて終わりではなく、聞いた側もその子に思いを返していけるようにしている。また、転任してくる教職員に取組を伝えられるよう、研修も行っている。

奈良 Aさんの親に知らせるのが、つづり方を発表した後になった理由を教えてほしい。また、もし自分ならきつと言えない。受け止めてもらえない不安がある。先生がAさんを促して、Aさんが読んだ。結果的に良かったけれど、下手をすれば

「カミングアウト」ではなく「アウティング」に近い状況になる。先生の中に、学級が受け止めてくれるだろうという確信があったのか。なぜ、このタイミングだったのか。

報告者 自分も、振り返れば振り返るほど「これで良かったのか」と思う。普段だと、通信に載せる時などは家の人と先に話す。Aさんの場合、通信に載せることはできないし、どのタイミングでAさんのつづり方を出すのか、状況を見ながら保管していた。その中で、「今だ」と思うタイミングが来たので、家の人には話していなかったが、読むことになった。

結果が良かったからいいが、そうでなかったら…と今だから思う。「ずる休み」と言われていることをAも知っていて、泣きながら学校に来る。そんなAの姿を見て「今しかない」と思った。残り1週間で夏休みになるタイミングで、事情を知らない子たちが「Aはずる休み」と言ってヒートアップして、そのまま夏休みになるのだけはいけないと思った。「ずる休み」と言っている子の中には、明らかに教師に聞こえるように言っている子がいて、自分としては「先生、なんでほんとのこと隠してんの？」と思っているのかなと捉えた。周りの子の思いにも寄り添いたいと思った。全部は伝わらなくても、心に残ることがあるのではないかと、半ば強引に進めた。

協力者 同和教育に取り組んでいると、「今だ！」という、そういう「勝負すべき時」というのがあると思う。そういったことについて、同じような経験なども含め、総括討議の中でぜひ話してほしい。

—報告6-②⑥—

つながる・つなげる～私が学んだ「知ること」「聴くこと」「受け止めること」～

(滋賀県人教)

—主な質疑と意見—

神奈川 子どもを信じられなかった自分が変わろうと思えたきっかけは？また、「聴くこと」は心のゆとりも必要であると思うが、「もういいや！」と放ってしまわなかったところについて、周りの先生の支えや関わりも含めて教えてほしい。

報告者 教師になって5年目。1年目～3年目まで、クラスにいつも欠席する子が一人いた。「どの

子も私のクラスの子だから、みんなが学校にいてほしい」と思ったとき、私の行動によって学校に来ることができたりできなかったりするのであれば、子どもを変えるのではなく自分が変わっていかうと思った。

「聴くこと」については、いつもゆっくり聴くことはできないのだが、学校として、教室にいられないときは他の先生に見てもらったり、担任の私が話を聞かなくてはならない場合は他の先生に学級を任せたりして、空いている先生がどんどん関わってくれた。

奈良 音楽集会の時のような子どもの姿が見られるまで、先生はAさんのことを学級にどう伝えていったのか。Aさんのことをどう学級につなげていったのか。

報告者 つなげることは難しい。「どこまで言ったらいいのか」という判断に迷う。Aさんの場合は、1日中教室にいないということはなかったの、「Aさんは教室にいたいと思っている」「しんどいけど頑張っている」と、他の子は少し分かっている。Aさんに「しんどいけど頑張ってるってこと、クラスに伝えていい？」と聞いたり、「他のみんなも頑張っているね」と認めることを忘れないようにしたり、学級に関わってくれる他の先生も同じことを言うようにしたりと、担任だけではなくみんなで伝えるようにしてきた。

大阪 Aさんの保護者とはどう連携したのか。また、周りの子の変容に対して、Aさんはどう思っていたのか。

報告者 保護者には、学校の様子を伝えていた。Aさんが学校のことを家であまり話さないの、保護者の知らないことが多かったけれど、「家でこんなふうに声を掛けてほしい」などとお願いをすると、必ずしっかり協力してくれていた。

Aさんが、周りの子のことをどう思っているのかと言うことを言葉で表現したことはないの、分からないが、反応がちがうと感じた。3学期はすごく反応が良くなった。学習の場面では、自分のやり方にこだわってそれを通すなど、あまり反応は良くないのだが、休み時間などはみんなと仲良く遊ぶ様子が見られた。

協力者 子どもを変えようとするのではなく、自

分を変えることで子どもが変わっていったというような経験がある方もいると思う。伝え合っていけたらと思う。

報告者 今回、教師が子どもに A さんとの関わり方の手本を見せることで関わり方を教えた。でも、本当は子どもと子どもがつながって関わりを深めてほしい。子どもと子どもをつなぐ手立てを教えてほしい。

奈良 生活つづり方をしている。子どもと子どもをつなぐため、そして子どもの生活を知るために。毎日、帰りの会で読み合わせをしている。その中で、お互いの生活が分かっていく。子どもたちには、「いい文章は真似しなさい」「こんなテーマでも書けるんだよ」と、子どもの書いたものを示すことでそれをお手本にしていく。子どもたちはそれを通してつながっていく。子どもをつなぐ方法の一つが生活つづり方だと思っている。

報告者 自分も、生活つづり方について勉強してみたいと思った。

協力者 子ども同士が主体的につながる手立てとして、これまでの報告の中で「語り合うこと」「生活つづり方」が出てきた。お互いの実践をもっと出し合えればと思うが。

徳島 自己表現が苦手な子が多いクラスを担当した時、まず「自分を発信すること」に力を入れた。話すのが苦手な子が文章なら表現できると気付いたら、そこを取り上げてつないでいくようにした。2 年ぐらい掛かったけれど、地道につないでいったら成果が出た。

Ⅲ 総括討議

大阪（報告者） 報告の中にあつた「依拠する」ということについて、報告者として捕捉したい。表面上に見えているつながりだけではなく、自分の本当に分かってほしいことを分かってもらえる、安心できるつながりを作りたい。自分が語って、みんなが返してくれて、それを通して温かいつながりを作りたい。取組の中で、教師も揺れる。その子の悪いところばかり見えることもある。でも、学校を離れた地域の活動の中で、その子たちの良さが見える。だから、自分はやっぱり地域の活動には参加する。

部落差別がどんなふうの実態として表れてい

るか。離婚率が高い。一人親で、親は頑張って働くから、寂しい思いをしている子が多い。寂しいから誰かと一緒にいたくて、友人や先生に「試し行動」をする。この相手はどこまで分かってくれるのか、どこまで許してくれるのかと試してくる。家の人にもそういう行動をする。だから、親との出会い直しのためにも、「誰のために働いているのか」「子どものことをどう思っているのか」を、親から子へ伝えてもらう。また、家の人にも教師を試してくる。「先生は私のこと分かってくれるんか」一緒にやっていくという気持ちを、行動で見せ続けることが大切。家庭訪問や地域の活動に参加し、関係を築く。フィールドワークやタウンワークで、子どもは低学年のときから差別の現実と出合っていく。年上の子が差別を受けた話も聞く。その上で「この町はあったかいんや」ということを学ぶ学習をする。

学力はしんどい。言葉も乱暴。塾には行きたくても行けないし、保護者も勉強が分からないから教えられない。だから、OB の先生や地域の人にも協力してもらって、週に 1 回程度、勉強会もしている。おかしいことを「おかしい！」と言うにも学力が必要。言い方を知らないから、今は悔しい思いをしても「なんやねん！」しか言えない。**福岡** 若い頃勤務した学校では、部落が少数点にだったため、45 人 10 クラスの学年で、ムラの子は一人だった。学習している中でその子が「みんなに自分のことを語りたい。もう待てない」と言う。「みんなで学んでいるのに、何かみんな他人事と思っている気がする。自分のことを話して、みんなとつながりたい」ということだった。自分も若くて、子どもと一緒に揺れた。でも、この子と一緒に進みたいと思って、クラスに話をした。結果、その子一人を頑張らせて、きつい思いをさせてしまった。まずは一人二人とつながる仲間をつくってから全体へつなげるようにすればよかった。

子どもたちのことを信じられていなかった。児童養護施設に通う子を担任した。施設にきた背景はそれぞれ違う。それをつづり、学級に伝えていった。それに対して、みんなは自分のしんどさを語ることで返していった。「施設の子のこと、もっ

と早く知っていれば」と泣く子もいた。もっと子どもを信じて、もっと早くつないでおけばと後悔した。子どもを信じて、つながれるよう手立てを打つこと。子どものつながり合う力を信じること。それができるようになりたい。「先生が私のことを思ってくれている」という実感が、子どもや親にあるかどうか。そこを大切にしたい。

福岡 学校に来にくい子を別室指導する中で、本当に社会的自立を目指していけるのかと悩んでいる。児童養護施設で生活している学校に来にくい子を、別室をステップとして教室につなぐ中で、安心できる居場所をつくっている。課題は、そこがゴールではなく、その先に進学があること。高校をやめたら、施設も出ないといけない。一人で生きていかなければならなくなる。別室で丁寧に関わっているが、外に出たときに生きていく力を付けないと、しんどさから逃げてしまう。支えてくれる仲間や福祉に頼る力を付ける必要がある。「行きたくない」の向こう側には不安感がある。クラスの中に居場所があるかどうか＝本当の思いを語れる空間になっているかということが大切である。

大阪 理不尽を解決していく力を付けるために、学力をなんとか付けたいと思って取り組んでいる。生活つくり方は、お互いの心が響き合う取組。他者理解をさせる取組の中で、自分を理解させることができる。差別の問題は、当事者の問題ではなく周りの問題。それをどう伝えているか。学んだ後に、社会の中で「それ違う！」ということに出会った時、どうしていくのかということ。

大阪 子どもが、社会の中で不安を背負わされている。目に見える「不登校」の向こう側にどんなものを背負わされているのか、そこを見ないといけない。問題の本質はどこにあるのか。学力が低いということは、学力が奪われているということ。そこに隠されている問題を見ることが大切だ。

奈良 自分の息子はピンクが好きで、ピンクの浮き輪を欲しがったとき、「それでええんか」と言いそうになった自分がいた。就学時、ピンクのランドセルだと大丈夫だろうか、いじめられないか、などと家庭で話している。研修を受けてきたから、自分も変わってきた。だから自分も「伝えていく

こと」をしていかなければならないと思う。家庭でのことも、学級の子どもたちに話している。それをきっかけに子どもたちと話せる。日々のそういうやり取りで、子どもたちの意識を日常にある問題へと向けることができる。

滋賀 「道徳」と「人権教育」の違いについて、人権教育とは「社会問題として捉える」ということではないか。自分でつづり、語っていくことで背景にある課題に気付く。その克服のために、学校や社会をどうつくっていくのか。「周りが変わること」が必要。「不登校の A さん」の課題ではなく「A さんが来られない学校」の課題と捉えることだ。

福岡（報告者） 「セーラー服と学ランしかないってことがしんどい」と話してくれた子に「自分もそう思っている。変えていきたい」と言ったとき、「そう言っているんだ」と感じてくれた。私自身は、その子たちと一緒に変えていくことで、「自分たちにも変えられる」と伝えたかった。当事者の子どもたちは「弱い人、配慮してもらうべき人」ではなく「一緒に変えていく力を持っている人」だと思っている。一人への配慮ではなく「全体を変える」という意識で、「自分らしさ」を奪っていたかもしれない学校を変えることで「自分らしさ」を取り戻させることができたと思う。

奈良 私たちも、周りを変えていく力をもつことができるんだ。「自分が変わろう」と思って取り組んでも、すごくしんどくてやめたい時がある。でも、同じように頑張る人がいるから、自分も頑張ろうと思う。15年前、帽子的形が男女で決まっていた時、「嫌や!」と言った子がいた。不必要に性別で縛る必要はないと、話をして変えていった。「変えていったらええやん」と思えたのは、同和教育の積み重ねがあったからだ。つづり方にしても語り合いにしても、学校としての積み重ねを1年生からしているのは強み。自分を開き、人とつながる取組を学校としてしていることが大きい。自分もつながっていききたい。

奈良 子どもが自分の気持ちを伝えにくい、できないとき、それでもその子は聞いてほしいし受け止めてほしい。子どもが何か言ってきたとき、一言返すだけでも「受け止めてもらった」と思う。

一つ一つのそういう積み重ねがつながりとなる。話を聞くというのは「思いを受け止める」こと。心を向けて聴くということ。子どもの一言が子どもを動かすこともある。「ズル休みや」と言う子の本心に「来てほしい」という思いがあるのではない。また、目立つ子だけではなく、ひっそりと思いを抱えている子にも気付くことが大切。教師同士もつながって、仲間として集団づくりをするべきだ。

奈良（報告者） 赴任してすぐ、1年生に関わった。生活つづり方について自分も分からなかったが、子どもたちも何も知らない。それでも、友達のつづりを聞いて「自分もそういうことあるわ」と言ってつながっていく様子が見られた。「自分も同じことあるわ」と、自分の生活につないでいく、自分と同じだと思える場をつくることができるのが、生活つづり方の魅力の一つだと思っている。

奈良 子どもを変えるのは子ども。支えてくれるのも子ども。子どもを信じることは大切だ。サッカーできつい言葉を言ってトラブルになる子がいた。周りの子の気持ちを聞いてみても、「みんな楽しくやりたい」という思いはみんな同じだと分かった。しんどいところがある子にとって、周りがどう思っているのかと言うことに気付かせることも必要。この子を変えるには、「周りは分かってくれているよ」「支えてくれているよ」ということを伝えることが大切。子どもを信じて、子どもたちに助けてもらおう。ただ、周りの子が疲れてしまわないよう、パワーを切らさないように教師が支えていくことも必要だ。

福岡 道徳は、実践意欲を育むことが目標。授業が終わって「いじめはおかしい。自分はこうしたいと思います。」と言えたら評価される。でも、人権教育は「実践行動」が目的。だから、「こうしたいと思います」ではなく、実際にそれができかどうか問われる。それができなければ、差別の温存や助長につながるからだ。実践意欲だけで止まっていたら、差別はなくなる。

昨年、ある通信制高校の入学願書を見て、生徒の一人が声を上げた。その願書には、血液型、自宅周辺の地図、家族構成や家族の勤務先、賞罰関

係を記入させる欄があった。子どもが気付き、おかしいと言えたこと、それが、日頃人権・同和教育を何のために学んでいるのかということの答えだと感じた。全ての人が生きやすい社会をつくるために人権・同和教育をしているが、子どもがそれを通して「世の中は自分たちの力で変えられるんだ」という展望をもつことが本当の学びだ。今の社会を見ていて「無理だ、変えられない」となりがちだが、そうではない、変えられるということを伝えたい。学校は、行動すれば変えられるんだという展望を見せることのできる場にならなければならない。子どもたちの選択肢の中に「自分の力では変えられないけど、教師につなぐ」こともあると伝えたい。伝えられた教師もまた、自分にできる行動を選択していく。入学願書の件では、一人の学びに基づく気付き、そして教師に伝えたことが実際に願書の修正へとつながった。この展望は、歴史の中で闘ってきた人たちの姿によっても常に証明されてきたことだ。

奈良 不登校の子に対して「弱い」「強くない」という声を聞くことがある。「その子の問題」ではなく「なぜ来たくないのか」と捉えていかなければならない。養護教諭として、しんどい子たちと接していて、いろいろ思うことがあってもどこかで「自分は養護教諭だから」と一線を引いたり担任に遠慮したりしているところがある。養護教諭でも発信できる。そこから変えていけることもあると学んだ。どんな子でも、一人ひとりの声を拾っていると、「よく頑張っているな」と思う。それを拾いながら、学校を変えていきたい。子どもに思いを言わせるのなら、教師もまた思いを発信することを大切にしたい。

—報告者より—

どの報告者からも、報告を通して自分の実践を振り返り、改めて学ぶことができたという感想が述べられた。その中で、次のような点について語られた。

- ・ 一緒に考えてくれる人がいる、分かろうとしてくれる人がいることが安心感につながる。
- ・ 「自分が変わればいいんだ」という言葉に共感した。「自分は変えられる、自分たちで変えられる」そういう展望をもてる社会を作っていく。
- ・ 教師と子どもの関わりだけではなく、子ども

同士が伝え合い、変えていく、そういうつながりを作ることが大切である。

- ・ 報告して、言ってよかったと思えたし、質問されたことで「知ろうとしてもらえている」ことのうれしさも感じた。語り合いを通して日々子どもたちが感じていることを、自分も実感することができたので、今後も取組を続けたい。
- ・ お互いの実践を報告し合い、自分が気付いていない視点を探しながら関わっていくことの大切さを再確認した。

—2日間のまとめ—

福岡県からは、変わらなければならないのは当事者ではなく学校であり、社会であること、変えていくのは私たち一人ひとりであると確認する報告があった。「気付かないうちに自分が誰かを傷付けていたかもしれない」と真摯に向き合う報告者の姿から、「この人なら受け止めてくれる」「話してみようかな」と思える関係を築くことの大切さについて、多くの方の思いを分かち合った。

京都府からは、様々な背景の中で学校に集まってくる一人ひとりを守り、周りの環境を整え、その子らしさを大切にしながら学ぶ権利を保障するための実践が報告された。個別の課題を「その子の課題」と捉え、学校の枠にはめようとしていたという反省から、その子の将来を見据え、学校間の連携を含め社会全体が受け皿となれる仕組みづくりの必要性を確認した。

大阪府からは「自分だけ」と思っているしんどいことを伝え合うことでつながり合っていく実践が報告された。「一番知ってほしいことが、一番言いにくいこと」それでも、言わないと分からない。その人の本当の思いを知ること、決め付けや差別を生まず「何かあっても分かってくれている人がいる」と前向きになれる。一人ひとりが差別を許さず、差別に打ち勝つ土台となるような信頼関係づくりについて学びを深めた。

徳島県からは、自分の苦手なこと、悪いところも含めて自分を認め、自信をもって主体的に行動できる力を付けたいという思いで、児童会活動を手立ての一つとした実践が報告された。人権学習とは、自分の心をさらけ出して自らを語り合うものであり、「自分事」とは、自分の中のしんどさに

置き換えて考え、自分の痛みと重ねて相手の痛みを分かろうとしていくことである。一つ一つの活動が形だけのものにならず、子どもたち一人ひとりのありのままを認め合い、良さを伸ばすことにつながるよう、ビジョンをしっかりともって取り組んでいくことの必要性を確かめ合った。

奈良県からは、「担任だけで子どもを育てていくのではない」という学校全体の姿勢に支えられ、生活つくり方の実践を通して、本当の思いを伝え、友達の本当の思いを知ること、そして「伝えて終わり、聞いて終わり」ではなく、お互いの思いを返していくことでつながりが生まれる様子が報告された。生活の中のしんどい部分をつづって伝えるということについて、保護者に伝えるタイミングや学級の子どもが受け止められるかという見極めなど、「思いをみんなに伝えるべきとき」「勝負すべきとき」の判断をしっかりとっていくことの必要性も確認した。

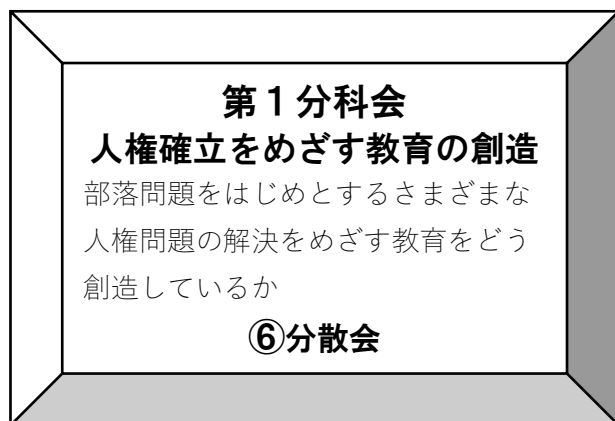
滋賀県からは、「その子を変えようとするのではなく、自分が変わろう」と決め、来にくい子を諦めずに学級とつなげる実践の中で、保護者とのつながりや他の教職員との協力による地道な取り組みが、しんどさを抱えさせられた子や周りの子を変容させていく様子が報告された。本当は子ども同士がつながり合って関わってほしいという報告者の願いがあり、子どもと子どもをつないでいく手立てとして、生活つくり方や語り合うこと、子どもの表現しやすい方法を生かして思いをつないでいくことについての実践が交流された。

総括討論では、主に次の点について、お互いの思いや実践を出し合った。

- ・ 相手の本当の思いを知ること、自分の本当の思いを伝えることの大切さ。その中で、子ども同士のつながり合う力を信じることの大切さ。
- ・ 子どもが背負わされているもの、子どもの背景を見ようとする。それに気付いたとき、差別解消に向け、変わらなければならないのは、当事者ではなく周りの人や環境である。その中に、自分自身も入っているのだということ。そして、自分たちがそれらを変えていけるんだという展望をもつことができる人権・同和教育を進めていくということ。

- ・ 一人ひとりの子どもを諦めないで、根気強く丁寧に関わっていくこと。教職員集団が、仲間としてそれを支えていくことの重要性。
- ・ それぞれの取組をするとき、何を一番大切にしているのか。「差別解消」というビジョンからブレないことだ。ありのままの自分を見つめ、語っていく「人権・同和教育」を、これから大切にしていこう。

2日間で新しく知ったことも、「自分のしてきたことはこれでよかったんだ」と思えたこともあった。自分たちは、差別をなくすためにここにいる。向き合っている子どもや人権課題は異なっても、それぞれの場所で、同じゴールに向かって試行錯誤している仲間がいることが、我々の力になる。自分は「何もできないで手をこまねいている人」になりたくないから、同和教育を頑張っている。自分のために頑張っている。いつまでも、変わるべきはまず、自分自身である。明日からまた、全国の地で、お互いに頑張っていこう。



I はじめに

分科会基調では、同和教育を基軸とした人権教育の創造に学校・園・所全体で取り組んできました。部落問題学習は、部落差別の解消に向けて、自らはどう生きるかを問い、差別を許さない社会の創造に向けて生き方を培っていく学習です。差別のない社会を創造するためには、一部の地域や学校のみで取り組むのではなく、すべての学校において部落問題学習に取り組んでいく必要があります。今日、部落差別は表面的には見えづらくなりましたが、インターネット上にあふれています。部落問題学習を通して、あらゆる立場の子どもにとって「反差別の生き方が人として誇りうる生き方である」ととらえられるように様々な学びを工夫し、取り組んでいくことが大切です。そし

て、知ることだけでなく、差別を見抜く力とその痛みを敏感に感じ取る感性、共感できる力、ともに行動できる力を身につけられる学習につなげていきたいと思います。最後に、討議の柱が確認され、報告・討議に入った。

II 報告及び質疑討論の概要

一報告1ー②⑧

「差別を完全に無くすことは無理だと思った」
～差別をなくす主体者となるために、
子どもたちとともに～
(鹿児島県同教)

一主な質疑と意見一

奈良 その他の子どもの意見を教えてほしい。知りたくなかったという意見はなかったのか。また、渋染一揆を取り上げた理由を教えてほしい。

報告者 「知らなかったらよかった」という感想はなかった。それよりも心を揺さぶられたのではないと思う。また、差別を言えない人がいるという現実を知ることでもできた。

差別をなくすには、おかしいことをおかしいと言える、正せることが大切。そのために元気がでなければいけない。その中で、渋染一揆を選んだ。その資料から差別をなくすことは決して無理なことではないことに気付かせたかった。

愛媛 部落差別の問題は現在の問題であると思う。そこからスタートしなければいけないのではないか。歴史学習からスタートすると過去の問題になってしまうのではないか。

宮内さんとの関わりの中で学習を展開することは非常に良いと思う。宮内さんの住んでいる地域での現状や学校の校区には地区があるのか知りたい。

報告者 カメラに映っていない場所にもう一人いる。その人はカメラにも映れない、音声も出せない。その人の代わりに自分が話をしなければいけない現状に歯がゆさを感じ、涙を流していた事実があった。

テレビに出たことで誹謗中傷もあった。しかし、励ましや賛同の意見ももらい自分には仲間がいることがわかった。と言われていた。

島根 中学2年生での部落問題学習はどのように取り組まれているのか。

島根県では集中的に部落問題学習をやっている。

たのだが、歴史学習の中で系統的に取り組んでいけば大丈夫だとなった。会場の人に他府県では、集中的に学習がおこなわれているのか、そしてそれがいつの時期なのか教えてほしい。

校区に部落があるのか、学校の中にはいるのか、その子たちがどんな感想をもったのかも知りたい。

報告者 1年生で入学してきた子が一人いる。部落問題学習はできていない。集中的にやるよりは、少しずつやっていくほうがいいと思う。集中的にやっているところが多い。

香川 いかに自分ごとにするかが大切だと思う。「すごいと感じた」とは自分事としてとらえられていないのではないかな。

差別の構造をとらえることが大切。差別する人がいるから差別がある。差別する人とされる人の問題に感じられる。その周りの人が含まれていない。そこに無知、無関心があると思う。自分事にするには自分の中にある差別心に気付くことが大切あり、誰にでも差別心はある。だからみんなで考えなければいけないと思う。

一報告2-⑳

みんなに聞いてみたいねん。 (奈良県人教)

一主な質疑と意見一

福岡 先生自身やクラスがAに対しての気持ちの変化はどのようなものなのか。また、Aに対する取り組みは何かあったのか。

報告者 価値観の共有が大切だと考えた。周りから見たら理解しがたい行動があったが、それを理解しようとした。

いろんな仕事をAに任せ、周りの役に立っていることを続けていった。

奈良 子どもたちを変えるためには大人が子どもとつながることが大切だと思う。その後、子ども同士がつながることが必要になる。周りの子たちの心情の変化を教えてほしい。

報告者 「3年生の時は、Aは怖かったよな」と言っていた。でも今は、「やさしいし、おもしろいよな」と周りの子は言っていた。Aのいいところを周りの子が見つけられるようになっている。

A自身のよいところを周りにわかるように知らせた。授業では、価値観の違う人の思いを理解す

る学習を繰り返しおこなった。

協力者 Aさんが変わったととらえているのか、自分たちがAさんのとらえ方が変わったととらえているのかどちらでしょうか。

報告者 Aさんに対して、Aさんが変わったから自分たちが変わったと思っているのではないかなと思う。

香川 つながりが弱いと書いてあるが、どうしてだと思いますか。

報告者 コロナで人とつながることが難しかったことが関係あるのかなと思う。もう一つは、規律を守ったり、先生の言うことを守ったりする子が多い。逆に言えば、何も言わなければ何もしない。休み時間も何をしていたかわからず座っている子が多い。

長崎 Aさんの家庭(保護者)に何かされたことがあれば教えてほしい。

報告者 がんばっていることやいいことを伝えるようにした。これまで保護者は大変だったと言われていたので、学校のことは学校で任せてほしいと伝えた。Aが変わってきたので保護者の受け取り方も変わったと思う。

一報告3-㉑

「先生に相談したから終わりではない」
(愛媛県人教)

一主な質疑と意見一

愛媛 校区に被差別部落がないからと言って自分のクラスに社会的立場を認識している子がいなくて授業をしている場合が多々あると思う。これは部落問題だけではなく、性的マイノリティーの話をする時やいろいろな差別事象の話をする時にも、そのグループの中にいるはずなのに、いないことになっていないかなと思う。

奈良 自分の生い立ちを語っていく中で運動団体で差別事象がなかったか確認をする場があった。むらの子たちの思いを救い上げていくことが大切だと思う。それだけ厳しいものだともう一度教職員自覚し、少しでも部落問題学習が進んでいく取組が増えていってくれることを望んでいる。

協力者 今後つなげていきたいということが書いてあったのだが、この後の学校の様子はどうなっているのか教えてほしい。

愛媛 報告者と同じ学校で違う学年を担当している。今回の件で、教職員が人権感覚を高めることができていなかったことに気付かされた。いろいろな場所に足を運んで話をきいたり、自分たちが語り合う場を設けたりした。若い教職員だけの問題ではないと思っている。

また、授業が大事であり、授業の中で教員が語ることも大切だが、それ以上に生徒が語り合うことが大切だと感じた。子ども同士が語り、子どもの意見を引き出す授業を研究していった。また、今後の実践にもつなげていきたいと思う。

奈良 あらためて教師側の人権対する意識が大切だと感じた。普段の授業の中で危機感を感じながら関わっていかなければいけないと思った。

今の自分のクラスでも人間関係が希薄で、どれだけ響いているのか実感することができていない。子どもたちから引き出していく授業や関わりができるようにしていきたいと思う。子どもが子どもに伝えることができるようにしていきたい。

報告者 普段の授業が一番大事だと思っている。ちゃんと発言する。他人の話をちゃんと聞く。安心して発言できる雰囲気大切。それがないと言えない。集団づくりが大切で、その素地がないといけない。それをつくっていこうと学校あげてやっていかないといけないと思っている。

島根 部落問題学習は時間数としてはなかなかできないのが現実。部落問題をばらまいてしまうことになりかねない。

差別に打ち勝った資料は授業で使いやすい。しかし、差別に負けた資料では、クラスや人間関係によっても授業がかわってくるので難しいと面もある。自分も差別に負けた資料を活用したが、その授業をする前には、差別に負けた資料を使うのはどうなのか議論になった。

三重 その後の話や関わりを聞かせてほしい。

報告者 自分もまさか来るとは思っていなかった。自分も泣いてしまった。「わかった、わかった」としか言えなかった。

－報告4－⑪

Aさん親子と出会って (新潟県同教)

－主な質疑と意見－

奈良 自分自身がどのような同和教育を受けて

こられたかということ、そしてどのような部分に怖さを感じられているのかということ。

さらに、Aさんに関わることでAさん自身、そして先生自身が変わってきたことは発表に中でわかってきたが、それ以外のクラスの生徒の変化はどうだったの教えてほしい。

報告者 教師になる前に同和教育を受けた覚えはあまりない。教師になってからも冊子等で見たことがあるが、他の人の問題だなとしか思っていなかった。

自分がまちがったことを教えたらどうしようと思ったから。しかし、凝り固まっている自分がどうなんだろうと思ったので、それを正したかった。

自分のことしか考えていなかった。学級をがんばらなければいけない場所だと思っていた。そうではなくみんながみんならしく、できてもできなくてもいい場所にしなければいけなかったし、これからそうしていきたいと伝えた。子どもたちの思いはその後聞けていないが、子どもたちの様子を見ていて、笑顔でうなずいてくれていたことにうれしく思った。

三重 Aさんはどんな心境の変化があって再び学校にいけるようになったのか。中学校とどのような連携をとっているのか知りたい。

報告者 フリースクールで知り合った子と仲良くなったことと、ネットで知り合った子と仲良くなり、その子が励まし続けてくれたこと、その経験が自分もそんな風に人を励ましてあげる存在になりたいと思ったと言っていた。それも力になっているのだと思う。

中学校にも自分の知っている先生がいたので、Aさんにはその先生の名前を伝えた。学校から様子を聞いたことはなく、Aさんや母親から直接聞いている。

奈良 Aさんと母親の関係が悪くなったが、その後また一緒に暮らすことになったということは、一つ壁は少なくなったのかなと思うが、Aさんにとっての部落差別に対する思いをどのような取り組みで変えていこうと思っているのか教えてほしい。

報告者 家では部落のことを話したことはない。

2人で話したことはないということなので、2人が話し合える場が必要だと思っている。

香川 同和学習をするのは怖いと思ったということに共感できた。知ることにより、間違っただけを教えたらいかがかと自分も思った。

「ゲストティーチャー」と言い方が気になった。ゲストだとお客さんのように感じる。そうではなく一緒に学習する人、仲間と考えたい。Cさんをどのように呼び出したのかが知りたい。

報告者 部落問題は過去の問題ではなく、今の問題だと伝えるためにCさんと呼んだ。

共に学ぶ会というものがあり、Cさんはその一員だった。共に学ぶ姿勢が大切だと改めて感じた。

—報告5—⑩

ユウとのつながり ～「This is me」を大切にしてきた3年を振り返る～ （大阪市人教）

—主な質疑と意見—

奈良 サークル活動についてもう少し教えてほしい。教師集団の意識が高くないとできないと思う。移動されてきた教師や新任に対して意識を高めるために、どのような取り組みがされているのか知りたい。

報告者 サークル活動は、4月に紹介し、研修をおこなっている。サークル活動については、すべての教員がどこかのサークルに入っている。水曜日の6校時に課内の時間におこなっている。クラブ活動などもなく、サークル活動に参加しやすくしている。強制ではなく、参加していない生徒はそうじなどをして待っている。

教員の入れ替わっていく中でサークル活動が薄まっているように感じる。また、サークル活動の活動内容も深まって行かないのが課題である。
（ ） 生活指導支援員とはどのような立場の人で、子どもたちはどうとらえているのか。関わっているのか教えてほしい。

報告者 週に2日勤務している。元教員で経験豊富な人で、職員室で話をしていたら一緒になって話をしてくれたり、家庭訪問に行ってくれたり。他の学校にも行っている。

子どもたちも先生とは違う立場ということで話をしやすい立場になっている。

奈良 3年生になってからクラスメイトから連

絡をしあっていたが、担任としてどのような支援をされたのか。

吹奏楽部の引退後に何をがんばればいいのかと問われた後、どのような返答をされたのか。また、欠席数は増えたのでしょうか。

報告者 ユウは保育園からの関わりの子がいるので、その子たちがユウと連絡を細目にとっていた。担任がその子たちにユウの様子やことを聞いていた。家庭訪問は繰り返していたが、授業などではそんな話はしていない。その子たちにユウがどうすれば学校に来られるようになるだろうと相談することもあった。

吹奏楽部が終わった後に聞いた時は、ユウが保育に興味をもっていたことを知っていたし、その時丁度家庭科の授業で製作していた幼児のおもちゃ作りに興味を持っていたので、その話をしたり、将来について話をしたりした。特別に居場所を作るようなことはしなかった。

欠席日数は、朝から1日来ることはなかったが、昼から登校したり、別室に来たり、教室に入ったりすることもあった。増えも、減りもしていない。

—総括討論—

愛媛 「お母さんって部落でしょ。」という言葉はあきらかに差別発言だろう。周囲にある部落差別意識がすりこまれている。母親に対して子どもから差別発言があったことは厳しい差別の現実だと受け止めなければいけない。

どうやって子どもたちに力をつけていけばいいかと考えた時に、今はできていないが、かつては部落解放全国高校生集会に参加させた時に子どもたちが変わった。ほとんどの子どもが自分のことを語りたくなり、語り合っている、そしてそれにつながっていき力をつけていったと思う。

子どもたちが本音を語り合う仲間、つながり仲間を増やしていくことが力をつけていくのだろうと思う。

奈良 現任校には対象地域はなく、前任校にはあった。その時には様々な取り組みをしていた。先生は子どもたちの気持ちを考えてくれているのかと厳しいことも言われた。

現任校はそんなこともなく、教科の中で部落問

題学習おこなっているだけである。

学校内では差があると思う。県内でも熱量の差があるし、世代間でもあると思う。どうすればいいにかすごく難しい。子どもとどう関わるのか、家庭訪問の仕方など初歩的なことを言わなければいけないことがある。沢山の報告を聞いて、元気をもらい、自分もがんばらなければいけないと思われた。

鹿児島 自分の学校では、差別抜き、部落抜き、学力重視で進んでいる。しかし、教職員の中でも少しずつ学習をしていく中でみんなの意識が変わってきている。「差別を無くすのは無理」タイトルのこだわりをもう一度聞いてみたい。

報告者（鹿児島） 最初のタイトルは全然違うものだった。「無理じゃない」という声が自分自身の思いや考えを引っ込めてしまっているところがある。どうせという気持ちがある。それを見過ごしてしまうことが良くないと思う。微力ながらやっていかなければいけないと思い、自分自身への突き付けとしてタイトルをつけた。

報告者（愛媛） 差別をなくす、もう一つはこの授業をやったら知らん子に知らせてしまう恐れがあることは意識しておかなければいけないと思う。しかし、その先があり、厳しい差別があるかもしれないけれど、それを跳ね返してきた人間の生き様や生き方があるんだという歴史がある。報告の中にも、それが沢山あった。学習した時に、展望がないといけない。そんな差別はおかしいと立ち上がる子どもの姿があった。それが展望だと思う。展望は教師でもつくれると思っている。

奈良 現場はすごく忙しい。自分たちは先輩教師から教えてもらってきた。しかし、今自分は若い先生にそれをする事ができていない。しんどい中でがんばっている子どもたちや先生の姿を聞いて、自分もがんばりたいと思った。

奈良 当事者意識をもっている子ともっていない子の差をどうやってうめていけばいいか考えている。部落問題学習の目標として、自分で立ち上がる子どもを育てるということを教えてもらった。これからの自分の取組に活かしていきたいと思う。

奈良 教師間での思いの差が大きい。この場で

「同和教育ってこわいねん」「いろいろなことがこわい」と言える。「言ったらあかん」と思っていることもあったと思うがそれが言えるようになったというのは前進したと考えてもいいのではないかなと思う。

協力者 前前任校では、熱心に取り組みをしていたが、前任校ではあまりできていなかった。学校全体にはなかなか言えなかったのも、自分の学年からやっていった。近くの肉屋の見学から始めた。それを学校全体へ広げることはできなかったし、深めることができたとは言えないが、一歩としては意味があったのではないかなと思う。

鹿児島 昔おこなっていた部落問題学習はなくなっていた。しかし、今年からもう一度やらなければいけないと思い、やり始めた。担任の先生は、授業は加配の先生がやってくれると思っていた。その時は、担任が自分でやるべきだということを伝え、やってもらった。しかし、次の年も同じようなことを別の教師に言われた。その時に、その先生は、自分でやらなければいけないと言ってくれた。自分で取り組んだ手ごたえがその先生を変化させたのだと思う。

愛媛 本物との出会いが大切だと思う。差別の現実には被差別の中にある。教師が自分の中にある差別心に触れることで子どもたちが変わり、本物に触れることができると思う。

歴史教育から一生懸命しているが、それをすればするほど子どもたちは冷めていく。

授業は楽しくないといけないと思う。現場では差別されたことを知らないのも、それを語れないのだと思う。わからないとも言えない。それが一つの課題だと思う。それが言える、語り合える教師集団にしていかなければいけないと思った。

大阪 差別を教えることで、子どもたちが間違った使い方をしないか心配だった。人権は普遍的なものであり、誰にもあるものだと思う。しっかり人権の大切さを子どもたちに教えなければいけない。それを教師は学習していかなければいけない。そして心もどう耕すかが大切。そのためには、家庭訪問しかないと思う。家庭訪問に行き、子どもと話をし、子どもがもつ課題を知ることが大事だと思う。それをもってクラスで語ることが必

要だと思う。

人権教育を進めていくためには、人権が担保されていないといけないと思う。

福岡 微力だけど、無力ではないと思った。一人の大人として関わっていきたいと思う。

滋賀 ある子が「ここに住んでいること、全然嫌じゃないし」と言ってことを思いだした。

おじいちゃんやおとうさんやおかあさん、地域の人が差別と闘ってきてくれていたから今自分は差別を感じずにくらせている。

継承についても課題に思っている。以前に初任の子と同じ学年になった時に、部落問題学習を教える時に、部落問題を知らなかったと言われた。その時に、「それをそのままにせんといてな」「知らないままで終わらせないでね」と言ってしまった。しかし、その先生は、一緒にがんばりますと言ってくれた。家庭訪問に一緒に行ったり、地域の学習会に参加したりしてくれた。教えるのではなく、一緒にすることで成長できたことがうれしく思った。そんな風に広がっていったらいいなと思う。

—総括—

人権確立をめざす教育内容の創造という観点において、「人権尊重の精神に立つ学校づくり」「安心して過ごせる学校・教室～環境づくり」「一人一人が大事にされる授業、互いの良さや可能性を発揮できる取組～人間関係づくり」を体現できる報告を受けました。

これまで同和教育は、仲間づくりに始まり、仲間づくりに終わる取組の積み重ねだと言われてきました。今まさに、現実にある課題としての部落差別の問題を学習材として構成し、自分事として考え、意見や意思を交わし合うことによって、集団の質的变化や形成過程が一つの例として体感されたことでしょう。さらに、子どもたちや大人も、被差別の当事者と出会うことによって、被差別の事例から受け取るメッセージによって、強い実感として心揺さぶられ思考を深めていくことが「自分事」として人権課題が腑に落ちていく過程に必要な体験となることをあらためて想起することができました。多様な人権問題を「自分事」とすることのできる人権感覚とはどのような

なものか、鋭い人権感覚を身につけるためにはどのように行動しなければならないかということを考え実践化していきたいものです。

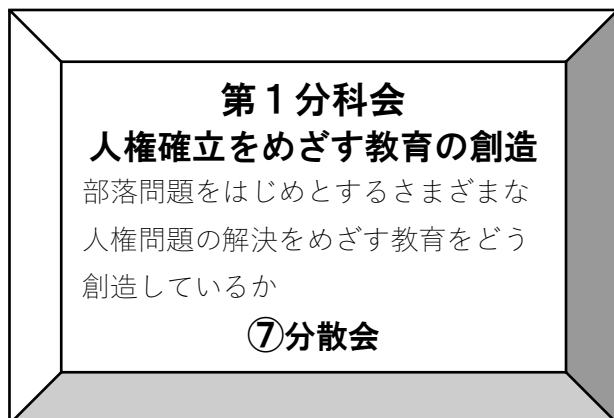
また、私たちは、日々、学校教育の現場で、地域とのかかわりの中で、児童・生徒・保護者とのかかわりの中で、人権課題について出会い、実践を続けています。あらゆる場に被差別の当事者が存在し、私たちの実践の対象となっていることを意識して取り組むことの大切さを再認識していきたいと考えます。そして、人権学習の大小、新旧、勝ち負けという尺度で判断するのではなく、子どもたちへの思いを深くして取り組んでいる毎日であることこそ肝要だと教えていただきました。

子どもたちに救ってもらったという人権学習、徹底的に関わりともに成長する関係性、学校体制をも動かす教育保障の在り方、共鳴・共感・仲間づくり、居場所、多くのキーワードが思い浮かぶことでしょう。それらすべてを私たちすべての人の日々の行動に反映させていきたいものです。

私たちは、もう一度しっかり、社会関係資本（人間関係づくり）の構築、文化資本（人権文化の醸成）の充実、そして経済資本による環境整備（学校環境の整備充実）、バランスをもって保障することを念頭に教育活動を編み直し、教育的なコミュニティを活性化させなければならないことを実感しました。

この多様かつ不確実な時代において、人権教育を基盤とした学校教育の構築は急がなければなりません。部落差別をはじめとする多様複雑な人権課題はどれ一つとして解消されていません。実践報告の指摘にもありましたように「差別を見抜き、差別をなくす主体者」の成長を支援する構造が教育現場に構築され機能することを求めていると強く感じた二日間でした。

是非、教え込むのではなく、共に学び合うことを進めてください。とまとめられ、分科会は終了した。



I はじめに

分科会基調は、討議課題をもとに提案された。

II 報告及び質疑討論の概要

報告1—⑳ なかま ～思い合い、聞き合い、分かち合い～（奈良県人教）

—主な質疑と意見—

奈良 様々な教材がある中で、「はせがわくんきらいや」の教材を選んだ理由。少人数で育ってきた子どもたちの関係性を探るために、壁を壊すために、つぶやきを大事にしてきたと思うが、どんなことに気を付けてとりくんできたのか。

報告者 「はせがわくんきらいや」を選んだ理由は、前任校では、特に決まった人権教育の計画はなかった。自分が人権の係となり、1年生から6年生までの部落問題学習と特別支援教育を柱として、計画を立てた。「はせがわくんきらいや」は、以前から知っていた教材であり、子どもたちのはせがわくんに対しての見え方がはっきりしやすいので、自分事として、とらえることができると考え、教材としてとりいれた。自分自身の経験から、固定化された人間関係があり、できるかぎり、全員のつぶやきを拾うようにして、様々な意見を取りあげ、いろいろな感情をみんなで考えることで、広がりがある。

熊本 ばかにした笑いがあったときにすぐに指導しなかったのか。教師間での共通理解を行っているとのことだが、どんなことを話しているのか。

報告者 笑いが起きたときに、指導しなかった。共通理解は教材研究の話をしたり、授業での子どもたちの様子を語り、振り返りを行った。

三重 指導はなかったということだったが、読んでいて切なくなった。指導しなかった学校の思いを教えてください。

報告者 自分では、気付かないことであった。自

分の学校の子どもにそんなことがあるはずがないと思ひ込んでいた。指導するべきであった。それがすべきことであるし、大切なことであった。今後、気を付けていきたい。次に生かしていきたい。

奈良 言われた中学生の気持ちを考えるべきであった。おかしなことに気付ける集団であったのか。普段から気付ける子どもたちを育てたいと思った。

熊本 3点あります。1点目。クラスで発言の少ない子どもの意見には、どんな意見があったのか。2点目。現状のみつめおしのときに、子どもたちとの距離感を感じていたのはどんなことからか。3点目。1年間子どもたちと過ごして、その感覚に変化があったのか。

報告者 1点目。はせがわくんきらいやの物語の中で、ほかの子どもたちが否定的にみていることを肯定的に捉えていることがあった。感性が豊かでよく気付くことができていた。2点目。4年生の担任との関係性がよく、5年生になってもその関係性が続いていた。自分はまだ、そこまでの関係性を築けていなかったのだから、子どもたちの間に距離感があると感じてしまっていた。3点目。話すことが増え、振り返りには、子どもたちからうれしいことばをもらえて、つながることができていると感じた。

奈良 単学級での集団作りの悩みに共感でき、元気をもらえた。固定化された集団関係をどうにかしたいのですが、保護者の関係が邪魔をしてしまい、なかなか迫ることができない。そのようなことがあれば、経験を教えてもらいたい。

報告者 気になる子どもの言葉を拾いたい。そんな中に、子ども同士の温かい関係性ができてきた。子ども同士のつながり、保護者同士のつながりも少しずつできてきたが、今はけんかをしてしまっている。それも今後のとりくみの課題である。

報告2—㉔ 自分事として捉える（徳島県人教）
—主な質疑と意見—

三重 Aさんのような子やBのような子はいっているのではないか。質問。ひとりひとりどうしていいかわからないことが自分にもある問い返しをしているのか。

報告者 まだしていない。しかし、みんなにきいてもらいたい悩みをもっている子どもはいると思うので、今後、聞いてみたい。

三重 みんながAさんのことを聞いて、Bさんのために何か力になりたいと行動を起こしたのか。

報告者 Bと連絡できない。こちらからは何もできない状況。

三重 Bさんがどんな気持ちで言ったのかが気になる。自分の気持ちを簡単には言えない。そんな中で勇気を出して言ったことに対して、何か行動できることがなかったのか。どうにかして、Bさんに何か返せるようなことをしてほしかった。

報告者 できるかぎり、考える。

熊本 1点目。1年生の実態に対して、アンケート以外で、何か感じたことはあるか。なぜそうなっているのか。2点目。とりくみ後の変容は。

報告者 4月はまだ関係性ができていない。積極的にかかわろうとする子どもは少なかった。とりくみ後は、いい雰囲気になってきている。このとりくみ以外にも他のいじめの授業等でも、9月のアンケートでは変化が見られる。今はよい方向に向かっている。

大阪 いざというときに差別性は見られる。自分事にするとは、どういうことか。いじめや差別をなくしていこうとする側に立つことが、まず自分事にする第一歩だと感じる。一緒に差別をなくしていこうとする子どもの姿が見えた時はどんなときか。

報告者 自分事とするということは、差別をなくしていく取り組みをしていくことであるというのは、自分になかった視点であった。授業から、さらに一歩進んでとりくみを進めていきたい。

熊本 1点目。気になったこと。AさんとBさんとのやりとりを教材にする必要があったのか。なぜ、置き換えて教材にしようと考えなかったのか。2点目。みんながどうしていいかわからないという中で、それでもゴールへと導かないといけない。教師として、どのように導くべきであったか。

報告者 1点目。少し改編して扱うことはできた。しかし、自分事として捉えるためにはこの教材が必要だと感じた。2点目。生徒はかなり考え、自分なりの考えをもち、交流することができた。

様々な考えを尊重し、思いに寄り添うことで助けとなることもできる、というのが教師の考えである。

報告3-③ わたしかわりたいねん

～部落問題学習を通して子どもの生き方を拓く～ (大阪府人教)

—主な質疑と意見—

大阪 授業と日々の生活がつながっているのが素晴らしい。1点目。「わたしかわりたいねん」はどういうきっかけで話したのか。相談した仲間の反応を教えてもらいたい。2点目。トランスジェンダーの方との出会いはAのことを考えての設定だったのか。3点目。CがなぜAにかかわるようになったのか。本気で言える力はどこでどのように育ったのか。

報告者 1点目。Aに現在の状況を伝え、今のままではよくない。だから、Bと仲良くするためにがんばることを話すことがきっかけにつながったのではないかと。2点目。Aを中心としたクラスの実態を考え、打ち合わせを行った。様々な方との出会いに関しても常に教師の思いをしっかりと伝えることを意識してきた。3点め。最初は、CはAをさけてきた。BとDがつながってきたときにCがAに対して相談をしたことがきっかけとなった。つながってほしい2人であったので、教師側で仕掛けを行った。少しずつつながるようになってきた。

熊本 1点め。母親とのかかわりを教えてほしい。2点め。卒業式での決意表明をいうまでの教師とのかかわり、周りの子どもたちの受け止め、かかわりはどうであったのか。3点め。卒業後の引き継ぎ、関係性をわかる範囲で教えてほしい。

報告者 1点め。母とは5年生の頃からつながっていた。Aが自分の本音を伝えることができるようになってきたから。思いを伝えることで変わることができるかもしれないと思い始めた。2点め。6年間学んだことを自分の言葉で伝えることが大切。ここに向けて、発表できることを目標に取り組んできた。3点め。課題としては、Bとの関係の修復ができなかったことが心残りである。今までのとりくみは中学校にも引き継いでいる。卒業後の様子としては、CがAを支えながら、部活を

がんばっている。

奈良 1点め。たくさんの方の苦勞があったのではない。本音を引き出すことは難しい。本音を引き出せないことも多い。本音を出すうえで大切にしていることはどんなことか。2点め。決意表明はどんな場でおこなっているのか。

報告者 2点め。決意表明は、卒業式の間で行っている。1点め。何か行動があったときに、なんでそんなことをしてしまったのか、どんな気持ちだったのかを聞くことを大切にしていた。しっかり伝えたほうがいいので、伝えようとひとつひとつ大切に仕掛けを行った。

報告者 気持ちを伝えあうことはあらゆる行動の下支えとなっている。担任した子どもたちは、気持ちを表すことが苦手で、トラブルがあったときに、うまく伝えることができていなかった。日ごろの小さな積み重ねが大事でそのときがチャンスであるので、そのチャンスを逃さずに指導する。そして、時間がかかっても、子どもの言葉で伝えさせることが大切。戦争をなくすために大切にするには、何度も何度も対話をする。相手を説得する力が根幹となると思う。

**報告 4-③⑥ 部落問題を自分ごととして捉えるために、考え続ける
～子どもも、保護者も、教員も～ (三重県人教)
—主な質疑と意見—**

大阪 この報告に胸が熱くなった。何のためにとりくんでいるのかをよく考えることができた。地区学でのとりくみを教えてほしい。「自分の地域や人々、家族をかがえのないものとしてどこまで実感をもっているのかが見えてこないことが私の中で気になっている」ということについて、具体的な思いを教えてほしい。

報告者 地区学は、週に1回、ライトピアおおやまで行っている。HT(全校ヒューマンタイム)のとりくみの後のことを語り合ったり、友だち関係の悩みを語り合ったりしている。Aと話していると、様々な意見や知識をもっている。しかし、家族と重ね合わせていないことが気になった。それでも、父や家族を尊敬している。小学生からの積み重ねがないのが少し残念。それを今少しずつ積み重ねながらつなげているところである。

大阪 部落問題学習の授業について、詳しくききたい。

報告者 年間5回のHTの中で、3回は講師を招いている。必ず1回は、部落問題学習をテーマに取り扱っている。Aには、部落問題を昔の出来事として考えてほしくなかったの、現在起こっている部落差別について、川口泰司さんに来てもらい、話してもらった。それと同時に、事前に昔のこととして思っほしくないとAの強い思いをまわりの子どもたちが受け止めることができるように話の内容を打ち合わせた。

新潟 Aさんをはじめとして、部落問題にどうして、そこまでかかわることができるのか。

報告者 報告者自身の境遇がマイナスの面があった。自分の境遇には、知っていてもだれも触れてこなかった。被差別部落の子どもたちと向き合う中で、どうして自分の境遇を語らないのかと問われたときに、自分の境遇と向き合い、それがマイナスではなくて、自信をもっていいんだと部落問題学習に取り組むようになって考えることができるようになった。自分を解放させてくれたのが部落問題学習であった。だからこそ、自分がかかわっている地域や子どもたちのそれぞれの生活や思いに寄り添っていききたいなあと、もっとできることにかかわっていききたいと思っとりくんでいる。

三重 自分の子どもたちが多くの先生たちにお世話になった。長男のときに、真っ正面から部落問題にとりくむ先生たちから「部落問題について、家でどんなふうに伝えていくんですか」とつっこまれたのが、最初であった。地域から取り組んでほしいと訴えるのではなく、学校のほうから「お父さんががんばりましょうよ。今ががんばりどころですよ」という先生たちの存在があったからこそ、地域、家庭が自分は何者なのかを問い直すことができた。大山田中学校では、部落問題学習の様々なとりくみを学校が楽しみにし、PTAが楽しみにし、子どもたちが楽しみにしている。これがこの学校の部落問題学習だ。

協力者 レポートに大変胸が熱くなり、本当に早く語り合いたいと思っっていた。膨大な資料を読み直しながら、みんなで共有して、「寝た子を起こす

な」ではなく、どうやって進めていったらいいのかをしっかりと考え直おしていくべきだと思った。

報告 5-③ 友だちが自分に歩み寄ってくれたように、自分もお父さんと… (熊本県人教)
—主な質疑と意見—

三重 「家の人の仕事」が子どもたちにどのように響いたのか、進路公開にどのようにつながったのかを知りたい。

報告者 1年生では、「自分を語る」、2年生では「家族の思いを知る」3年生でもう一度「自分の生き方を公開していく」の3つの柱で進めている。3人にトラブルがあったときに、親が介入したことで子どもたちは切り離されてしまった。その3人をつないでいくときに、「どんな気持ちで育てているのか」という親の思いを知る必要があった。家の人の仕事というとりくみの中で、自分は大切にされているんだという親の気持ちを気付かせることができた。

大阪 「自分を語る」ということはすごいこと。そのことにとりくんでみて、子どもたちのようすや変容を教えてほしい。

報告者 3年間だけでとりくんでいるわけではなく、小学校からこのことにとりくんでいる。小中で一貫してとりくんでいる。最初から、とりくむことに抵抗を感じている生徒はいなかった。とにかく静かな環境を整えて、書けるようにしている。綴りに赤でやりとりしながら、時には直接読んで、今伝えたいことを大切にしたりくんでいる。

熊本(同僚) 私自身の経験を語る。自分が伝えなければならないことは何だろうと考え、自分のことをクラスで語った。そのときに、自分の病気のことで、自分自身が病気に対して差別心をもっていたことに気付いた。周りの支えの大切を実感できた。自分のことを差し出しながら、返していくことで、きつきや苦しみを共感し、差別と闘う仲間となることを期待して語っていく取り組みを3年間実践していつている。

奈良 自分を語る素地がない中で、実践を積み上げていきただが、どのようにとりくめばいいのかを教えてほしい。

報告者 中学1年生の最初で「わたしだけに伝え

たいこと」という課題を出した。苦手なことなども書いてきた。2学期からは、なかまづくりのための「班ノート」を行った。必ず自分のくらしと重ねたことを振り返る。1枚文集で学級でみんなの思いを共有していく。文字を言葉で伝えることを段階に応じてとりくみを深める。クラスの問題をみんなでどうかかわっていけばいいのかをみんなで話し合うとりくみを続けている。

大阪 1点め。本音を語ることで、大事にしていることはどんなことがあるか。2点め。続けた取り組みが子どもたちが社会に出た時にどんなつながりがあるのか。

報告者 1点め。とにかく子どもと話すこと。言葉のキャッチボールを行っていた。教師の側から仕掛けることで、2年め、3年めとなると子どもたちから気になることや相談したいことを話すようになった。2点め。相手をきくようなことにならないように、つながっていくことを見せてもらった。必ず一旦は相手を受け入れて、本当にそうなのかということを見極めて、考えていこうと話した。

大阪 先生の本気が子どもたちのモデルとなっている。クラスのまわりの子どもたちが3人のことをどのように語っていたのか、感じていたのか、どんな姿があったのかを知りたい。

報告者 何もできない自分でごめんね、と返す子どももいた。大さんの語りを聞いて、返しを行って、クラスみんながほっとできた瞬間をつくることができた。

奈良 関係が悪いからこそ、一緒にして出会い直しをする必要があると感じている。その勇気が素晴らしい。トラブルのあった子どもをあえて一緒にしたことであまくいかなかった経験やそのとき、どんな対処をしたのかを教えてほしい。

報告者 3年かけて仲間としていくことを学校のみんなで共通理解していくことが大切である。うまくいかなかったことは思いつかない。

熊本 このレポートが好きである。なぜか。小学校と中学校でなんとか解決していこうとすることが素晴らしいと思う。9年間で子どもを育てる意識が確立できている。本気で返すこととはどういうことかということ、「聞いたものの責任がある」

ということ。いろいろな差別をなくしていく行動が大切であり、そのための仲間をつくることが一番。そんななかまづくりを実践してほしい。

報告 6-③⑦ 部落の子や親から学んだこと (新潟県同教)

—主な質疑と意見—

三重 今となって考えてみたらでお願いします。HP、住所掲載等、記載問題について、今同じようなことを問われたら、先生はどうしますか。2 点め。先生自身が長年とりくんできたことが、今現在どのように実践として生かされているのか。他の先生がどのようなかかわりをしているのか。3 点め。「部落のことを試練と思っている」ということを今でも感じているのか。今でも下を向かされているのか。自信をもたせることはできていないのか。

報告者 今の自分だったら、太鼓は大事な仕事だと、隠さずに続けていくべきだと言える。当時は言えないと思う。HP、住所掲載等、記載問題について、今だったら「おかしいだろ」と言う。「だめだよな」と話す。今の自分の住む場所は、帰りたい大切な場所だと言える。そして、自分のとりくみは、どのような広がりを見せているかというところ、自分が勤務してきた学校では、「家庭訪問をしよう」と話している。親や子どもたちがどのような苦しみやつらさをもっているのか、思っているのかを聞いていくことが大切だと、大事だと、親と顔を合わせて語ることを訴え続けている。しかし、このようなとりくみが新潟や上越で広がっているかという判断できない。でも、これからがんばっていききたい。

三重 最初の質問について、ひとつだけ答えてほしい。HP、住所掲載等、記載問題について、何を感しているのか。「これはひどいよなあ」で終わってしまったはいけないと思う。このままではなくならない。この状況知って、何をしたのか、何ができただのか。

報告者 そういったことに気付かない自分がいた。指摘されたことを今後は肝に銘じて、とりくみを続けたい。

新潟 新潟のことを話す。太鼓やさんは全く運動していないので、子どもたちにも伝わっていない。

話をなかなか聞いてもらえない状況だった。HP、住所掲載等、記載問題については市長、教育長を通じて削除要請をして、上越では一生懸命に解放活動を行っている。林さんも一生懸命にとりくむ人だ。今、新潟でも運動をする人は少なくなっている。「寝た子を起こすな」と考える人も多くいる中で、そういう人も巻き込んで活動を行っている。

Ⅲ 総括討論

山口 子どもたちはいつまでも地元にはいない。後追い進路保証を行い、つないでいきたい。ほとんどの子どもたちは都会に出ていく。そんな子どもたちをどうつないでいくのかをみんなで考えていきたい。

奈良 卒業する 6 年生に小学校に帰ってこないでほしい。なぜか、それは子どもたちに辛いことやしんどいことがあったときだから。帰ってこなくていいように、回りをつなげるとりくみを続けている。林さんが A にずっと卒業後もかかわり続ける意図も知りたい。

報告者(新潟) かかわり続ける意図は、出会った子どもで、部落出身者である K と転勤したら終わりではなく、やっぱり気になるのでかかわっていきたくて思っている。今回学ばせてもらったことを今後のかかわりにつなげていきたくて思っている。

奈良 我々は親ではないので、一生かかわり続けるのは無理である。だから、小学校のうちにまわりとまわりをつなげるとりくみを精一杯行い、中学校は中学校でまわりとまわりをつなげるとりくみを行っていけばよい。その学びの中で子どもたちはつながり方を学んでいくと思う。A はどうやってつながっていったのか、まわりとつながっていったのか、知りたい。家庭訪問の大切さはよくわかっている。

報告者(新潟) A を中学高校はかかわれていなかった。だから、まわりとつながることはできていなかった。しかし、今から再スタートする。今までかかわってきた自分は覚悟を決めて、責任をもってかかわり続けなければならないと思っている。それをすべての教師にしてほしい、できるとは思わない。今は、しんどいことを話してくれた子どもとどうつながっていかうと思うかは今

までの経験があったから。

熊本 自分の地元では、小1から小3でなかまづくりを行う。小4で部落問題学習をはじめ、中1で自分を語るとりくみを3年間行っている。地域が一体となって取り組んでいる。そして、よく話されるのが、子どもたちのなかまづくりの前にまずは、教師の仲間づくりをしなくてはならない。どうつないでいくのかを考える前に、教師自身が自分の差別心と向き合い、どう闘っていくのかを真剣にかたりあっている。子どもたちが自分の課題に向き合い始める。そのことが子どもたちをつなげることになっている。熊本からも水平社創立大会に駆けつけていった歴史に学びながら取り組みを進めている。

三重 数年前に部落問題について考えるようになり、どこにでもある部落の話ではなく、自分の地区のことを語れる先生になってほしいと考えている。これが子どもたちにつけたい力になっている。ポジティブになれるとりくみを進めていきたい。差別をなくしていく運動や家族のかかえてきたことがそれぞれあり、家庭訪問で知ることができた。Kさんがネガティブになってしまっているところにとりくみが深まっていない。今自分がかかわっている子どもも自分がどう見らているか考えていた。教師がどうかかわっているか、かかわっていけばよいのかを考えている。

熊本 進路公開をしている。生き方の公開を行っている。どういう生き方をしたいかを綴っている。1年生の時から、自分たちの思いを伝え、返すということを大切にしている。教師がまず語り、子どもたちがそれを受けて返している。今の現状としては、部落問題を通して、自覚をもって語ることできていない。親の思いを受けて、つなげるとりくみが今後の課題である。

奈良 自分自身がむらの出身者であり、振り返りながら考えている。結婚するときに差別的なことがあった。そんな中でも自分はいい人生を送れていると感じる。それは何でか、考えてみると、大学時代に気を許せる友だちの存在が大きかった。わかってもらえたことが大きかった。教員のアプローチも大事あると思うし、自分が活躍できたり、話を聞いてもらえたり、かかわってくれた先生の

存在が大きい。自分も受け止められるようにとりくみを続けたい。自分の今後を考えるきっかけとなっていてありがたい。

大阪 進路保障のことで。つながりができて、なかまづくりができていると、進路保障につながるができる。でも、ずっとつながることはなかなか難しい。新しい人とつながりをつくる力を小学校でも中学校でもつけたい。自分は部落問題学習をやってもやっても差別がなくならい中で、差別する側の問題にたどりつき、そこで、人権・部落問題学習の実践をさらに深く取り組むようになった。すべての発達段階で人権・部落問題学習にとりくむ必要がある。それが進路保障につながる仲間づくりであると思う。

協力者 いつまでも地元にはいない。そのことを受けて、鹿児島のことを考えた。離島が多い中で、島には高校がないところも多く、島から出ないといけない場面がある。そうなったときに、いつまでもかかわりつづけることができないあと考えた時に、どうすればいいのか、参加者の意見を聞きながら考えた。つながりかたを学ぶ、教師の仲間づくり、反差別の部落問題が根底にある仲間づくり、生き方を学ぶ、日頃からかかわり続ける教師や仲間の存在をつくることに取り組んでいけたらいいと思った。

三重 子どもたちが社会に出た時に起こった出来事を話します。6名でパネルディスカッションをした。Aもパネラーとなった。PTAからもパネラーをだしてほしい。以前、自分たちで人権・部落問題学習をつくっていくと語り、とりくんだ方にパネラーとして参加してもらった。新旧オール大山田で大変盛り上がった。企画していく、共有していくことも立派ななかまづくりになっていたという実践がある。2つめ。以前、立場宣言した子どもがいた。その当時のことをお互いに覚えていた。ずっとつながっている。これも立派ななかまづくりだ。3つめ。Aが学校でいざこざがあった。教師がそれを見て見ぬふりをせず、一緒にクリアしてきた教師の存在は大変大きい。4つめ。自分を語ることでしか、人の心は動かせない。そこで、徳島のレポートで、遠いところにいるであろうBが実は隣にいたら、どんなとりくみになっ

ていたのか、考えてみるともっとできることはなかったのか、ちょっと気になった。

協力者 クリアしてきた出来事とは。

報告者（三重） 大山田の人権フェスティバルでAとBがパネラーを務めた。そんなAが自分の立場を伝えていく準備を地区学などで学んできた。しかし、事前にAの立場を知っているBがいた。なんでそんなことになったのか、考えていた。地区学の中では、Aの気持ちを考えるなかまがいて、まわりのなかまが自分のことを真剣に考えてくれていることがうれしかった。教師を含め、多くのなかまがかかわってくれたことで、Bとの関係は崩壊せずに済んでいる。AとBの関係は修復し、2人で考えてきている。

奈良 自分の語り切れていない綴ったことを話します。父は同和教育に熱心だった。自分が結婚するときに応援してもらえと思っていたが、反対されてしまった。家を飛び出して絶縁状態になってしまった。父を超えてやるという意地を持ちながら続けてきた。父ともっと早く話ができればいいなと悔やんでいる。だから、人権教育にしっかりと取り組まなければならないと思っている。若い先生たちが同和教育に熱心に取り組んでいるのをとても頼もしく感じている。自分のことをもっと伝えたいなあと考えて、がんばっている。だから、つながるということは、差別に立ち向かう人をつくっていく。会場みなさんも頑張っている。

報告者感想

奈良 聞くことが学びにつながるなど感じる。どうやってつないでいくかということを考えていた。地元のことが大事だなあと感じる子どもになってほしい。自分は友だちが大事だなあと思う。それは生き方によって人それぞれ。自分を語ることは素敵だなあ。自分を受け止めて、回りが受け止めてくれる。そんな中で人は成長していくと感じる。子どもたちの言葉やつぶやきを大切にとりくみを進めていきたいと思う。

徳島 2日間で思うこと。自分の考えが甘かった。自分事として考えると、自分の考えは非常にせまかった。今回の報告で、自分の考えがずいぶん

広がった。人権教育の創造について考えてみると、なかまをつなげていくことは大きな成果となり、実践につなげていきたい。

大阪 多くのことを学ばせてもらった。差別をなくしていききたいととりくむ人の言葉が非常に重かった。差別をなくしたいと思う人の思いをしっかりと感じていきたい。

大阪 多くの実践をきかせてもらって、先生たちの背景を知ることができた。それを知れてうれしかった。人の生き方にふれることができた。もっと話をしたいなあ、自分のことをきいてほしいなあと思った。人との出会いを通して生き方を知って、自分を開いていく部落問題学習は素晴らしいなと思った。チームで仲間とともにとりくめたことが本当によかった。

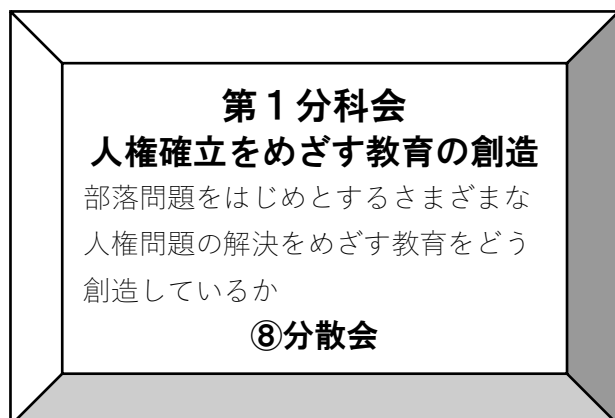
三重 部落差別の現実から学ぶ姿勢を持ち続けていきたい。これから子どもたちとともに学び続ける教師でありたい。個人で闘う力をつけさせたい。でも、なかまづくりも大切。もう一度、できることをやりきって、卒業後もずっとかかわり続けていきたいと思う。

熊本 根底にあるのはなかまづくり、それは教職員集団のとりくみだからこそ、できたことだ。支部や地域の支えがあったからできたとりくみだった。安心して語れる空間を作るためには、自分自身の語り、暮らしを差し出すことがベースにある。卒業後は人としてのかかわりがたいせつであると思っている。

新潟 なかまづくりがキーワードになっている。自分がやりたいことは、むらの子どもたちがつながって生きていけるとりくみを続けていきたい。今は、Kの父とのかかわりが楽しい。うれしい。父が心を開いてくれたことを真剣に考えながら、目の前の子どもを大事にしていきたい。自分が部落とかかわってきたことで、本当に自分のだめな部分が見えてきたが、あたたかさもすごく感じた。今の同僚や子どもたちにも生かしていきたい。排除せずにつなげていくことを語っていきたい。

協力者 これほどまでの深い学びがあった。多岐に渡っていた。自分が何者なのか。自分は差別者であり、あきらめてしまった。ここから自分の同和教育はスタートした。今回のテーマでつながる

ということがどれだけ大切かがよくわかった。その中で、自分の取り組みの甘さも痛感した。集団づくりは、自分事として、捉えさせただけではなく、そこから差別を見抜き、見つけて行動できる子どもを育てなくてはならない。考えるだけではなく、行動することが大事。情熱だけではだめだと思った。でも、情熱がないとだめだとも思った。差別をなくすために教育現場でどうすればいいのかを常に悩み続けている。それをひとりで悩むのではなく、チームで連携して取り組むこと、9年間取り組むこと、それを地元に戻っても取り組んでいきたい。そして、自分だけでは解決できないけれど、一緒に解決してくれる仲間を見つけ、最後は自分で解決していく力をつけていくことが大事。もっと多くの人とつながっていきたい。心の中で感じたことを地元で、職場で語っていただければ。この2日間、お疲れ様でした。ありがとうございました。



I はじめに

分科会基調は地元スローガン、大会テーマ、討議課題をもとに提案された。そのなかで、むなつき坂について「学校から部落までいくつもの坂がある。胸がつかえて足が上がらない状況」という説明、「水平社設立から100年だが部落差別がのこっている現状」「部落差別はする側の問題であるという認識」「全国からこの分散会に差別をなくすなかまが集い、元気をもらえる。お互いの実践を出し合い、一人でも多くの人に発言をお願いし、交流しましょう」とあり、討議の柱を確認し、報告と討論に入った。

II 報告及び質疑応答の概要

報告1ー㉔「すべての子どもに自分なりの差別とのたたかい方を ～部落差別を解消するための学習の授業実践及び授業提案に焦点を

当てて～」

(佐賀県同教)

ー報告の概要ー

地域の人権・同和教育を推進していく役割を担うことになったことがきっかけで、それまで前向きではなかった報告者が、当事者と出会い、直接話を聞くことで自身の経験とも重ね、差別への憤りを抱くようになる。そこから「授業で勝負したい」との思いから部落問題学習に取り組み、子供の思いに気づく。そして「出前授業」の取組へと広げ、若い教師への継承に取り組んでいった。

ー主な質疑と意見ー

大阪 奈良 部落問題学習を5時間の中で組み立てているが、その後の展開や子どもたちの変容、その他の人権問題に対する取組についてはどうか。感想を書いた後の取組についてはどうか。

報告者 子どもたちの様子について落ち着きがなく、乱暴な口調が多かったが、授業を通して言葉の重みを感じ、言ったらいけないことをいわないようになった。どの学年にも取り組んでもらい、同じ中学校に上がるもう1校にも同じ取組をしてもらっている。授業の板書と子どもの感想を教室に掲示してもらい、それをもとに振り返りをして次の時間につなげていった。

新潟 「自分事」とはどのような姿なのか。授業を通してどのようなことを大切にしていたのか。こんな活動をしたら子どもの行動につながったなど具体的に教えてほしい。

報告者 「子どもたちがそういう場面に出会った時、どのような行動をするか」ということを考えさせ、「できないことは書かない」と指示し、机間指導で問いかけさらに自分なりの答えを考えさせた。大事にしていることは教えこまない。最低限の情報を伝え、あとは自分たちで考えさせるようにする。すぐに行動がよくなる特効薬はない。繰り返し、失敗したときに自分たちの手で解決させていくようにもっていく。課題を乗り越えた経験をさせていく。自分自身のことについて、赴任するまでは他人ごとだった。道徳ではいけないのかと思っていた。部落史学習をしていく中で、何で今までしてこなかったのかと思うようになった。当事者との出会いもあったが、これまでやってこなかったことに対する反省が大きい。

滋賀 部落史の学習について、差別をなくす方の取り組みを紹介してほしい。当事者との出会いは設定しているか。出前授業の際、その学校に部落問題学習を行うために大事にすることなどを話していれば。

報告者 当事者との出会いは設定できていない。隣保館で地域のおじちゃんおばちゃんとして出合っている。資料として指導案とは別に、佐賀県同教から出ている歴史などを提供して知ってもらっている。他にも知識以外として授業を見ていただいて、子どもたちの声で授業を進めてほしいとお願いしている。

京都 授業で勝負だが、それだけではない日常のクラスの変容について、こぼれ話みたいなものを。

報告者 授業で勝負したい。教員として授業を大切にしたい。それ以外にいろんな関わり（昼休みの話・一緒にサッカー・持久走・人権総合学習など）もしている。

奈良 授業を通して、自分たちの地域とつながっていているのか。教材の吟味や地域を巻き込んだ地域の学習など、これからの学習について考えていければ。

報告者 夏休みに「わいわいキャンプ」を行政と支部が企画し、大人の話聞くことも。2校の子ども同士の交流を行政と支部が企画。子どもたちは地区が校区にあることに気づいていない。子どもたちを信じて話してもらう。自分は踏み込めなかった。そこが反省。

【報告2-③⑧】「全ての学校で部落問題学習を」 (奈良県人教)

ー報告の概要ー

保護者の部落差別発言をきっかけに、担任・人権教育主任・そして当事者として、学習や研修を通して子どもや保護者、同僚にどう伝え、実践していくか悩みながらも考え、少しずつ歩みを前へ進めている。

ー主な質疑と意見ー

奈良 ハートアップ研修と、他の実践内容について詳しく。人権教育の継承について、残していくために実践したことがあれば。

東京 人権学習、部落問題学習の素地がない環境で、取組の始め方、日常の取組をどう進めていったらよいか。

報告者 性的マイノリティーについての話の後はたくさん意見が出たが、中心に取り組んでいる部落問題学習についての感想などは出てこない。結婚差別の寸劇について、部落出身ではない女性の立場として考えさせたら意見が出た。テーマを絞って考えさせると出やすいのではないかな。継承については、ひとりではないことを心がけた。各学年部で紙芝居・人権読本などを使って考えてもらった。難しいが、一人、二人と広げ、そこから学年、中学部へと広げていく。諦めずに少しずつ広げていくことが大事かと思う。ハートアップ研修は10人ぐらいで入れ替わりもあるが、少しずつ増やしていつている。

奈良 差別意識がある保護者・家庭の意識をどう変えていけばよいか。保護者学習会の内容について。保護者からの発言やそれを通して子どもたちがどう変わったかなど。ハートアップ研修について自分の差別体験を語るのは難しい。子どもたちが語れる雰囲気を作るために取り入れていることは。

報告者 保護者の啓発はそこまでできていない。講師を招いて部落史の話をしてもらったが、発言した保護者は参加していなかった。子どもたちに「おかしい」と言える力をつける。10年前とアンケート調査の結果は変わっていない。その状況を断つのは、子どもだと思う。子どもに力をつけて子どもから発信させる。自分の高校生の頃の経験から、子どもに語らせることはしない。語れるときは語る。語れないときもある。強制はしない。

報告3-④②「福島は『家族』、家族は『心臓』～私を変えたHの言葉～」 (新潟県同教)

ー報告の概要ー

震災を機に福島から柏崎に移り住んだH。そのH本人と家族との出会いから、福島差別の問題が遠いところの問題ではなく、自分自身の問題だと気づかれていく。おとなが自分の生き方を見つめ直し、変容していった報告。

ー主な質疑と意見ー

奈良 本音で話し合えるように出会い直しがで

きたのはすばらしい。今まででは気づかなかった子どもを見る目が、どこで変容したか。そこまで思いを持って突き詰めていった心情を詳しく聞きたい。暖かいアプローチで心を開いていく過程、勉強になった。「いつの間にか H を学校に戻す目的がうすれていった」とあるが、その前と後の気持ちの持ちようが変わったきっかけは？

報告者 子ども一人一人ではなく、「学級」としてみている自分がいた。「おれがこの子たちを変えてみせるぞ」という意識があった。「柏崎に来てよかった」の一言が両親の言い方と一緒にあった。両親がちゃんと大事なことを伝えてくれていると実感した。

奈良 H の父の変容「ひめかはひめかだから」のきっかけは？

報告者 H の父が「お前がおかしい」と言ってしまったのは、バスケットを続けてほしいという思いが強かったから。謝ってくれ、トランスジェンダーのことを相談したときも、H の母との連携がしっかりとれていた。

奈良 子ども同士をつなぐ工夫は？周りの子どもたちとの関係は？

報告者 あまり意識してなかったが、H と M の二人を一緒に呼んで話をしたりした。周りの子どもたちとの関係については、いじめについて謝ってもらい、心の傷は消えないけど、それがあって、M と仲良くなれたと前向きに捉えていた。

報告 4-④「自らの人権を守る力を育む ～『ここに来れば何かが変わる』と思える環境づくり～」 (徳島県人教)

一報告の概要一

様々な状況や環境、経験を抱えて入学する生徒にきめ細かに関わりながら、自己肯定感や自己効力感を高め、自信につなげ、「すべての人の権利が尊重される社会の形成者として自らの人権を守り生きていく力を育む」ことを目指し教育活動を実践。様々な状況があるからこそ、お互いの思いを交流し合い、それが刺激となり、前を向いていく原動力につながっていく。生徒達が自ら互いに高め合い、教員はそれを支えていく。義務制の学校や他の学ぶ場での実践にも参考になる報告。

一主な質疑と意見一

大阪 自己肯定感が自校の子どもも低い。成功体験について生徒と関わる時に大事にしていることは？人権課題が多い生徒について教員集団の中での共通理解は？A さんがなぜ自分を語ろうと思うようになったのか。A さんやその母親との関わりについては？途中でしんどい、やめようかなという子どもにどう関わっているのか。

奈良 多様な生き方をしている人と子どもたちの課題を結びつけ、様々な仲間とどのようにつながっているのか。

報告者 最初は「何で」と思ったが、役割を持って成長する子どもを見た。いろんな子どもがいると感じた。子どもに話しかけて聞いてみて、自分の経験も話してコミュニケーションを取っていく。職員間の入れ替わりもあり、戸惑う人もいるが、生徒の情報を交換し合う。できごとや書いていたことなど。誰かが誰かの役に立つようにしていこうと共通理解している。A が発表してくれたのはびっくりした。生徒会の先生の勧めで発表できた。とくに A に話したことはない。母も外国から来て周りに相談できなくて、しんどかっただろうなと A は思うようになっている。今は母と離れている。A が「すみません」とよく言う。「大丈夫だよ」と返している。自分だけでなくいろんな先生が関わり、アドバイスをもとに過ごしている。

学校と地域との連携については、公的な団体、カウンセラー、地域のサポーターとつなげるよう進めたりする。がんばりたいけどがんばれない状況の場合は他の場所と一緒に探すこともある。「今は学校はいいです」と離れる人もいる。8 年間在籍することができる。在籍はしているが活動はしない生徒もいる。妊娠出産、家庭に入る、仕事をがんばる、好きなことを見つけたので、という人もいる。いろんな生き方を尊重している。

宮崎 学校が変わって通信制、不登校の後通信制という生徒がいる。面接でその理由を聞かれる。整理できていない子もいる。それを聞く必要があるのか。学校でも答える練習をしているが、校内での論議については？

報告者 今年の担当の生徒にそのことを聞かれ、それに答えた。通信制でがんばっているというこ

とを話している。

京都 通学範囲について、入試の競争率、定数内不合格はあるか、卒業率、転学について。

「公立通信制高校」とあえて書いている。私立と違うところについて。通信制の高校の楽しさ、普通高校との違い。

報告者 広い範囲から通っている。保護者の送迎、親戚の家から、鉄道で通う子。全県から来ている。入試は受けたら全員入れる。在籍から入ってくる子は転学、退学して入るのが編入、退学後、しばらくして入る子もいる。3：1で新入生が多い。公立と私立の違いは、公立は学ぶ内容が結構難しい。私立は単位が簡単に取れるが費用が高い。公立は安いので、選択する子が多い。普通高校では部活動に取り組んでやっていた。通信制に入って、それまでの自分の凝り固まった考えが崩れていった。子どもも教員も「いろんな人がある」ということを意識する。地域社会の一員だなということを使う。

報告5-④

「結心 ゆいしん～自分たちの未来につなぐ～」 (大阪府人連)

一 報告の概要一

「歴史の中で続いてきた差別と、地域の差別の歴史を学び、自身の未来へ行動できるよう学びを進める」「誰でも行える人権学習にする」ことを目標に、社会科や総合的な学習の時間の中で部落問題学習を6年間系統立てて積み重ね、6年間の集大成として行っている地域学習。その中で、子どもたちは地域や人との出会いと出会い直しをし、これからの自分を見つめていく。Aや周りの子どもたちが「反差別」で豊かに繋がっていく、そんな姿が見える報告。

一 主な質疑と意見一

新潟 Aは部落にルーツがあるのか。今のAとの関わりは？自分の変わり目は？

奈良 三重大会でも同校の取り組みを聞いた。前回は村へのルーツが見えにくくなっているという悩みが報告されていたが、地域との関わりは進んでいるのか？Aはルーツを自覚しているのか？

報告者 Aは部落の子。もっと自分を表現できるようになればとAと関わった。自覚していない。卒業後も「先生、フットサルこないの？」と言っ

てくれた。もっとAの母と関わっておけばよかったという反省。いろんなアプローチがあったかと思う。

大阪 3年前の報告者。学びを止めずに取り組みを続けてきた。みんなで考え、地域とも関係をつないできた。

三重 Aは自覚していないが、「弟が差別されるのは許せない」という思いはどこからか？

報告者 真意ははっきり分らない。母は「面倒を見てくれて助かる」「よろしくお願いします。」と言われたが、十分母親とは関わられていなかった。反省。

奈良 部落史学習について、どんな内容を？どんな話し合いを？具体的に。

新潟 水平社の学習で、「とてもうれしかった」とあるが、どこが？

報告者 ICTを活用。一揆に参加するのか、しないのか。一人だったら声を上げるのか、あげないのかなど、子どもたちの話し合いを行った。ただ「差別はあかん」だけでなく、自分だけではできないけど仲間がおればできるかなとか、子どもたちの心を揺さぶることができた。

徳島 「解放令」という言葉は？

報告者 教科書で記載されているので、そのまま使っている。

Ⅲ 総括討議の概要

大阪 差別する人がいるから差別がある。自分の差別心に気づいていくことが大事。同推校以外の学校から部落問題学習を。全ての学校で進める状況を作っている。

奈良 部落を「ムラ」と総称して呼ぶこと、ムラの子かどうかを聞く質問はどうか。全員の子を同じように見ていかないといけないのではないか。いろんな人権課題がある中で、なぜ部落問題学習を中心に据えなければいけないのか。

徳島 「心の教育」とは。部落史について正しい知識とは。それまで正しいとなっていた知識が変わることがある。

京都 授業の論議に偏っていないか。新潟の報告に、子どもたちの出会い直しがあり、学びになった。自分は出会いの場に立ちたいけれど立たないスタンスをとっている。私たちの知らない場所で

子どもたちが出会い直す空間を作る。子どもたち同士がつながるためにどのような関わりを作るのか。

奈良 部落問題学習を以前はピラミッド形式の身分制度で教えていた。今はその認識は間違いとなっている。正しい歴史認識をと学んできた。発達段階にそって教えることはあるが、教える側が正しい歴史認識を持たないといけないのではないか。学んで、上書きしながら伝えていく必要がある。

大阪 「全ての学校で部落問題学習を」に関しては、全ての学校でやっていないから。部落問題が見えにくくなっている。部落出身の後輩が亡くなった。差別の現実が身近にある。正しい知識を身に付けていたのに命を落とした。地域の人として見ることに對して、負のスパイラルがあると同対審答申にもある。その子の学力の背景に差別があるのではないかと見る。

奈良 『全ての学校で部落問題学習を』という冊子がある。部落問題はなくなっていないからする。知らないものは知る。失敗はあるが、その時はベストだと思ってやっているはず。やめたらあかん。部落差別はなくなっていない、だからやる。それだけだ。

福岡 やる気が出た。自分はできていない。「気づき・考え・行動する」を大切に、浸透している。教師の学びが必要。

奈良 部落差別はあるが見えにくくはなっている。幸せになってほしい。知らないことで、自分が会ったときにどうするか。知らないでいいのかと思う。知らなかったらその人の幸せを奪ってしまう。

奈良 掖上小学校は水平社発祥の地。部落問題はあたりまえのようにあるが、そこにどんな思いがあるのか。どう差別と向き合っているか。我々自身がどう出会ってきたかということを研修で語る。語らないことも保障し、確認したり見直したりする。地域の歴史を学び、子どもたちが自分はどうなのか迷い、聞かれても返せるものを持つよう共通理解している。教職員同士が一枚岩になっているか。小学校から中学校に行った途端にということをよく聞く。小学校の格差については足並みをそろえている。部落問題は周りの問題。する

側の問題、だから、ない学校こそやっていってほしい。苦勞されているのは分かるが、思いを持っている先生が続けてほしい。「ムラ」とか「部落」とかはどうでもよい。差別に出会ったとき命だけは絶ってほしくない。自分の失敗に気づいた。自分はどんな位置に立って、ものを言っているのか考える。人とつながることは同和教育が大事にしていたこと。学習の中には出会いがある。学習だけではなく、そこを大事にしたい。

大阪 差別事象があったからしていくということではなく、どうしていくか話し合っていた。共有しながら進めている。卒業した高校生がカウンターをしていった。

奈良 大阪の報告で、Aさんが発言したことはすごい、学習の成果と思う。背景について分からないと言われたが大事。

京都 「部落」は周りからの眼差しで成立する。マイナスの眼差しで見る。周りの人間がその子が部落と知ったとき「部落の子」と見る。どこまで広げる？部落問題、在日、障がい・・・ありとあらゆる差別の問題を学ぶ必要がある。なぜ部落問題になると口をつぐませるのかを考える必要がある。

東京 人権教育＝部落問題学習になっている。「さん」付けしたら人権教育という人がある。それでいじめや差別はなくなるのか。学級開きから時間をかけて学級経営をしているが、東京ではそうではない。「ムラ」「地区」という言葉について、現在も差別はなくなっていない。地区がさらされている。いろんな人が出はいいし、どの子かというのが難しい。

新潟 「自分事」について「こんな勉強するから差別が起きる。でも違った」と感想を子どもが書いた。どちらの立場にもなりえる。そんな変わり目を確かめ合う必要がある。自分の立ち位置を確立し、子どもに返していく。

報告者（佐賀） 心は判断し、選択する力。「できるかできないか」ではなく「やるかやらないか」難しさを超えていくための根っこは「子どものためになるかどうか」

報告者（奈良） 父の言葉。一人の人間として誇りを持てたらよい。自分自身として誇りをもてば

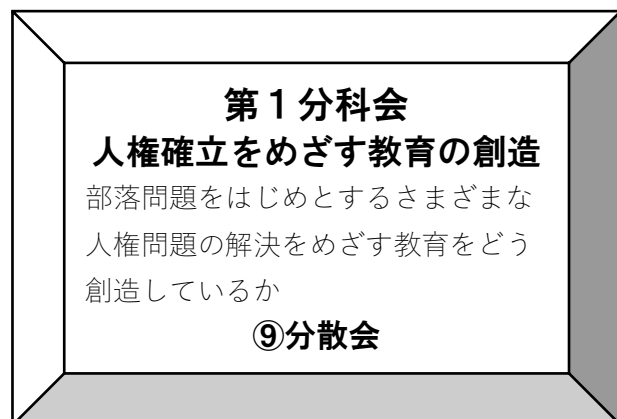
いい。部落問題学習を基にして、いろんな課題に気づいていく力をつけていきたい。楽しさもある。元気になる。

報告者（新潟） H「福島なしには人生を語れない」→自分は新潟柏崎を大切に生きているか。スタート時、来なくてよかった→差別者になっていた。福島の問題＝部落差別の問題

報告者（徳島） 通信制の報告をさせていただいた。今後も職員集団全体で対処していきたい。

報告者（大阪） 報告はこれまでの取組の積み重ねの中の一部。感覚をつけていくこと、アップデートしていくことが大事。

まとめ 「ここに來たからしっかりやる」→「どこでも」ではないか。かわいそうなのは自分のことを語れない自分の方。反差別の仲間づくりの前に教員自身の仲間づくり。若い教員は「学ぶ機会を奪われている」→年配の教員の問題。子どもが自信をつけるためには→自分の故郷をしっかり知ることから始める勇気をもらい、また明日から目の前の子どもたちに返していく。



I はじめに

分科会基調は討議課題をもとに提案された。

さまざまな状況にある子どもたちの「いのち」「こころ」「からだ」が危機を訴えている。だから、一人ひとりの子どもの生活実態を丁寧につかみ、事実と実践に基づいて課題を明らかにし、教員が、保護者が、子どもがどのように変容していったのか、何に気がついたのかを明らかにし、討論していくことを確認した。

II 報告及び質疑討論の概要

－報告1－④ あの子に気づかされて
(奈良県人教)

－主な質疑と意見－

福岡 部落問題学習の構成を聞きたい。

新潟 春日権現霊験記と渋染め一揆の他に用いた教材にはどのようなものがあるか。特に現代のものについてはどうか。

報告者 霊験記からスタートし、龍安寺の石庭の話、身分制度のこと、解体新書のこと、うわさを題材としたテーマ（ひろめてはいけないのに、なぜひろめるか）などといったものがある。

千葉 子どもの「目立った一面ばかりを見る」のではなく、「さまざまな面を見る」へと変わっていくためのポイントは何か。

滋賀 Aさんの家庭のことを知りたい。暴力の背景には何かがあるのではないか。

神奈川 なぜAさんにこだわってかかわってきたのか。手が出たり、からかったり、それなのになぜ家庭訪問ができないのか。Aさんはどういう風に生きてきたのか。

報告者 Aをずいぶん叱ってきた。叱られる子という印象を周囲に与えてしまったかもしれない。お家の方から「うちでも叱ってしまっている」という話があった。「電話連絡で済ませてしまっていた」がために、家庭訪問をしなかった。

長野 修学旅行の就寝班を決めるときにCとDと一緒に報告者に訴えにきたのか、別々に来たのか。「いっしょに寝たくない」と言われたときに、言われたAは相当につらいと思う。3人を集めて、どうしたら一緒に班でいけるのかを話し合わせたとき、どのような言葉かけをしたのか。

報告者 CとDは別々に来た。グループを変えたら解決になるのかと迷ったが、いっしょに行ける方法を探そうと考え、相談をした。「困っていることを直接伝えてみ」といった。「それやったらオレがほかの班に行く」とAが言うので「一緒に行きたいんやないの」と伝えた。そして「いいところを伝え合おう」という方向へと進んでいった。その後、CとDからAを試すという意味ではなく、「Aを信じてみる」という前向きなことばが出てきた。

－報告2－④ 差別に負けない空気を吸って (新潟県同教)

－主な質疑と意見－

滋賀 差別に負けない力、仲間づくりも大切だが、

その周囲の子どもたちはどう変わっていったのか、どうかかわっているのか。お父さんのことを話せなかったAのために、なぜ報告者は踏み込めなかったのか。

奈良 新発田以外の地域の取り組みについて聞きたい。

鹿児島 差別と闘い続けるHさんの原点を聞きたい。

新潟 Aさんのアイデンティティにとってムラのことと学校のこと、どちらが大きかったのか。

報告者 600人の生徒のなかで、ムラの子はAだけだった。歴史について学ぶことも大事だが、いまHさんがどう生きているのかを学ぶことが大切だと考えた。Aの父のことで踏み込んでいけなかったのは、AをHさんの孫として付き合い続けたからなのかもしれない。「あの先生、おばあちゃんの友だちなんだよ」とAは言っていた。部落差別をなくしていくために、レポートを書き、報告をしつづけていきたい。

兵庫 部落問題学習の当日、Aは体調不良で欠席した。そのことの真相を聞きたい。Hさんの孫としてではなく、「お父ちゃん、このごろどうしているの」とAさんに訊けなかった報告者の迷いについて聞きたい。

新潟 新潟で唯一の「かかわる教員」である報告者に敬意を表する。その一方で、苦しんでいる生徒に加配教員が向き合えないような体制の学校が一部にあるのではないか。

一報告3-④ 専門高校の学びの特色を生かした人権教育の推進 ～農業教育を通して、命の尊さや豊かな心、温かい人間関係を育てる～ (高知県人教)

一主な質疑と意見一

滋賀 「対話が深まった」というが、いままでとは違う深まりとはどのようなものなのか。具体的な子どもの姿を教えてください。教員の意識の変容を聞きたい。

福岡 全職員での人権学習の取り組みを進めるうえで、職員が集まって話す時間をどうやって確保しているのか。

報告者 学校全体がはじめは非協力的だった。人権の視点で指導案を書くとなったときに戸惑い

もあったが「普段の授業の取り組みが人権にかかわるとりくみなんだ」というアドバイスで変わってきた。

長野 部落の子がいるのか。かかわる同和教育を作り直していくことが必要だと思う。

報告者 数名いる。地区がないところでは取り組みが行われていない現状がある。教員たちにも知識や経験が不足してきている。

山口 「人権教育の視点」とは何か。個別の部落問題学習の実践があるのか。しんどい子の変容を聞きたい。

報告者 人権が尊重される授業実践の例として、生徒たちが授業に参加している実感、必要とされている実感が得られる授業、自己選択ができる経験を積む授業に取り組んできた。お互いの意見を認め合う、というスタンスで授業がつけられている。また、LGBTsの生徒が学ランを着ることを認めたケースがあった。

奈良 座学とは違う生徒たちの姿が思い浮ぶ報告だと感じた。トランスジェンダーの生徒のことを周囲の生徒たちは知っていたのではないか。

報告者 周囲の生徒で、気づいていた生徒はいたのかもしれない。保護者も分からなかったのではないか。一部の教員だけが知っている状態であった。「安心して学校に行きたいと悩んでいる人がいたら相談してください」と全生徒に投げかけたうえで、学ランへの変更を認めていった。

一日目の総括討論

兵庫 出身の人間が差別の問題にこだわるのはなぜなのかを考えてほしい。それは、厳しい差別の現実があるからだ。

長野 自分の実践を差し出すことが大事で、新潟の報告は胸に迫ってくるものがあった。その子とかかわればかかわるほど、家族のいかりや苦しみ分かってくる。そして、自分のダメさも分かってくる。「部落を大事なものとして生きていくこと」。このことを支えていきたい。

一報告4-⑤ 5年一貫看護師課程の生徒の倫理的感受性を育む取組 (徳島県人教)

一主な質疑と意見一

千葉 コロナ禍での医療従事者への偏見につい

て、生徒たちはどう考え、教員はどういう言葉かけをしていたのか。

報告者 学校の外では「あそこの家は病院に勤めよるんじゃ」などの言葉が交わされていた。生徒の一人目の感染者は、非常に苦しい思いをした。生徒たちには、感染してしまったことを責めるのはやめようという声をかけ、負けないでやっているかとよびかけた。

長野 入院歴の中で看護師に支えられた。看護志望の動機にはどのようなものがあるのか。志望の動機が5年間の中でどのように進化し、変化していくのか。また、男性の看護師志望の生徒はどれくらいいるのか。

報告者 「家族に看護師がいる」「入院経験で看護師に励まされた」などといったことが志望動機になっている。自分で決めた志望があると長い5年間を乗り越えられる。中学で志望を決めた生徒は早くひとり立ちしたいと考えているようだ。5年間の実習の中で、「この看護師さんすてき」というモデル像を見つけていく。いま、男性看護師志望は5年次すべての中で1人だけとなっている。中学で男子が志望を決めるのは難しいのかもしれない。

滋賀 医療従事者への偏見について。医療従事者以外の人たちに伝えたいことがあれば、教えてほしい。

報告者 偏見は自分だけの世界で生まれてくる。その世界を広げてあげることが大切だと思う。たった5分でも壁に向かって車いすに座らされることの苦痛をロールプレイすれば、「世界はひろがる」。

大阪 「一番不安に駆られているのは患者さんだ」という気づき、人の役に立つということの実感子どもにとって大切なことだと思う。

報告者 実習にあって生徒がよろこぶのは、患者さんから「ありがとう」ということばをもらうことだ。

高知 農業高校に勤務している。産業教育ならではの人権教育の取組の共通性を感じる。いまの高校生はコロナ禍でさまざま制限がかかっている。コミュニケーションの力をつけるのに苦労しているのではないか。どのような取組をしたか。

報告者 実習が外へのものだったときには「情報過多を整理してあげる」というパターンだった。コロナ禍で校内実習になったため、教員が患者役になるなどして対応していった。

兵庫 病院の待合室でお酒を飲んで暴言を吐くような来院者がいる。そうした来院者への対応についてどのような指導をしているのか。

報告者 問題行動の背景に何があるのかを考えることで対応が変わる。そのような行動を取る人には「しんどいね」と声をかけ、生徒たちには「なんでそういう行動が出てくるのかを考えよう」と伝えている。

－報告5－④ 集団づくりと探究型授業

～子どもたちから学んだことを子どもたちの学びに生かす～（大阪府人連）

－主な質疑と意見－

神奈川 付属高校の生徒たちのイメージを伝えてほしい。前任校のAという生徒はいい生徒だと思う。「自己満足だ」と指摘していったところがいい。そんなAはどういう生き方をしてきたのか。退学者は減ってきたのか。

報告者 付属高校は自転車で生徒が通う地域の中堅校である。前任校の退学者は50%から10%程度へと減っていった。Aの指摘は、現代社会のアイデンティティの単元で得意になって話をしていたときのことだった。家族関係で複雑な育ちをしていたAは進級していった。

大分 どういう場面で「生徒がつながっている」と感じることができるのか。

報告者 アイスブレイクの後の授業で、生徒のコミュニケーションのとり方が変わっているのが分かる。頼ったり、助けたりができるようになってくる。

千葉 ハートと理論両方もった報告者のような教員になりたい。「名前ビンゴ」のやり方を教えてほしい。

報告者 共通点があったら交換、なかったらドンマイ。コミュニケーションをとることを励ます、チャレンジをリスペクトする声かけが大事である。このゲームのポイントは、共通点が無かったらダメ、という考え方にならないようにすること。この次の段階で、違いは間違いではない、という

ことを確認していく。

滋賀 報告者のことをもっと知りたくなった。原動力は何か。

報告者 一度は「自分は不適格教員なんだ」とさえ思った。妻に「おれはやめたい」といったら、「その子らに失礼じゃ」と返されたことが原動力になった。

神奈川 アイスブレイキングを中心にした取組だけでは差別の現実や退学していった生徒と向き合えないのではないか、長く付き合いつづけることが大切なのではないか。

報告者 「先生は発達障害には詳しいけれど、私には詳しくない」と生徒に言われたことがある。生徒にいつも教えられている。しんどい生徒の背景について、言いたくなるタイミングを見ている。パンドラの箱をいつ開けるかは本人が決める。そのタイミングを見るためにパンドラの箱を生徒とともに抱えつづけていきたい。

二日目の総括討論

大阪 マイノリティーが看護や医療を受けるとき安心、安全が得られない現実もある。LGBTsの方などについての取り組みはあるか。

報告者（徳島） 日本の病院では家族関係の確認を看護師が行っている。家族関係の確認のあり方などについて、看護師も声をあげていかなければならない。

兵庫 兵庫の先輩教員に「お前な、部落から逃げたらあかんで」と言われたことを忘れない。荒れていた子が解放学級に来たらちゃんと座る。その子とはいまも付き合いがある。

兵庫 自分の息子が今年、結婚差別を受けた。長い時間をかけて話し合い、結婚することができた。

長野 中学校3年の担任をしている。秋の人権週間で、ドキュメンタリー「結婚」で授業をした。そんななか、立場宣言をする生徒が現れた。それは自分にとっての部落を考えることにつながった。父と母の人生すべてが部落差別との闘いだった。それを生徒に語っていった。

長野 差別の現実を突きつけられるのは、データや論文ではなく、一人の子どもとかかわりつづけていく中でのことである。その子どもを取り囲ん

でいる差別の現実と闘っていくために子どもを強くしていかなければならない。新潟の報告はそのことを教えてくれた。

山口 水平社創立100年。もう部落の子を前面に立てるのはやめたらどうだろうか。部落外の子を差別を許さない子にしていく取組こそがいま求められているのではないか。

新潟 子どもや孫の代には部落差別がないようにしたいと思い、運動を展開してきた。教育のとりくみにもかかわるようになってきている。

報告者 Aの周囲の子は、本当に差別に怒れる子になっていた。子どもたちが部落に出会うことが大切なのだ。

滋賀 部落の子がいる、いないで議論していくことに疑問を感じている。山口の発言者に共感する。

大阪 「部落外の子を差別を許さない子にしていく取組こそ」に共感する。ベトナムの子が「あんたら差別するやん」と指摘した。この国の差別の現実の根には、部落差別があると考える。

神奈川 ずっと長く付き合い続けていくこと。自分のわからなさ、いたらなさへの気づきが原動力になっている。

協力者 実践報告協力者を担当したのは今回が初めてであった。「教員は子どもとどう向き合うべきなのか」「部落差別とどう向き合うのか」「自分を問うとはどういうことなのか」。この3つのことを考えた。

第1分科会
人権確立をめざす教育の創造
部落問題をはじめとするさまざまな
人権問題の解決をめざす教育をどう
創造しているか
⑩分散会

I はじめに

分散会基調は、研究課題、基調、および討議課題をもとに提案された。その中で、実践協力報告者の所属地域で起こった「神奈川県人権啓発セン

ター」による You Tube へのアップ動画や、教師による児童へのいじめ行為の事案が紹介された。You Tube へのアップ動画については、子どもたちや保護者が不安な思いになり、部落差別が今もある大きな課題であることを確認した。教師による児童へのいじめ行為については、単純ないじめ行為ではなく、その背後にある根深い障害者差別が行為者だけでなく、学校全体、もしくは社会全体の課題として挙げられることが指摘された。

最後に討議の柱が確認され、報告・討論に入った。

II 報告及び質疑討論の概要

－報告 1－㉔

社会科を通じた S D G s の実践～生徒の身近な課題意識から～（奈良県人教）

－主な質疑と意見－

東京 貧困で苦しんでいる子どもたちへの取り組みはどうだったのか。

報告者 一定数、教室に入れない子どもがおり、一緒に勉強している。中 3 から勉強したいという子どもは S D G s の授業をしっかりと聞いている。自分自身の中に話が入っている。

鳥取 生徒の問題意識をもたせて解決していくとりくみ。課題解決型の学習としては素晴らしい。糞尿一掬から導かれるものは、生活が奪われることへの抵抗、つまり、権利の侵害がある。権利の侵害という当時の人々の思いと、協力が大事だという子どもたちの気づきの温度差をどのように捉えるか。

報告者 権利の抵抗としては確かにその通りであるが、結果としてパートナーシップにつながる。普遍的に考えると共通する。自分たちの地域のことを知ってほしいし、地域への誇りを持ってほしい。

奈良 先生方のがんばりが伝わる報告だった。時間数など具体的な取り組みの様子を教えてほしい。

報告者 1 学期から教材準備を始め、2 学期からスタート、2 か月ほど取り組んだ。授業時数としては 7 時間で、道徳や食育など横断的に取り組んだ。

－報告 2－(51)

明るく楽しい人権学習の一提案～ジブリで考える人権～（京都市人教）

－主な質疑と意見－

京都 差別はあかんと聞いているのに差別される。当事者にとってはしんどいし、辛いこと。かつては口に出さなかったら部落差別はなくなると考えていたが、自分の子どもの人権意識が高く、「なんで、先生、(子どもの人権感覚は) しっかりしてるの?」と尋ねると、「人権学習をしているからです」とのことだった。そこで親が学習していく必要性を感じた。昔は差別を肯定している自分がいたが、人権学習を受けると 180 度考え方が変わった。人権学習は幸せになるための学習、幸せに気づく学習であり、これが人権学習の持っている力である。

三重 いろいろなアプローチがあり、目からうろこの報告だった。差別構造について、どう考えるか。

報告者 差別は社会構造の中にある。今はグラデーションの時代で、その中で変わっていく人もいれば、変わらない人もいる。差別にどう対峙していくは、自らが選んでいく必要がある。

東京 差別があるということだけを伝えてしまっている。あるだけではなく、差別そのものがおかしい。授業ではどのようなことを工夫しているのか。

報告者 人間は尊敬するもの。差別に対して自分はどうなのかを問う必要がある。自分自身の経験も必要になる。差別にとらわれているのなら、なぜ、その差別があるのかを考える必要がある。自分が出した答えは自分で責任が持てる。

－報告 3－㉕

「誰にも言わないでほしい」ということをどう考えればいいのか（鳥取県人教）

－主な質疑と意見－

鳥取 報告者と重なり合うところがあった。勤務校で、小学校低学年で来日した東南アジア出身の生徒がいた。高校入学時には日本語の習得が高く、不自由をしていなかった。しかし、それまでの日本語の習得は大変だった。また、日本語を学ぶと

母語を忘れてしまうことがあり、それに気づいたときショックだったことを語ってくれた。宗教上の礼拝のため、別室を用意したこともあったが、もっとできたことがあったのではないか。今の高校受験には課題がある。生徒との関わりは自分自身の学びとなった。

東京 勇気のいる報告だった。「誰にも言わないでほしい」返せていない。日本への同化を肯定してしまう立場になっていないか。このままではまずいと思う。

報告者 答えが見つかっていない。なぜ、聞くことができなかったのか。自分が知っているつもりでいただけに、より踏み込めなかった。Bさんは何か壁をつくったのかもしれない。今もBさんと話をしていない。

東京 勤務校には外国文化研究部がある。外国にルーツのある子が自分のルーツを隠さず話せる場がある。そういう場が必要である。風土をしっかりとつくっていく。きっかけづくりが大事。

報告者 鳥取東部にはそういう場がある。西部はこれから。各校にあることが大事だと思う。

兵庫 外国にルーツを持つ子は言語面での大変さがある。みんなのサポートが必要。また、地域の大きな支援、斜めの関係が必要。そのためには学校と地域の連携が大事になる。人と人とのつながりの中で、自然に伝えられるような人間関係を築かないといけない。言わせるのではなく、自然に言えるような、打ち明けられるような関係が大事だと思う。

奈良 中国籍の子どもが、自分から国籍のことを話してきた。在日外国人の人権LHRの時には、事前に話をしている。

奈良 自己的人権課題を知ってほしいと言える子どもを育てるのに、どんな取り組みをしているのか。

報告者 学校教職員が壁をつくってしまうことが課題。積極的に聞いていくことが大事だと思う。学校現場の中に学校中心主義があり、学校側がハードルを上げているのではないか。

奈良 反省を伝えるのは大変なことだけど、勇気づけられた。日本人の父とフィリピン人の母を持つ生徒。急に母が日本語学校で勉強している姿を

見てみたいと言い出した。その姿を見て、自分自身も頑張ると言ってくれた。

－報告4－(52)

インクルーシブ教育実践推進校の取り組み(神奈川県人教)

－主な質疑と意見－

福岡 進級・入学の配慮はできているのか。生徒は進級できているのか。また、インクルーシブ教育入学生に対して、周りの生徒たちはどのような動きをとっているのか。

報告者 来づらくなっている生徒もいる。知的障害がある生徒や不登校を経験している生徒も何名かいる。また、進路を変更して、転学した生徒もいる。周りの生徒たちに、配慮してねとは言っていない。インクルーシブ教育を実践していることは知っている。共生社会の講演会を実施している。気づいている生徒は多いけど、変に枠組みをつけることはない。

福岡 2016年のやまゆり事件と推進実践校との関連はあるのか。軽音部合宿では、事前に何らかの配慮はできなかったのか。

報告者 特に学校で話はないが、インクルーシブ教育実践校の中では、前々からやまゆり園の話は出てきていた。夏休みに入ってから、合宿に行けないことを進路指導部に掛け合った。自分自身も疑問に感じていた。

奈良 支援学校から入学してくる生徒はどのくらいなのか。自立活動ではどのような活動をしているのか。卒業後の就労はどのようなものなのか。

報告者 今まで支援学校から入学してきた子どもはいない。中学校の支援学級、もしくは通常学級の子どもが入学してきている。自立活動では、内容として「人とくらし」にあたる部分に取り組んでいる。

ほとんどの生徒が福祉サービスを利用している。専門学校や4年制大学に進学する生徒もいれば、警察事務の仕事に就いた生徒もいる。

東京 何で特別支援学校に行かないといけないのかという声がよくある。全人教大会でこういう報告をしてほしくない。Aさんの話が聞きたい。全人教大会で、学校実践を報告する場であるはず。

奈良 入試においての配慮事項はどのようなものか。

報告者 試験は面接のみ。県で決められている。実践推進校のための準備グループがつくられ、特別支援学校経験者などがそのグループに入っていた。

－報告 5－㉔

どんな「障がい」？（福岡県同教）

－主な質疑と意見－

奈良 具体的にどのような教育活動に取り組まれているのか。

報告者 国語と数学のみ実態別に分けて授業をしているが、他は全員でそろって授業を行っている。国語では漢字の学習をしたり、数学では買い物の学習をしたりしている。

奈良 障害者理解の人権学習をどのように行ったら良いのか。

報告者 人権学習について悩んでいた。障害という言葉にとらわれないようにしている。まずは自分の得意、苦手なことを披露することをしている。知的障害は目には見えにくい。できないことはできないと言える力をつけさせる。苦手なことをみんなで克服しようという授業をしている。

東京 特別支援学校に入るのは A さんの希望だったのか。高等部への進学を本人はどうとらえているのか。

報告者 本人の意思よりも親が望んでの進学だった。中学部では進路学習会を年に 3 回行っている。本人は寄宿舎に入りがんばりたい、お金を貯めて独り暮らしをしたいと考えている。これまで、特別支援学校を卒業したことを隠したいという生徒がいた。障害者雇用があっても厳しい現状がある。

奈良 先生の変容が良かった。障害者の問題は周りの環境が大きい。社会に出たらしんどいことも多い。

福岡 教師の言葉がけが与える影響は大きい。これまで障害の重い子には「ちゃん」づけで呼んでいたが、みんなで「さん」づけで呼ぶように呼びかけた。重度の子どもに「何でそんなことができるの？」という言葉がけをする教師がいる。学校

の中では障害者差別が見えにくい。研修でやまゆり園の学習、しゃべれない人への殺害について考えた。先生たちはどう考えるのか。

福岡 A さんの成長は報告者の関わりが大きい。以前、生徒から「何でわからんの？」という問いかけに「わからんことはわからん」と答えていた。わからない生徒の気持ちがわかっていなかった。学校教育の中で育ってきた自分や高校教育の課題のように思う。

Ⅲ 総括討議およびまとめ

総括討議

報告者（奈良） 反省点が多かった。学び続けることは大事。大人がパートナーシップをしっかりとつくっていく必要がある。タテのつながり、ヨコのつながりをつくり、人権課題に取り組んでいきたい。

報告者（京都） 差別問題は千差万別で正解がない。未来を生きる子どもにはこういうふうに感じてほしい。

報告者（鳥取） なぜ、今でも B さんにこだわっているのか。私自身、日本人性と向かい合っている。マジョリティの中では見えていない、自分の立ち位置を考えている。

報告者（神奈川） 人に伝えることは難しいし、インクルーシブの難しさを感じた。今回の経験を生かして学んでいきたい。

報告者（福岡） 今回の学びから、自分で課題などを整理していきたい。どんな子どもにも寄り添えるようにしたい。

兵庫 先生という職業は素晴らしい。先生には元気でいてほしいし、食欲に学んでほしい。学校の中での取り組みだけでなく、家庭や保護者にも伝えてほしい。

福岡 子どもたちが安心できる関係性が大事。その子一人ひとりが抱えている人権課題がある。あることをないことにしないことが大事。

神奈川 教員になった頃、同和教育の研修があったが、わかりづらく関わってはいけないと思った。その学校には「早く転勤した方が良い」という先生もいれば、「この学校にはたくさんの宝物がある」という先生もいた。被差別部落に行ったこと

があるのか、問われ、被差別部落に通うようになった。今後に向けて、生徒に寄り添うレポートが出せるかが課題。今回のレポートに関しても、事前に報告があったが、結局分けているのではないかと指摘があった。神奈川では定員内不合格を出していない。重度の知的障害の子どもが入学してきたこともある。神奈川は入ったらどうするかで取り組んでいる。今回の参加が勇気につながっている。

奈良 良い機会となった。現在、セクシャルマイノリティーの生徒と深く関わっている。レポートに1つぐらいフォーカスされたものがあつたら良かったと思う。

福岡 目の前の子どもたちは、学校外で当事者と出会う。先生の中にも出会う機会がない先生が多いのではないかと。知らないことが多いのではないかと。

鳥取 学びになるレポートだった。多様な方が来られていたが、専門分野の人にしかわからない言葉のやりとりがあつたのではないかと。自分の専門性によりかかっているのか。自分がマジョリティだから気づいてない、ということも問い直していないといけない。自分が人権課題をどのように学んでいくのか。自分の捉え直しにつながると良い。

奈良 自分の中の決めつけに気づくということは大事。前回の三重大会の時、とある方が「自分のことを話せるようになるのに10年かかった」と言っていた。偏見や決めつけが自分の中に出ていないか。全人教が安心して発言できる場であると良い。

奈良 障害を性格ととらえていることが素敵なこと。全人教大会は、教員になる前に参加すべき会だと思う。

まとめ

3年ぶりの分科会の開催であつたが、参加者がさまざまな想いを語った分科会となった。また、テーマがSDGs、人権学習、在日外国人教育、インクルーシブ教育と多岐に渡り、多くの学びがあつた。内容面では、かつての全同教・全人教大会の良さを引き継ぎつつも、新しい捉え方な学び

の方法なども提案された(報告49・51)。一方で、インクルーシブ教育を進めていくには、どのように取り組めばよいのか、子どもたち分けるのではなく、同じ場での学びをどのように構築していくのか、私たち一人ひとりにつきつけられる場面もあつたように感じた。

一方で、今後の課題として、「性の多様性」のレポートがないとの指摘が複数あつた。各地域もすることながら、全人教大会の今後の課題として挙げられる。また、久々の開催ということもあつてか、フロアの発言が限られた参加者になってしまったように感じられた。分科会のテーマの多様性も影響したかもしれないが、今後、さまざまな参加者が発言し、語れる分科会をめざしていきたい。